有賀草悟はプロ野球選手になるようです

筆先文十郎

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

女性も男性と共にプロ野球選手として戦えるようになってから２０年後の２０１７年ドラフト会議。一人の男の名前に会場は大きくざわめく。

有賀草悟（ありがそうご）。

野球関係者が誰一人知らない高校生だったからだ。

プロ野球選手となった無名の新人はある目的を胸に野球界に足を踏み入れる。

目次

プロローグ　第５３回プロ野球ドラフト会議　第一話　投手失格　1
第二話　親友　14
第三話　ゴールデンルーキー対ベテラン左腕　26
第四話　春期キャンプ紅白戦　34
第五話　ルーキーと一軍半たち　50
南部無頼という男　68
ス・リーグ球団説明　74
幕間　遅れてきた男とスイーツ一軍選手たち　76
外伝　超王臣物語　89
幕間　エースとは　92
第六話　オープン戦　95
第七話　同年の好敵手（なかま）　103
第八話　大吾と草悟　107
第九話　公式戦　110
第十話　無頼と草悟　120
第十一話　ヒーロー無きヒロイン　134
智那と草悟　142
古山博光の憂鬱プロローグとその1　145
第十二話　憎悪　147
幕間　２０１８年ス・リーグ後半戦終盤　154
ファントムズ主要人物説明　156
外伝　中宮寺優奈子物語　159
最後の亡霊三連戦第２２戦前編　163

最後の亡霊三連戦第２２戦後編 179
古山博光の憂鬱その２～完結・古山博光の憂鬱 192
最後の亡霊三連戦第２３回戦 196
幕間　怨恨のフェニックス 202
最後の亡霊三連戦第２４戦前編 206
最後の亡霊三連戦第２４戦後編 216
外伝　杉井貴士物語 231
外伝　隠九条憂男物語 239
外伝　青津弥子物語 244

プロローグ　第５３回プロ野球ドラフト会議　第一話　投手失格

２０年前

上昇する野球人気に日本野球機構（ＮＰＢ）は『セントラル・リーグ』と『パシフィック・リーグ』のほかにもう一つのリーグを新設した。芽という意味を持つ。スプラウト・リーグ。通称ス・リーグ。

新リーグを作ると同時に日本野球機構は女性も参加できるようにした。

こうして女性も男性と同じ土俵でプロ野球選手として活躍できる環境となった。

プロローグ第５３回プロ野球ドラフト会議

２０１７年１０月２０日

「第６巡目選択希望選手。スイーツエンジェルズ、有賀草悟（ありがそうご）。投手。去華高校（さりばな）」

有賀草悟。

その名前に会場がざわめく。

意外な選手、もしくはあまり聞き覚えのない選手が呼ばれることはドラフトでは珍しいことではない。

しかし会場にいる人たちは未来のプロ野球選手なる素材に精通している。何かしらの場で活躍していれば誰かは知っているはずなのだ。

公式戦でも練習試合にも出場したことのない、全く知られていない選手が選ばれた。

そんな人たちが集まる場で、指名したスイーツ以外の人間が驚きを隠せないでいた。

▪★

（まあ、そうだろうな）

担当した御山（おやま）スカウトは自嘲気味に笑った。

有賀草悟を知ったのは今年の夏。しかも公式試合やグラウンドではなく彼の家だった。

きっかけは御山自身が担当した現スイーツの三塁手、隠九条憂男（いんくじょうゆお）の薦（すす）めだった。聞けば野球部に入っていないと言う。

野球部ではないのになぜ薦めるのか。御山には理解できなかった。しかし憂男が冗談をいう人間ではないことは分かっていた。そんな人間が熱心に薦める。

そこまで言うなら。

そんな気持ちで御山はまだ見ぬ青年がよくいるという裏山に足を運んだ。

音がしたので見るとそこにはボールを投げている青年がいた。

捕手に見立てた壁に全力投球している青年を、ばれないように御山はジッと見ていた。

スピードはあるけれどプロでは通用しないな。

それが御山の最初の評価だった。しかしダッシュの練習に変わるとその評価は変わった。

（これは!?）

脚力もさることながら走ってから最高速度まで到達する短さ、そしてすぐに止まることが出来る頑丈さと柔軟さ。一言で言うなら走り方がかっこいい。

その後バッティングセンターに行ったので後を追うと、再び絶句した。

打席に立つと際どいボールは見逃しストライクゾーンに来たボールは綺麗に打ち返していたのだ。選球眼といじる必要がないバッティング。

なぜこんな子が!?

野球部に所属していない青年がプロで通じるだけの実力を持っていることに驚くと同時にまだ見ぬ金脈を見つけたような高揚感を覚えた。

御山は青年にばれないように隠し撮りをし、無名の青年を取るように上層部を説得。青年の通う母校に青年にプロ志望届を出すようにお願いした。

そして今日。

スイーツの新たな一人として、有賀草悟は弱小球団スイーツに入団することが決まった。

★

『第6巡目選択希望選手。スイーツエンジェルズ、有賀草悟。投手。去華高校』

会場がざわめく中継を、一人の選手が自宅で見ていた。

隠九条憂男。

4年前にスイーツに入団。その後レギュラーに定着するほどに成長した。

無名の青年と初めて会ったのは2年前。シーズンが終わって母校で公演を行った時だった。

公演が終わりに近づく時。『最後の質問は?』という問いに一人の高校生が手を上げた。

『どうしたらプロ野球選手になりますか?』

少々見栄を張りたかった憂男は自分が課している『高校3年の時に一念発起して、朝500本の素振りしていた』以外にこういった。

『腹筋背筋、体幹トレーニングをしてましたね』

公演の一年後。

ピンポーン!

玄関を開けるとそこには一人の青年が立っていた。

公演の時に会ったことはあったが憂男は覚えていなかった。

『公演の時に質問させてもらった高校生です』

静かにそういった青年に憂男は思い出す。
その後、青年が言った言葉が憂男を仰天させた。
『あの時言われたことを実践しました。プロ野球選手にして下さい！』
驚きを隠せなかった。『どうしたらプロ野球選手になれますか？』の問いに答えただけで〝したらプロ野球選手にしてあげる〟とは言っていない。
何かを言おうとする前に青年は両手を見せた。
ボロボロの手。自分が高校の時に見た、本当に上手くなれるのかという疑問を振り払うようにバッドを振り続けたのと同じ手だった。
そして改めて青年の体を見る。小柄な体格。筋肉隆々というわけではない。しかし姿勢から自分が言った嘘を青年がやったことを悟った。
自分が言った嘘も含めて青年が実直に行っていた。
この青年がプロで活躍する場面が見てみたい。
たった一度しか会っていない他人が自分をプロにしてくれという無礼。もし自分のチームに入団したら自分のポジションを奪うかもしれないという不安。そんなことを考えさせないほどの想いが憂男の心を支配した。
青年に『僕の力では君をプロにさせることは出来ないけど出来るだけのことはするよ』と伝えて帰らせると、すぐに自分を担当してくれたスカウトに連絡を入れた。
『御山さん。ちょっと見てもらいたい子がいるんですけど――』
★
会場からショートヘアの黒髪女性が球団関係者と共に出てきた。
美空星蘭（みそらせいらん）。ヘッドコーチから昇格したスイーツの新監督であり日本

球界初の女性プロ選手になった人物である。
「美空監督。今回のドラフトの手ごたえはいかがな物でしょうか？」
「かなりいいドラフトでした。ほぼ考えていた結果となりました……」
　美空はドラフト上位たちの感想を述べていく。そして話題はある人物につながる。
「それでは美空監督。ドラフト６位の有賀君に関して一言お願いします」
「……」
　少し間を置いて、６代目女性監督は口を開いた。
「有賀君は高校生なので下でみっちり鍛えてもらい、将来スイーツを代表する選手になって欲しいですね」
▪★
　分刻みのスケジュールを終わらせ、美空はとある飲食店に来ていた。
『居酒屋らんちゃん』
　量は多く値段も安いが味と店主がアレのため客があまり来ないことで有名な店である。
「監督、お待ちしておりました。お忙しいのにこうして時間を作って頂いて」
　自分を見つけるとすぐに立ち上がり頭を下げる選手、隠九条憂男に
「そんなに畏まらなくていいわ。私も貴方と話したかったし」と言って隣に座る。
「まずはフルシーズン出場、打率３割おめでとう」
　ビールが入ったコップを交わす二人。
　監督にねぎらわれた青年は照れくさそうに頭をかく。
　隠九条憂男。
　４年前に高校通算本塁打７５という長打力を買われドラフト１位でスイーツに入団した内野手である。
　ただ初年度は緊張と変化球に戸惑い１００試合出場で打率．２２９。打点１９。本塁打３。三振１１０とプロの洗礼を浴びる結果と

なった。
２年目にはオープン戦で結果が出せず初めての二軍落ちを経験したが、そこで吹っ切れたのか開幕戦から5月下旬までに、３９試合の出場で打率．３６３、１４本塁打、３８打点（いずれもリーグ1位）をマーク。
憂男が二軍落ちしている間に三塁手を守っていた選手が足の故障で長期離脱したため再度昇格。
打率こそ．２５５と乗らなかったものの得点圏打率は．３５１と勝負強さを見せた。
３年目には背中の張りで一度登録抹消になったもののその期間以外にはサードでフル出場。打率．２９２、打点５９を記録した。
そして４年目。前年を大きく上回る打点８４。自身初めてとなるフルシーズン出場、打率．３１２。本塁打１５を記録した。
「来年も期待しているわよ」
「は、はい！」
感激のあまり体が震える。憂男はビールがこぼれない様に必死だった。
その後二人は料理と酒を口に運びながら様々な話をする。
話し合いも終盤になるに従って、美空は「聞きたいことがあるのだけど」と切り込む。
その真剣な表情に、憂男は少し身を硬くする。
「……」
「……」
聞きたいことがあるといったクセに、美空は暫く言葉を出さない。
コップのビールを飲み干した後、美空は重々しく口を開く。
「有賀草悟。彼をどう思う？」
「『どう思う？』とは……」
「言葉通りの意味よ。御山スカウトに彼を推薦したのでしょう。野球部に所属していない彼を」
「……」
（もしかして俺は責められているのか？）

冷や汗を流す青年に年上の女性監督は「ごめんなさい」と言葉を置く。
「そんな難しい顔をしなくていいわ。ビデオを見て彼の素質は優れたものだと私は認めている。優れた選手を薦めるという貴方の行動は褒められること。……ただ私は知りたいの」
「何を？」
思わず呟いてしまった口を慌てて塞ぐ憂男。そんな憂男に優しく微笑んだ後、美空は静かに言った。
「彼が本当にスイーツの将来を託すに相応しいか。彼を最初に見つけた貴方に」
全ての運命を託すかのようにたずねる美空に、憂男は同じような覚悟で言った。
「彼には間違いなくスイーツ、いや球界を変えるだけの力を持っています。でもその力はどこか脆くすぐに消えてしまう存在とも思えました。正直、プロでやれるか否かと言えば……何ともいえません」
「……」
美空は何も言わず真剣な眼差しで言う選手の言葉を一言も漏らさず聞く。
「そして。もし彼が――」
▪★
「……」
ドラフトが終わった一週間後。挨拶や手続きなどがひと段落着き、球界で一際注目されることになった青年、有賀草悟はベッドに座りボールを握っていた。
「ついに。あの男を倒せる一歩を踏み出したということか」
静かに、そして並々ならぬ憎しみを込めて脳裏に浮かぶ男の名を呟く。
「広田義信（ひろたよしのぶ）を」
広田義信。1年目からローテーションピッチャーとして一度の離脱もなく活躍し、3年連続二桁勝利という偉業を達成した先発投手である。

平均１４８ｋｍ、最高速度１５４㎞のストレートを武器にスプリット、カーブ、スライダーなどを精度の高い変化球。そして３年間で与えた与四球９８。与死球１４というコントロールのよさ。
通算打率．２７５．本塁打も３年連続二桁を記録している。
彼と出合ったのは中学一年の時だった。
草悟は広田がいる中学に入学した。憧れではなく家から近かったという理由だ。
入部して早々、彼は非凡な才能を発揮した。当時エースだった広田からホームランを打ったのだ。
余談だが広田が年下にホームランを打たれたのはこれが始めてだった。
その後彼は黙々と秘めた能力を研ぎ澄ましていき一年目からレギュラーを目前にした。ある事件が起こらなければ。
草悟が野球部に入部して2ヶ月後の日曜日。監督がロッカーに入れていた子どもの入院費数十万円が盗まれたのだ。翌日、その大金は見つかった。草悟が使っていたロッカーから。
きっかけは草悟が自主練習をするためまだ誰も来ていない部室に来た時だ。着替えるためロッカーを開けた瞬間、封筒が落ちたのだ。
(何だ?この封筒は?)
草悟が封筒を拾った瞬間だった。

やっぱりお前だったのか、息子の入院費を盗んだのは!!

振り返るとそこには顔を真っ赤にした監督の姿があった。
弁解するよりも先に監督の拳が草悟の頬を捉えた。
壁にぶつかった拍子に封筒の中身が床に散らばる。それは大量の万札だった。
そして狙ったかのように部員が現れた。
草悟が握っていた封筒。床に散らばる万札。その光景を見て「有賀、お前だったのか……」、「嘘だろ……」という声が飛び交う。

監督のお金を盗んだのは有賀草悟。

そう思われてしまったのだ。

その瞬間、草悟は野球部としての自分の立場がなくなったことを知った。

そして草悟は信じられないという顔をする部員の中で一人邪悪な微笑を浮かべる広田と監督のセリフで気づいた。

広田が監督のお金を盗み、草悟のロッカーに入れた後に『有賀が監督のお金をロッカーに入れてました』と告げ口をしたことに。

監督のお金を盗んだ犯人に仕立てられた草悟が野球部に在籍できるわけなく退部。その後彼が野球部に戻ることはなかった。

高校は家の事情でかつて中学の事件を知る者がいるものばかりのため野球部に入るわけにはいかず今に至る。

「広田義信。お前は、絶対に許さねぇ！」

草悟はボールを握り締めた。

第一話　投手失格

スイーツに入団した草悟は三軍にいた。

スイーツには一軍、二軍の他に三軍がある。ただしスイーツの三軍は故障選手がリハビリを行う、基礎を学ばせるための場所である。

草悟は黙々と練習をこなしていた。

ある日のこと。草野球チームと試合することになった。

一軍二軍と違い対外試合をすることはない。人数も少ないため紅白試合もない。試合をすることが異例のことだった。

▪★

試合は一方的だった。

初回。スイーツ三軍選手は相手投手の球を悉く痛打。

打者一巡の猛攻に先発投手は1アウトも取れず交代した。

リハビリ中だったりまだプロで活躍していない三軍選手とはいえプロ野球に携わる人間に認められた人間達なのだ。草野球チームの選手とは実力は桁違いだった。

打てばほぼ打者一巡になる猛攻で相手投手の精神を削り、投げれば外野に飛ばさないパーフェクトピッチングで相手打撃陣を意気消沈させる。

そして９回裏。３０―０という状況で草悟はマウンドに立った。

▪★

「……」

草悟はキャッチャーのミットをじっと見たまま振りかぶる。

１５０ｋｍ近いスピードのストレートがキャッチャーのミットに収まる。

ズドンッ！という重い音とその光景に敵味方にざわめきが起こる。

「……」

初球同様、キャッチャーのミットめがけて渾身のストレートを投げた。

再びズドンッ！という音と共にミットに収まる。誰もがそう思った。

カキンッ!!

打球はセンター後ろのフェンスに吸い込まれた。

スイーツ三軍が始めて与えた安打と得点だった。

キャッチャーが「出会い頭だ。気にするな」と草悟に言って戻る。

しかし心の中では「こいつの球は速いんだけど、打たれるな。悪くないのだが……」と思っていた。

その予感は的中した。

カキンッ!!カキンッ!!カキンッ!!

打球は今まで飛ばなかった外野に次々と飛んでいく。

草悟が投げる球は決して悪くはない。

だが打たれるのだ。コースはほぼキャッチャーのミット。手を抜いているわけでもなく失投もない。

再びキャッチャーがマウンドに行く。
草悟の目は泳いでいた。自分の全力投球が打たれる。何を投げていいのかわからない、自分が信じられなくなっている目だった。

もうこいつはダメだ。

キャッチャーは監督を見る。目が合った監督はゆっくりと頷いた。
投手交代が告げられ呆然としながら草悟はマウンドを降りた。結果はキャッチャーフライのアウト一つとったのみで自責点5、防御率135という成績だった。
その後ベテラン投手、久石(ひさいし)が2者連続三振で後続を抑え試合は30—5で終わった。
勝って当たり前だと冷静のベテラン。草野球チームが相手とはいえ勝利に喜ぶ新人。その中で草悟は一人悔しさを抑えていた。

▪★

試合後。草悟は監督室に呼ばれた。
「有賀、解ったか?」
「何が、ですか?」
監督の真剣な言葉に草悟は聞き返す。
「お前の球が、プロ……いや草野球のチームにすら通用しないことが、だ」
「……」
何も言わない草悟に監督は続ける。
「お前の球は悪くない。速さがある。コントロールもある。だが駆け引きを知らない、ボール球を使わない、変化球もさほど変化しない、クセがない正直な球。気持ちよく打ってもらうバッティングピッチャーのような投球だ。到底プロではやっていけん。それは最初から解っていた」
「……だったら、何でスイーツは俺を取ったんですか?」
無表情で尋ねる青年に監督はまっすぐな目で答える。

「お前は良い肩を持っている。投手にとって忘れがちなしっかりとした下半身を持っている。土台自体は良いものを持っている。プロの技術はないものの今の時点でプロに通じるための必要な基礎能力をもっている。その将来性をスイーツは買ったのだ」
「じゃあどうすれば通じる投手になるんです？」
「いや」
一つ間を置いて、監督は言い放った。
「お前には投手を諦めてもらう！」
その言葉に草悟はブーーーッと驚きを露(あらわ)にする。
「有賀。お前にはショートをやってもらう」
「ショート、ですか？」
「そうだ。お前は肩が強いが打ちやすい球しか投げることしか出来ない。それを矯正できたとしても時間がかかりすぎる。それならもう別のポジションで再起を図った方がいい」
「……」
「ショートは守備範囲が広く一塁に素早く送球したり中継などを行わないとため高い俊敏性と肩の強さを求められる。そして今のスイーツはＦＡでファントムズの強打者、中宮寺優奈子(ちゅうぐうじゆなこ)を獲得するなど外野手が埋まりつつある。内野手はまだ席がある」
「……」
うつむく草悟に監督は続ける。
「……今までの自分を捨てろと言われて素直に受け入れるのは難しいだろう。きついことを言っているという自覚もある。だが今日の試合でお前の今のお前ではプロでは通用しないということは解ったはずだ」
「……」
「悲しむのも解る、辛いのも解る。だが、その気持ちを捨て、明日に向かって羽ばたこうではないか！」
「何を勘違いしているんだ？」
「へ？」
意外な一言に、監督は目を点にする。

「俺は怒っているんだ！」
「へ？」
「最初からプロで通じないってわかっていたなら何でその時に言わない!?その間に打撃練習とか守備練習とかに時間を費やせたじゃねえか!?」
「そ、そうだな」
「俺は無駄に時間を過ごしたわけじゃねえか！もしかしたらめちゃくちゃ上手くなって美空監督とかの目に留まって一軍に昇格していたかもしれねえじゃねえか！この無駄になった時間、どうしてくれんだよ！」
「そ、そうだな」
「ｈｓどふぃさらえｒｊふぉじｔｗｒｑｆ；ｇｊつぎお；ｔ；りあが；お！（日本語で表記できないほどの罵声を監督に浴びせています）」
「そ、そうだな」
監督からすれば、１８歳の新人を傷つけないための配慮だった。しかし兎に角、一分一秒でも早く野球が上手くなりたい、勝ちたい。そう思っている当人からすれば大きなお世話以外の何者ではなかった。
怒り狂う草悟の罵声に耐えながら監督は思った。
こいつはプロ野球選手になれる、と。

第二話　親友

第二話　親友

「失礼しますね、大吾さん」

憂いじみた目を嬉しそうに細めた三十代前半の選手が一升瓶を片手に三軍監督、荒木大吾（あらきだいご）の部屋を訪れていた。

久石譲二（ひさいしじょうじ）。

強豪グリフォンズを支えていた左の中継ぎ投手だったが、左腕の故障と若返りのため戦力外になり、その後スイーツに加入したベテラン投手だ。そして先日行われた草野球チームとの対戦で降板した草悟の火消しをした人物である。

「譲二。これが試合だったら鉄拳が飛んでるぞ」

「試合だったら『荒木監督』ってちゃんと呼びますよ。大吾監督」

「口だけは達者だな」

そういいながらも大吾の口元は綻んでいる。

二人には奇妙な縁があった。

まだ久石がグリフォンズにいた頃、プロ初対戦の相手が当時スイーツのクリーンナップだった大吾だった。結果はもうすでに勝ちが決まっていた試合にさらに勝ちを印象付ける特大のスリーラン。

真ん中とはいえ低めのボールをスタンド上段に運ばれた。プロにはこんな人がいるんだ、と久石は思い知らされた。

そして大吾の現役最後の相手も久石だった。結果は初登板にホームランを打たれた球一つ分落としたフォークボールに手を出して尻餅をつく空振り三振だった。

三振にしとめた自分を久石が涙を流しながらニカッと笑っていた。

大吾さん、俺。ここまで成長しましたよ。

そう言っていた。

「ところで譲二。その一升瓶は特別な日以外酒を飲まないというワシに対するあてつけか？」

現役時代、大吾は大好きな酒がたたり体調を壊し怪我に悩まされた。ある日妻が脳出血で倒れた。一命は取りとめ軽い後遺症。『三流の妻として亡くなってほしくない』と心を入れ替えた大吾は大好きな酒を断ち、若手に混じって自ら特守を志願するなど人が変わったように野球に打ち込んだ。

そしてその年、スイーツ初のタイトル、首位打者に輝いた。

手首に当たった死球が原因で引退を決めた後も特別な日以外飲まないことにしている。

「あ、これ水です」

ズルッ！

大吾は転ぶ。

「いやぁ、やっぱり男同士で話し合うには酒が必要でしょう。でも大吾さんが飲まないから雰囲気だけでも」

「お前と言うやつは」

呆れつつも大吾の口元はやはり緩んでいた。

大吾はちゃぶ台にコップとツマミを置く。

「「乾杯」」

二人は水が入ったコップを一気に飲み干す。

「ふうぅ、美味いなぁ」

「ええ、便所の手洗いの水は」

「!?――」

流し台に向かおうとする大吾を久石は呼び止める。

「嘘です。実家から送られた名水百選にも選ばれる水です。手洗いの水だったら俺が飲むわけないじゃないですか」

「次やったら今度こそ許さんぞ」

大吾は元の位置に戻る。

「で、わざわざこうして来たのだから話があるんだろう？」

「先日の試合のことで」

「試合？」

「先日の試合、大吾さんが仕組んだことでしょう。有賀君のために」

「気づいておったか」

一回り以上も年下の相手の言葉に大吾は苦笑する。
「それはそうでしょう。三軍は俺みたいなリハビリ組や素質はあるけどプロで戦うには力がない新人（ルーキー）の場所。試合感覚を養うには弱すぎるし新人に自信をつけさすにしても弱すぎる。はっきり言って試合をする意味はなかった」
「……」
先ほどまでふざけていた男の言葉に大吾は一言も発さず耳を傾ける。
「となると答えは一つ。ある意味ドラフトで注目になった未知数の中の未知数の新人、有賀草悟の実力を見極めるため……いや、投手として失格だということを教えるため。違いますか？」
「その通りだ――」
だが何故気がついた。そう言いかけた大吾は唇をそっと閉じる。
久石譲二という男はプロの世界で何百人と投手を見てきたのだ。当然「この投手がプロの世界で通じるか否か」は判断できるはずだ。それが草野球チームに打たれるほどならばなおのこと。
「じゃあ聞こう、久石。お前はあいつがプロで通じると思うか？」
「無理ですね」
間髪（かんぱつ）いれず久石は言い切った。
「ほぉ、何故だ？」
「彼の身体能力は素晴らしい。身体能力だけ見れば俺が今まで見た新人の中でダントツです。だが、それだけです」
「……」
「野手はやることがいっぱいです。例えば塁に出たとき。彼はいい足を持ってますが足が速いだけでは盗塁は出来ません。今の彼では塁に出ても相手のけん制で即アウトでしょうね。少なくとも俺だったら間違いなく１０回やって１０回ともアウトに出来るレベルですね」
久石は自信満々な笑みを浮かべる。
一塁走者は左投手では盗塁はしにくい。左投手は右投手と違い一塁方向が見えるからだ。左投手である久石は何度も走者をけん制でアウトにしているが、それは彼が左投手だからという理由だけではな

い。
　クイックやけん制が抜群に上手いのだ。走らせたい相手を走らせない抑止力。粒ぞろいの投手を多く持つグリフォンズの中で一歩抜き出すために習得した久石の武器だ。ス・リーグ一（いち）の盗塁技術を持つと言われるコスモスターズの走り屋、鈴木真人（すずきまさと）も「久石＆谷田（グリフォンズの正捕手）から盗塁を試みるのは銃弾が飛び交う中に飛び込むくらい緊張する」と認めるほどだ。
「じゃあ塁に出た後の投手との駆け引きの練習は頼んだぞ」
「……へ？」
★
　リハビリ組ではない三軍選手（強化指定選手）の朝は早い。
　高校球児が朝練を開始するような時刻から、地獄の練習はスタートする。そのキツさは「血の汗が出る」と口をそろえていうほどである。当然慣れていない者は魂の抜けたような顔を見せる。
「……」
　他の人間がテレビやゲーム、過酷な練習の弱音や待遇への不満、将来の不安などを愚痴っている中、草悟は一人で野球の本を貪るように読んでいた。
　最初は仲間はずれにならないようにと話しかける先輩もいたが、監督にさえ暴言を吐きまくる草悟が周囲にあわせるなど出来るはずもなく、今では完全に孤立している。
　もっとも一人に慣れておりかつ三軍の選手を選手と思っていない草悟にとってはありがたい環境だったのだが。
「……」
　そんな草悟を長身の若者がジーッと見ていた。
★
　某日早朝。第三練習場。
「……」
　草悟は目を開けるとベッドの端に常備しているスポーツ飲料水とカロリーメイトを口にする。それからベッドの端に置いている本に目を通す。

食べてすぐに運動すると体に悪い。でも何もしないのはもったいない。そう考えてのことだった。
ある程度時間がたったのを確認すると、草悟は外に出てストレッチを始める。朝早くでかつ冬ということもあり入念に行う。
その後すでに生活の一部となっている素振り５００回を始める。
それが終わるとグローブを持ち、今まで受けたノックを思い出しながらボール処理のイメージトレーニングを行う。
一日でも早く守備になれるための、草悟が考えた練習だ。
これを皆が起きる少し前の時間まで続けた後、草悟は〝普通の〟三軍選手としての生活に戻る。
「……」
そんな草悟を長身の若者がジーッと見ていた。
★
某日。第三練習場。
土日祝日の三連休。多くの者が実家などに宿舎を離れる中、草悟は一人練習場で汗を流していた。
「雨が降ってきたな」
（体を冷やして怪我をするわけにはいかないな）
そう思った草悟は練習を切り上げ宿舎に戻ることにした。
「よお。ほれ」
玄関に立っていた長身の若者が草悟にスポーツドリンクを投げ渡した。
赤木康友（あかぎやすとも）。
ドラフト会議後に行われた入団テストに合格した高校卒で草悟とは同期になる。
身体能力では俺より劣る所はあるが、選手としての技術は俺より上。だけどすぐに俺の方が上手くなるけど。
それが康友に対する草悟の第一印象だった。
「……どうも」

誰とも交流を取っていない草悟はペコリと頭を下げると康友の横を通り過ぎようとする。
康友が何故いるのかはわからないが、草悟には関係なかったからだ。
「お、おおお、おい。ちょっと待ってくれ！話があるんだ!!」
慌てて康友が引き止める。
「話？俺にか？」
「そうだ、大事な話だ！」
変な男だ。草悟はそう思った。ここでは何だからと二人は食堂に場所を移した。
★
「俺がいたからビックリしただろ、お前？」
話を円滑に進めようと康友は笑顔で語りかける。
「確かにビックリしたけど、だから何？」
「え、えーと……」
興味がなさそうな顔でバッサリと切り捨てる草悟に康友は戸惑う。合同生活の中で、コミュケーション能力の低い男と理解していたが、実際に話してみると異様な話しにくさを感じた。
「あ、あのさ」
このままでは話が進まないと思った康友は思い切って言う。
「俺を仲間にしたいんじゃないか？」
「……お前、何を言ってんだ？」
あきれ果てる草悟に康友は心が折れそうになる。「あ、違うんだ」と言い訳をするかのように言葉を続けた。
『仲間にしたいんじゃないか？』というのは言葉の綾で……あ、そう！俺をお前の練習に混ぜて欲しいんだ！」
「何で？」
草悟の表情は変わらない。
「そ、それは……」
康友は意を決して言った。
「お前が凄いやつだからだ！」

草悟に色々言葉を並べたところで通じない。むしろ誤解を招く要因になりかねない。そう考えた康友は思ったとおりの言葉を伝えた。
「はぁ？」
一気に不機嫌になった草悟は嫌味に話し出す。
「高校時代は野球部のキャプテンで倍率２００倍という入団テストを合格したって聞いている。そしてこの間の草野球チームとの練習試合では満塁ホームランを含む７打点の大活躍。そんな赤木康友様が、草野球チームに防御率１３５という目を覆いたくなるような成績を叩き出され投手失格の烙印を押された俺のどこが凄いと思うんだ？」
（人はこんなに嫌味に話すことが出来るのか！）
そう思いつつも康友は挫けず続ける。
「確かに実績だけなら俺の方が凄いかもしれない。でも、俺がお前を凄いといっているのはそんなところじゃない」
「へー、ふーん、そうですか！だったら俺のどこが凄いのか言ってみろ！」
今にも暴れだしそうな勢いで言い放つ草悟に、康友は真正面から受け止めた。
「なら言おう！俺が凄いと言っているのはまさに〝有賀草悟〟という男そのものだ！俺は有賀草悟という男を尊敬している！近くにいて少しでもその凄さを見習いたいと思っている！」
「……!?」
康友の言葉に草悟が動揺する。まるで壊れたロボットのように右に左に小刻みに揺れる。
そして。
「４月１日だからって騙されねえぞ！」
「いや、今日エイプリルフールじゃないし！」
「さてはかぼちゃのお化けが俺を地獄に連れて行こうとしているんだな！そうはさせねえぞ！」
「ハロウィンじゃねぇよ！」
どこから取り出したのか。康友は巨大なハリセンを草悟の頭に叩き落した。

★

数分後。

「落ち着いたか？」

「……ああ」

草悟がいつもの誰とも関わろうとしない鉄面皮に戻ったのを見て、康友は話を続ける。

「まあ、ほとんど話したことのない人間が話しかけてきたんだ。信用なんてできるわけないよな。とりあえず話を聞くだけ聞いてくれないか？」

納得はしていないけど。その表情を隠さないまま、草悟は頷いた。

「俺がお前を凄いと思う理由。まず練習量だ。正直あり得ないだろ、あの練習量は」

「下手だから練習してるだけだ」

「そんな理由じゃ片付けられねえよ」

康友は諭すように言う。

「悪いがお前のことを観察させてもらった。言っておくけどストーカー目的じゃねえぞ」

釘を刺し、康友は続ける。

「お前は無駄口一つ叩かず常に何かを考えながら練習している。練習をさせられてる俺達と、練習をしているお前。練習の差は歴然だ」

「……」

「そして自由時間。お前は誰かの輪に加わることなく野球の本を読んでいた。お前は体を動かさず、野球の練習をしていたんだ」

「……」

「そして朝の時間。隠れて自主練している事に気付いたときは、本当に凄いと思った。お前はこの朝の時間で、夜の自由時間に見た本の内容や今まで練習を思い出しながら今の自分にはない野球の動きを染み込ませようとしているのは見て理解した」

だから、と間を置く康友。この後の言葉を印象付けるために。

「誰よりも多く、誰よりも質の高い練習をしてるお前を、凄い！と思うわけだ」

「――!?」
言葉を失う草悟に康友は続ける。
「次に凄いと思ったのは、お前の立ち直りの早さだ」
「立ち直り?」
何のことだ?という顔をされ、康友は『何のことだか解っていないのか!?』と焦る。
これ以上考えても時間の無駄と結論づけた康友は話を戻す。
「お前は自分でも言っていたように、前回の草野球チームとの試合で投手失格の烙印(らくいん)を押された。普通今まで頑張っていたのに配置換えされるのはショック受けるものだ」
「ショックを受けるも何も、他に向いているといわれたから」
「それだよ!」
ドン、と康友が机を叩く。
康友の声が急に大きくなり、草悟はビクリと身体を跳ね上らせた。
「お前は配置換えをあっさり受け入れた。受け入れただけではなくそのポジションを我が物にしようと一生懸命練習している。もう、それは執念といえるくらいに!」
「しゅ、執念?」
草悟の反応がわからない。が、気にせず話を続ける。
「……ちょっと昔語りをさせてもらおうか。ちょっと自慢話になるかもしれないが、許して欲しい」
草悟がコクリと、子供のように頷いたのを見てから、康友はポツポツと先ほどまでの悠長(ゆうちょう)な話し方とはうってかわった様子で話はじめた。
「親父が野球好きだったこともあって俺は昔から野球が好きだった。そして運がいいことに元プロ野球選手が近くで野球を教えているというくらい環境も整っていた」
「……」
「環境もそうだが元々才能があったのだろう。小学生の頃からその人の下で野球を学んだ俺は中学高校とキャプテンに任命されるほどの実力を身に付けた。残念ながら甲子園出場は出来なかったが、それで

も楽しかった……本当に楽しかった。後悔がないくらいに」
「……」
　後悔がない。その言葉は本当なのだろう。しかし苦痛をこらえるように言う康友に草悟は違和感を覚えた。
「情けない話だが。俺は満足してしまったんだ。周りより出来るということにあぐらをかいて。上を目指そうとしない。執着しない、これは野球選手として致命的な欠点だろ」
「……」
「高校を卒業する直前になって俺は気づいた。『もっと野球がしたい。もっと上手くなりたい』って。だから入団テストを受けた。高校を卒業したら家業を継ぐという約束を破って」
「……」
「そして俺は見つけた！俺にない、執念を持ったやつを！それはお前と一緒に進んでいくことで自分の物にできると！つまり、お前の勝利への執念を見習いたいってことだ！」
　困惑している草悟をみながら、康友は更に続けた。
「最後のお前の凄さは、信じているところだろ」
「信じている……？」
「頑張っていればいつかは必ず報われる、そう信じているからあんなに練習しているんだろ？」
「そんなわけねえよ。ただやらなきゃ何も始まらないからやるだけだろ」
「それを信じているって言うだろ。練習はキツイし、効果が上がっているか毎日目に見えるわけじゃない。だからみんな、楽になるためにどうしても自分に言い訳をする。『やっても無駄だ』、『こんなもんでいいか』とか言って」
「……」
「だがお前は徹底的にやる。やるって事に関して、全く迷いが無いんだ。それはお前がお前自身を信じているからだろ？でも俺は出来ない。自分に言い訳してしまう。だから、お前のそばにいてお前からその姿勢を学びたいんだ！」

草悟には自分なんかを凄いという康友の気持ちが理解できなかった。
しかし、これだけは理解できる。
康友は、本気で自分と一緒に野球をしたがっている。
「……」
「……」
沈黙が流れる。
「……俺と」
ポツリ、ポツリと草悟が口を開く。
「俺なんかと練習しても、メリットなんて……」
「そんなことはない。お前だってキャッチボールをする相手だったり、ノックとかしてくる相手がいた方がいいだろ！」
「……だけど」
「草悟！」
何かを言おうとする草悟に机を叩いて言い放つ。
「俺はお前に一緒に練習させてくれって頼んでいるだけだ。お前はＹＥＳかＮＯといってくれるだけでいい！」
まあ、最も……と康友は続ける。
「俺はお前がＮＯといってもお前にまとわりつくつもりだがな」
康友の笑顔に嘘はなかった。
「本当に俺のことを凄いと思っているのか？」
「ああ！」
「本当に俺と野球をするのか？」
「そうしてもらえると嬉しいのだが」
草悟の顔がぱあっと明るくなる。
「そ、それならしょうがないな。べ、別に嬉しくないからね！」
「これからよろしくな、草悟」
康友は初めて草悟という人間を理解した。
本当は誰かと接したかったのだ。ただそのやり方がわからなかっただけ。
行動のいろんなことに納得がいく。

敵意には過剰な敵意で返すが、好意に対する返し方を知らないのだろう。

その後二人は色々なことを話し合った。将来の自分がどんな選手になっているか。どんな活躍がしたいか。はたまた黒歴史にまで。

「あのさ、そういう話は周囲に誰もいないことを確認してから話そうよ」

ドラフト5位の高校卒の女性左腕、青津弥子（あおつやこ）に突っ込まれるまで。

もちろん弥子に聞かれていたことに二人は大きな心の傷を作ったのは言うまでもない。

第三話　ゴールデンルーキー対ベテラン左腕

第三話　ゴールデンルーキー対ベテラン左腕

春期キャンプ前。康友と弥子と打ち解けた草悟は練習時間が終わった後、自分達で色々な状況のシュミレーションをしていた。

「……」

少し離れたところで憂いじめた瞳が特徴的な男がジッと見ていた。

「あ、あの……どうかしましたか」

康友が強豪グリフォンズの中継ぎとして活躍したベテラン左腕、久石譲二に声をかける。

「あ、いや……僕がいないつもりで続けてくれ」

「あ、はい……」

実績あるベテラン投手が自分達を見ているのだ。そう言われて意識しない方が無理だった。康友と弥子は緊張しまくりだった。

だが監督にすら平気で噛み付くこの男には、ベテラン左腕は邪魔でしかなかった。

「見てるだけならどっか行ってくれませんか？邪魔なんで」

ブーーーッ×2!!

自分達にとって雲の上の存在と言える先輩選手に『邪魔』と言い切る草悟に二人は驚いた。

「邪魔、か……」

小刻みに体を震わせる久石を見て康友は「早く謝れ！」と草悟の頭を下げさせようとする。

「いや、確かに邪魔だったね」

笑顔でそう答える。だがそれは一瞬で真剣な表情に変わった。

「つまり見てるだけでなかったらいいわけだね？」

そう言いながらグローブを付けて歩み寄る姿は拒否すら拒む凄みがあった。

その凄みに康友と弥子は固まってしまう。そんな二人を見て久石は微笑む。

「そう緊張されると困るな。僕の練習に付き合ってもらおうと思って

いるんだから」
「勝手に話進めないでもらえます？俺らは考えがあってやっているんで。久石さんは怪我で歳なんですから縁側でお茶でも飲んでいてくださいよ」
表面上の言葉は丁寧だが、口調からは「怪我持ちの年寄りは邪魔だからどっか行ってろ！」と言っているのは明確だった。
「僕を年寄り扱いするのかい？グリフォンズで最優秀中継ぎ投手にもなったことがある僕を？」
「最優秀中継ぎ投手ですか、それは凄いですね。でもそれって過去のことですよね？じゃなかったらグリフォンズを戦力外されるわけがないですから」
その一言に、さすがの久石もキレた。
「上等だ！バッターボックスに立て！最優秀中継ぎ投手が過去のことなのか、お前の目で確かめてみろ！」
ベテラン左腕の怒声に、康友は歯をカタカタと鳴らし弥子はグローブで顔を隠した。
そんな中、怒らせた張本人はニッとしてやったりと笑みを浮かべる。

はめられた！

久石は試そうとしていた新人の挑発に乗ってしまったと気づく。
しかし一度燃えてしまったプライドの火は消えない。
久石は軽く肩を回すとマウンドに立った。
防具をつけた康友が歩み寄る。久石が何を投げるのか、それを確認するためのサインのためだ。
確認が終わると康友はホームベースへと戻る。康友の後ろには審判用の防具をつけた弥子が立つ。
左打席には試そうとしていた青年が自分を見ながら立っている。その顔には「最優秀中継ぎ投手の実力をみせてもらいましょうか」と書かれてあった。

久石は少しだけ口角を上げ、振り上げる。
左手から放たれたボールは外角低めに構えた康友のミットに収まる。草悟は微動だにしなかった。
「……えっと」
ベテラン左腕の顔を立てようとストライクと言おうとする弥子に、久石は言った。
「ボールだ」
その発言に弥子は「ぼ、ボール」と判定する。
(まさかあのボールを見極められるとは)
久石が投げたのは外角低めのストライクゾーンからボール半個分から一個分、ボールになるシュートだった。内野ゴロが欲しい時に久石が多投した変化球の一つ。
草悟の見逃し方から、久石は「草悟はボールが見えている打者」と判断した。
次に投じたのは内角低めのストレート。多少甘く入ったその球を、草悟はフルスイングした。
ダンッ!
打球は光と見間違うほどの速さでファールゾーンのフェンスに直撃した。
(こいつ!)
久石は表情を変えず心の中で呻(うめ)いた。
今まで多くの強打者と対戦した。さきほどのようなフェンスに弾丸のように直撃したファールも何度も見た。しかしそんな打球を放った打者はほぼ大半が筋肉隆々の選手達だった。
対する草悟は小柄で細くはないが太いわけではない。そんな彼がなぜ強打者達のような弾丸のようなファールが打てたのか。
疑問に覚えた久石の目に草悟のバットが見えた。
(なるほど)
合点がいった。
草悟が使っているバットは一般的な選手が使っているバットよりも少し短い。当然普通のバットよりも軽い。

一般的な選手以上のスイングスピードで打球を飛ばした。

久石はそう考えた。しかし久石は弾丸ファールを打たれたのは軽量のバットだけではないことを知る。

次に投じたのは外角低めのやや甘いスローカーブ。緩急で打たせて取る投手の最も自信のある変化球だ。

意とした球と違ったのか、振ろうとしていたバットが一瞬止まった草悟。

空振りになる、普通の打者ならそうなる状況だった。だが。

カキンッ。

下半分をこするように当てられたボールは三塁付近のファールゾーンに落ちた。

この時、久石は決して体格が良いわけではない草悟がなぜ弾丸ファールを打てたのかを理解した。

こいつ、スイングスピードが速いんだ、普通のやつなら振り遅れる球を当てられるほどに！

軽量のバットを使っているからではない。憂男が〝高校時代にやっていた〟ということをやり通したことによって出来た体のバネ。鍛え上げられた体のバネが弾丸ファールを生み出したのだ。

何がプロじゃ通じない、だ。

三軍監督の大吾にそう評価した自分を罵(ののし)った。

投手としては失格だったが打者としてはすでに一軍クラスと身にしみて感じていた。

際どい球を見逃すことが出来る選球眼。強打者が放ったのと見間

違えかつ振り遅れそうになるボールを当てられるスイングスピード。一流選手と言われる選手が持っている能力を高校卒の新人が持っている。

フルスイングしているのにも関わらずほとんど音もなく打球を振りぬくことも恐ろしさに拍車をかけた。

すげぇ新人が来たものだ。

打者なら一流選手と見間違えるほどの能力を持っている。そう評価を改めた。しかし、投手王国と呼ばれるグリフォンズで頭角を現し、最優秀中継ぎ投手に選ばれた男はこの黄金ルーキーを討ち取れると確信した。

次に投じたのはボールゾーンになる外角低めのストレート。当然草悟は見極める。

(これで終わりだ)

久石はボールを投げた。投げたのは外角低めでストライクゾーンギリギリのスローカーブ。

「!?」

思わず振ったバットの後にボールが康友のミットに収まる。先ほどの外角低めのストレートが残像として残り体が我慢できず早く振ってしまったのだ。また普通の選手なら辛うじて当ててファールやボテボテのゴロになるのが、草悟のスイングが速すぎるために空を切ったのだ。

「ば、バッターアウト!」

▪★

「どうだい?最優秀中継ぎ投手は伊達じゃなかっただろ?」

「……」

三振に打ち取られたのがよほど悔しかったのだろう。歯を食いしばって耐えている。

そんな草悟に久石は提案する。

「そんなに悔しいならもう一勝負しようじゃないか、というかそれが

僕の練習したかったことだし」
▪★
数分後。久石は再びマウンドに立った。
先ほどと違うのはファーストに弥子。一塁ベースに草悟が立っているというところだ。
「ルールは簡単。草悟が盗塁に成功したら勝ち。アウトになったら負け。簡単だろ？」
「……あの、久石さん」
「どうした康友」
「セカンド、誰もいないんですけど……」
「それが？」
「い、いや！久石さんがアウトにするにはけん制でアウトにするしか方法がないじゃないですか！」
「そうだけど？」
「いや、『そうだけど』じゃないでしょ!?」
「康友！」
草悟の怒声が響く。
「本人がそれで良いと言っているんだ。ガタガタ言うな！」
そう言うと久石の方へ視線を向け、言い放つ。
「だからって自分で作った不利な条件を負けた言い訳しないで下さいね」
「しないよ、負けたら焼肉でも何でもおごってやるよ」
▪★
（焼肉、焼肉♪）
リードを取った草悟はもうすでに何を食べようかを考えていた。
二塁には誰もいないのだ。キャッチャーからの送球でアウトになることはない。走れば１００％盗塁成功する状況だ。
走ろうと右足に重心を移した時だった。
バシュ
「あ、タッチ」
弥子のグローブが肩に触れた。

「い、今のはノーカンだ！」
「草悟。勝負の世界にノーカンはないよ」
弥子のツッコミにムムムと押し黙る。
「そんなに言うならもう一回勝負しようか？」
「もちろんだ！」
▪★
（今度は慎重にいこう。走ることさえ出来れば盗塁できるんだから）
草悟は少しずつベースから離れ、走るタイミングを窺う。
（よし！）
投げる動作を確認して動いた瞬間。
久石と一瞬だけ、目が合った。氷のように冷たい目に草悟は動きを止めてしまう。
ボールは康友のミットに収まる。走れば盗塁できた。しかし視線でけん制され、走ることが出来なかった。
（今度こそは！）
再びベースから離れ、走るタイミングを窺（うかが）う。
「……」
「……」
久石は長くボールを持つ。視線はキャッチャーの康友の方を見ているのに見られているようで走れない。
「……」
「……」
（えぇい！ままよ！）
痺れを切らした草悟が右足に重心を移した。次の瞬間。
その時を待っていたかのように久石が動いた。ボールはすぐに弥子のグローブに転送される。
（しまった！）
頭から戻るが無情にも草悟の手はベースではなくボールが収まったグローブだった。
その後もう一度やったが盗塁できずアウトになった。
もう一度しようといったが野球は3アウトということで草悟の泣

きの一回は却下された。

第四話　春期キャンプ紅白戦

第四話　春期キャンプ紅白戦
２月中旬　宮崎　天福球場

天福球場のスタンドから、とある女性が素振りをしている草悟を眺めていた。

ただ振っているだけではない。音がほとんどしない素早いバットスイング。一振り一振りかみ締めるように振るその姿には何ともいえない雰囲気がある。

「早いわね、入江（いりえ）」

スイーツの正中堅手、入江舞名（いりえまな）が振り返る。

小麦色の肌でバレーボール選手かと思うほどの長身、そして多くの人の視線を釘付けする巨乳の女性が立っていた。

中宮寺優奈子（ちゅうぐうじゆなこ）。

昨年ＦＡでファントムズから移籍した女性選手で、打撃面で常にタイトルホルダーを排出しているファントムズでクリーンナップを打っていた強打者である。

その脇には日本人男性を平均化したような特徴のない容姿の正捕手、スイーツのエース投手だった鳳火呼子（おおとりひよこ）の人的保障でファントムズからやってきた古山博光（こやまひろみつ）の姿もある。

余談だが同じ年に互いの選手がＦＡで移籍したことからＦＡトレードとも言われている。

「見てください、あの子です」

「どれだ……、あぁ。あのドラフト６位のか」

舞名が示す方向に優奈子の目が止まる。

選手は他にもいたが、前代未聞の無名の高校生ということで印象に残っていた。

「なるほど。バットが短いな」

「そしてバットスイングが速い。バットスイングだけなら四番の中宮寺さんや隠九条君よりも速いかもしれませんね」

二人は草悟が普通の選手とは違うこと点を指摘した。

「ね、変わってますでしょ？」
流石は弱小とはいえスイーツのレギュラーを奪うだけはある。舞名は素直にそう思った。
「お二人の言うとおりですね。普通は遠心力を利用できる長いバットであったり『同じスイングスピードなら重いバットが飛ぶ』ということで重いバットを好むのですが、彼は普通の選手が使うバットより短い」
「短いバットは芯に当てないと中々飛ばないし普通のバットと違って遠心力で打球を飛ばすのは難しくなるし外角に届かないというデメリットもある」
「まさしく未知数の未知数の新人ですね」
舞名の感想に、二人は大きく頷いた。
▪★
2月1日から、プロ野球では春季キャンプが始まる。
気候の暖かい場所にチーム全体で移動し、およそ一ヶ月にわたり練習が行われる。
目的は主に二つある。
一つはシーズンオフからの休養で鈍った野球選手のコンディションを整えることと、もう一つが来期の戦力を首脳陣がチェックすること。
但し、一軍が確約されていない選手にとっては正念場でもある。
キャンプは一軍キャンプと二軍キャンプに分けて行われるが、一軍キャンプにいるからといってシーズンの一軍が確定するものではない。
首脳陣へのアピールに成功し、一軍の切符を掴み取るための第一関門。
それが春季キャンプだ。
そして今、草悟は二軍の紅白戦のウォームアップを行っている。
草悟は赤組。七番ショートだ。
ちなみに赤組の先発は久石。白組の先発も左投手。
左投手が絶望的なスイーツでは、使える左投手を切望している。そ

れを象徴する今日の先発の布陣である。
「ナイスボール！」
草悟が視線を移す。
そこには弥子のボールを受ける康友の姿があった。
康友は弥子の専属キャッチャーのように球を受けている。
「調子はどうだ？康友、弥子」
草悟は親友二人に声をかける。
「待ちに待ったアピールする場だからな。もうアドレナリンで体が沸騰しそうだ」
「そのまま蒸発して欲しいものだね」
弥子のツッコミにショックを受けたのか、康友は胸に手を当てる。
「こらこら、弥子。康友が蒸発したら弥子の球を受けるキャッチャーがいなくなる」
「じゃあ蒸発するのは私が紅白戦でアピールしてからにしてね、康友」
「お前らひどすぎるだろ！」
康友の哀しい叫びが響く。
「えーい、だったら俺はガンガン打って一軍にいってやる！」
「康友は二軍の肥やしになってなよ。一軍にいくのは私よ！」
「まぁまぁ、ここは三人で行こうぜ！」
▪★
「……ですって」
一般女性よりは高いがけして体格に恵まれていると言えないショートヘアの女性捕手、日野陽子は隣に座る女性に言う。
「ふざけた話だ……」
１８０ｃｍは優に超える身長に背中まであるポニーテール、額に垂れ下がった触角のような四本の髪が特徴的な女性が不機嫌な声で呟く。
冷泉冬狐。
陽子と同じ大学卒の同期入団で８年目の投手である。
大声で話しているせいで、三人の会話はマウンド脇で休んでいた二人にも聞こえた。

「まあ赤木君には光るものがあるわね。正捕手だった篠原(しのはら)さんの穴を埋めるように鳳さんの人的保障で入団した古山さんが正捕手として活躍してますし。私もクビを覚悟しないといけないかもしれないかも」
「冗談でもそんなことを言うな！」
冬狐は大きく目を見開き怒りを顕(あら)わにする。冷泉冬狐という冷たそうな名前に反して、その瞳には怒りの炎が燃え上がっていた。
「でも事実よ。投手と違って捕手は予備を含め2，3人しか枠がないし、私はバッティング悪いからコンバートもないし。もう居場所なんてないかもね」
冗談を言うかのような口調で自らの立場を厳しく言う陽子。本心からそう思っていることを感じ取った冬狐は尋ねる。
「今まで捕手なんていくらでもいただろう。そして何だかんだ言ってお前は残っている。なぜそこまで弱気になる？」
「彼のバッティングは見た？」
「……いや」
「リストが凄く強かったわ。まだ荒削りだけど磨けば上位打線を担う逸材になるかもね」
「上位打線を担う逸材、ね。名キャッチャーとは言わないのね」
「ふふっ」
キャッチャーとしての能力は私の方が上。微笑にはそう書かれてあった。
冬狐は薄く笑った。
「ならいいわ。打つのもキャッチャーの仕事。だけどメインは捕ることとピッチャーをリードすること。それが出来るなら一軍に行くのは私たちよ」
（私たち、かぁ……）
陽子は冬狐にばれないようにため息をつく。
30歳にもなって一軍と二軍をうろついている選手は間違いなく整理対象だ。
一軍で使えるとアピールしなければ間違いなくクビにされる立場

だ。
隣に座る女はもうすでに一軍で通用する実力を持っている。後はそれを証明するだけ。なのに『私たち』と言う。
（私が一軍に上がれる可能性など絶望的。なのに二人でバッテリーを組んで活躍するという夢をまだ持っている。一軍で通用する実力を身につけたのだから一人で行けばいいのに――。バカな女よね、冬狐って）
内心とは裏腹に、陽子の口元は緩んでいた。
温かい日差しが入る球場で、様々な思惑と願望が交錯する。
その結末は、グラウンドだけが知っていた。
▪★
審判の「プレイボール！」の掛け声で試合が始まった。
最初にマウンドに立つのは久石譲二。
一軍に上がろうとする新人たちと一軍半の選手同様、この男にも期するものがある。
自分はプロ野球選手なのだ。
その自負がある。プロである自分がプロであると証明するには一軍で投げなければ意味がない。
実力世界のプロ。過去の栄光などあってないに等しい。
それは最優秀中継ぎ投手に選ばれた自分も例外ではない。
ならば証明しよう。俺は一軍で通用する投手である、と！
振り上げられた左手からボールが放たれる。
「ナイスボール、久石さん！」
康友がボールを投げ返す。
しかし康友の掛け声とは裏腹に、バッターは薄ら笑いを浮かべていた。最優秀中継ぎ投手に選ばれたって聞いたからどんなものかと思ったら。そんな笑みだった。

左腕を手術する前は１４５ｋｍ以上の速球を投げていたが、左腕を手術した今では最高でも１３８kmしか投げられない。そして先ほど投げた９５ｋｍのスローボール。ゆるい変化球が侮る心に拍車をかけた。

（だからお前は二軍なんだよ）

自分を見縊る二軍選手に久石は心の中で嘲け笑った。

２球目は外角やや低めのシュート。

バッターはサード方向にファールする。

追い込まれたというのにバッターは薄ら笑いをやめない。

（お前程度に遊び球など無駄だ。これで終わりだ）

久石が投じた3球目は内角高めの渾身のストレート。

逆を突く内角の突然の速球に「うわぁ！」と声を上げて尻餅をついたバッターに三振が告げられた。

▪★

４回。白組の攻撃が終わり久石はベンチに腰掛けて用意したタオルで汗を拭った。

「ナイスピッチングでした、久石さん」

久石は康友から手渡されたペットボトルを一気に飲み干した。

「ふ～む。４回1失点かぁ。良いとはいえないな」

「あの……」

納得がいかない様子で呟く久石に康友は突っ込む。

「怪我明け初登板なんですから十分結果をだしていると思いますけど」

「だが二軍の試合だ。この程度なら無失点でいかないと。それよりも」

久石は康友、そして草悟を見る。

「なかなかの活躍じゃないか、二人とも」

怪我明けのベテラン左腕は可愛い後輩ルーキーを褒めた。

三番キャッチャーの康友は2打数の2安打。その内一本がタイミリーだ。さらに盗塁も一つ刺している。厳しい入団テストを突破したのを証明するような活躍だった。

七番ショートの草悟は一つエラーをしたもののまだ慣れないポジションを無難にこなし2打数1安打1四球。新人にしては十分すぎる結果を出している。
「久石さん。私も忘れないで下さいよ」
いつの間にかブルペンにいた弥子の瞳が爛々(らんらん)に輝いていた。その目には『次は私が投げるので見ていてくださいね、私の大活躍を』とあった。
▪★
「何よこれ、負けてるじゃないの！」
ブルペンからでてきた冬狐が、スコアボードを見るなり怒りを顕わにする。
「ごめんね」
陽子は子どもが自分のしたイタズラをごまかすような笑みで謝る。
スコアは4—1。
冬狐たち白組が3点リードされていた。
「赤組は故障開明けのベテラン数人とルーキーで構成されている！二軍とは言え実質のプロは白組だぞ!?この編成で負けたら恥だとわかっているのか？」
「そりゃあそうだけど」
少女のような捕手は唇を尖(とが)らせる。
「久石さんは『流石はベテラン！』という老獪(ろうかい)なピッチングをしましたし、三番に入った赤木君が止まりません。七番に入っている有賀君も点には関わっていないとはいえ油断できない存在ですし。勢いも向こうにあって正直お手上げ状態なのによね」
「でも、それもおしまい」と少し貯めを作った後、微笑を浮かべて陽子は言った。
「冬狐、あなたが投げるのだから」
親友の殺し文句に乗せられた女投手は自信に満ちた笑みを浮かべる。
「ふふっ、その通りよ。ルーキーどもに私たちの実力を見せてあげようじゃない。いくわよ、陽子！」

「了解」
防具を身にまとった陽子が微笑んだ唇の口角を上げる。
今は二軍にいるものの二軍にいる間に自らを磨き上げた冬狐の実力はもう一軍レベルと言っても過言ではなく、一軍登板数も白組では格段に多い。
一軍にいた頃はまだ未成熟な部分があったがため、なかなか一軍に定着することはなかったが、今の冬狐にはアレがある。
一軍でも十二分に通用すると太鼓判を押せる、あの球が。

冬狐が出る以上、赤組の快進撃はこれまで。可哀想に……。

意気揚々とする赤組ベンチ。それが次の回で絶望に変わる。
これから起こる出来事に恐怖するルーキーたちを想像し、陽子はルーキーを哀れみの眼を向けた。
▪★
弥子が、マウンドに登った。
初登板の緊張などなく、顔は大胆不敵の厚顔無恥。後ろで守る草悟に振り返る。
草悟は高慢な笑みを浮かべた。

さっさと終わらせようぜ。

草悟の顔にはそう書いてあった。弥子も笑みを浮かべてコクリと頷く。
前を向くと先ほどの笑みは完全に消え、ルーキーらしからぬ険しい顔で真っ向からバッターを睨みつけている。
そんな弥子に、康友は呆れつつもニカっと笑った。
お前らは一軍に上がる私の土台に過ぎないんだと言わんばかりに、弥子は三振と内野フライ、内野ゴロと外野に飛ばすことなく三者凡退に収めた。
▪★

（クソが！ルーキーどもに良い様にやられやがって！）
入れ替わりにマウンドに立った冬狐には怒気が立ち込めている。
ベテラン左腕の久石はともかく白組の連中がルーキー相手に軽く捻（ひね）られた上に、気後れまでする。その情けなさが我慢できなかった。
そんな冬狐をキャッチャーの陽子はニヤニヤと見上げる。
バッターボックスに今日絶好調の康友が入る。その顔は闘志と自信に満ちている。
（可哀想だけど、白組の士気高揚と赤組を意気消沈させるスケープゴートになってもらうわ。ごめんなさいね♪）
心の中で舌を出した陽子は初球に、あの球を要求した。
白組の先発はコントロールが悪く、正直キャッチャーの出番が殆ど無かった。
冬狐となら、このバッターと勝負ができる。
（キャッチャー、日野陽子の勝負はここからよ）
そんな相棒に応えるかのように冬狐の顔が怪しく歪んだ。
★
（さて）
右打席に立った康友はマウンドの冬狐を見る。
冷泉冬狐という女性投手の顔も名前も、康友は知っている。
挨拶をしたわけではないが、テレビで目にする機会は幾度もあり特徴も掴んでいる。
右投げのセットポジションから投げるピッチャーで、実力は男の本格派投手と肩を並べるほど。基本的に投げられる球種はスライダーとシンカー、そしてフォーク。
スライダーにキレがあるものの、決め球のフォークボールの制球に苦しむピッチャー。
そういう印象だった。
（ならば狙い打つべきは甘くなったフォークボール。スライダーとシ

ンカーは出来る限り振らないか、カットしよう）
康友はそう考え冬狐の投球を待つ。
冬狐が投げた。投げたボールは釣り球にもならない高すぎる球。

暴投だ！

康友の予想をボールが裏切った。暴投と思われた球がいきなり進路を変えキャッチャーミットめがけて落ちてきたのだ。

ズバンッ！

ボールがミットに収められる音。
ありえない軌道で落ちてきたことに驚いたのは康友だけでなく審判も「……す、ストライク！」と遅れてコールする。
（何だ、この球は!?）
康友の頭は真っ白になっていた。
何が起こったのか理解できなかった。
冬狐が、再び投球動作に入る。
（ど、どうしたらいいんだ!?）
タイムをかけ忘れるほど、康友は慌てていた。
考えが纏（まと）まっていない。
（下に落ちたのだからフォーク……なのか？）
しかし、つり球にもならない暴投ともいえる高さから急激に落ちる変化球など、康友は見たことが無かった。
そして、対応策が思い浮かばない。
二球目。先ほどの急激に落ちた変化球の残像が強く残っている康友は内角高めのストレートにハーフスイングする。
（と、とにかく……あの球を打たないと！）
パニックになった康友にどの球を待つかなどの読みはなくなっていた。
康友はバットを下に構える。アッパースイングで急激に落ちる球

に対応しようとしたのだ。
（ふふっ、ここまで来ると逆に可愛く思えてくるわね）
パニック状態になった康友を間近に見る陽子は中腰で構える。
三球目。投げられたのは真ん中高めのつり球のストレート。再び同じ球を投げられたと思い込んだ康友は思わずバットを振り上げてしまう。
康友のバットは空を切る。
「ストライク！バッターアウト！」

▪★

（要求しておいてあれだけど、えげつない球よね）
バッターボックスで崩れ落ちる康友を見ながら、相棒に要求した変化球の感想を述べる。
冬狐が投げている球はフォークボール。当の本人は『私だけのオリジナルボール！』と否定するが、陽子はそう思っている。
ただし冬狐が投げる急降下するフォークは縦に割れるカーブをストレートにしたようなありえない軌道を描く。そういう意味では魔球といっても過言ではなかった。
（チートよね）
親友の一軍定着を現実にするべく二人三脚で数年の歳月を費やしたボールに、陽子は苦笑した。
「よっしゃあっ!!」
康友に続き赤組の四番五番も三振に打ち取った冬狐が吼(ほ)えた。
５回表。故障明け選手とルーキーで構成されているとはいえクリーンナップ三人を連続三振。
プロの格を見せ付けるかのように、強く握った拳を振り下ろした冬狐の姿に白組ベンチが途端に活気付く。
冬狐の投球と先ほどまで勢いが消えた赤組の姿に、どちらがプロ選手なのかを思い出したようだった。

▪★

６回表。マウンドに立った弥子はピンチを招いていた。

最初の打者をサードゴロ。次の打者をフルカウントにされたものの見逃しの三振に打ち取った。しかし3人目の打ち上げた打球はセカンド、ファースト、ライトの中間に落ちるポテンヒット。４人目にはセンター前に弾き返され、５人目には粘られ四球で歩かれてしまった。２アウトながら満塁。

しかし弥子は落ち着いていた。

康友も落ち着いていた。

次のバッターは左投手とは相性が悪いと言われる右打者とはいえ今日二打数無安打の女性選手だったからだ。

その女性選手、日野陽子は打席に入る前に数回、下から掬い上げるような素振りをする。

５回裏の康友のように。

(弥子はアンダースロー気味の左のサイドスロー。低めの球を狙っているのかな)

康友はそう思った。

初球、康友の要求した球は、試すように低めのスライダー。

陽子はピクリともせず見送って1ストライク。

(もう一度)

二球目。康友が要求したのは再びスライダー。

陽子は動かなかったが、今度は低めに外れてカウント1―1。

(くそ、弥子が一番得意とするスライダーは決め球に取っておきたい。ならば)

三球目。弥子に要求したのは外のストレート。

「……!」

この時初めて陽子が動く。

鋭く弾き返した打球は、１塁線上やや右にそれるファール。

カウント2―1。

(狙いはストレートか)

そう判断した康友はスライダーに要求する球を変えた。

康友のサインにマウンド上の弥子が頷いた。

４球目、外角少し甘めのスライダー。

（よっ！）
陽子はその球を、当てにいくスイングでファールにした。
ファール。カウント、依然２―１。
五球目はインコースのスライダー。
「……」
陽子は微動だにしない。
低め外れて２―２。平行カウント。
六球目、康友が要求したのは精度が良くないフォーク。ストライクゾーンからボールゾーンに落ちたフォークを、陽子は振らなかった。
３―２。四球を出せば押し出しという状況に追い込まれてしまった。
（ストレートは狙われている。スライダーは見せすぎた……さっきは上手く決まったフォークだが次は上手く落ちるとは限らないし暴投になる可能性もある！次は何を投げさせればいいんだ!?）
焦る康友と同様に、打者の陽子も内心ヒヤヒヤしていた。
（低めに集められた球は何とかファールゾーンに飛ばせるけど。スライダーは切れがよくてコースに決まっては手も足も出ない。でも先ほどのフォークが意表を突かれて手が出なかったけど振らなかったおかげで押し出しの可能性も出てきた。２アウトからのフルカウントだから走者は走るし暴投になったら押し出し以上に点が入る可能性もある。だからフォークはない。そしてストレートを狙っていてかつスライダーも見ていると思っているだろうからその二つもない。ならキャッチャーが次に要求するのは――）
▪★
康友がサインを出す。
「……」
弥子はしぶしぶ首を縦に振る。
要求したのは、今日の試合で一番使えないと弥子が思いかつ康友が判断したカーブ。だが康友は目先を変える意味でカーブを要求した。
七球目。あまり変化しないカーブを

カキンッ！

陽子は打った。ストライクゾーンにカーブが来るとわかっていたかのように。

流し打たれたボールは右中間を破る。

３人が帰ってきて、４対４の同点。走者一掃のツーベースヒット。

迷いの無い踏み込みから、カーブが狙い打たれたことが解った。

落胆する弥子。その姿に康友は自分を責める。

（何が二打数無安打の右打者だ。……あの人はキャッチャーじゃないか！）

相手は非力な女性。そう侮った自分に腹が立つ。

「弥子！康友！」

草悟の怒声に二人は我に帰る。

「ツーアウト。同点だ」

平然と言った。責めることなく力強く言う草悟の姿に。

「次の打者は絶対抑える！」

「このリードのミスは、バットで返してやる！」

二人は腹をくくる。

悪鬼のような形相で、弥子は振りかぶった。その意気にびびったのか、打者は力ない空振りに終わる。

再びマウンドに冬狐が上がる。

６番を渾身（こんしん）のストレート３球で片付けると、左打席に入った草悟と相対した。

陽子は草悟を見る。

（有賀草悟。野球部に所属してないのにも関わらずドラフト６位に選ばれた未知数中の未知数の新人。中には話題作りのために獲得したとかいう声も聞かれるけど、そんなので獲得するわけないでしょ、って言いたいわね）

第二打席。草悟は甘く入ったストレートを痛烈に弾き返した。センター正面だったためシングルヒットで終わったが打球のスピードから陽子は草悟を只者ではないと判断していた。

陽子は草悟のバットが短いことを考えて一番届きにくい外角低めにミットを構える。
要求したのは、ストレート。
相手、特に男を力でねじ伏せることにこだわる冬狐は不服な顔を浮かべるが最後はコクリと頷いた。
冬狐の右手から１５０ｋｍ近いストレートが放たれる。コースは陽子が構えた場所より甘いストライクゾーン。
「！」
草悟は迷い無くフルスイングした。打球は勢いよく真後ろのネットにぶつかる。
（……当てた？甘く入ったとはいえ冬狐のストレートを？）
陽子は、顔は冷静を保ちつつも驚いた。
バックネットにライナーで飛ぶファールは、一般にタイミングがあっているファール。紙一重でヒットできなかったボールにタイミングが合っている打球とされる。
「嘘、当てた!?」、「惜しい！」、「あともうちょっとでヒットだったよな？」
今までかする事すら出来なかった球を当てたことにベンチの赤組が騒ぎ出す。
（すごいわね、この子）
いつもの子どものような笑みが消え、冷静な女の表情に変わった陽子は冬狐にカーブを要求する。今まで草悟が振っていた球は全てストレートからさほど変化しない速球系の変化球。ゆるい変化球にどう対応するか見てみたかったからだ。
ルーキーに打たれたという怒りを抑え込み、無表情な顔に戻した冬狐がコクリと頷く。
ストレートと同じような腕の振りで大きく縦に曲がるカーブが放たれる。
「!?」
フルスイングする草悟のバットが空を切る。ボールはほぼ真ん中に近い内角に構えた陽子のミットに収まる。

（やっぱりね）
陽子の予想は確信に変わった。草悟はゆるい変化球に弱いと。
草悟は長年バッティングセンターで打撃練習をしていたのだ。それも１４０ｋｍなど速球系のピッチングマシンで。ゆえに速球には強いが遅い球には体が我慢できず動いてしまうのだ。
（じゃあ最後はこれね）
勝利を確信した笑みを浮かべた陽子はサインを出す。要求したのは外角低めのカーブ。しかし冬狐は首を横に振った。
（冬狐ッ！）
相棒の拒否に、普段は少女のような笑顔を見せる大人の女は思わず顔をしかめる。
拒否する理由はわかっている。海の物とも山のものともつかないルーキーに渾身（こんしん）のストレートを打たれたことを根に持っているのだ。シンカーやスライダー、ストレートに変更しても冬狐は首を縦に振らない。
（まったく……）
誰にも聞こえない小さなため息をついた陽子は康友を始めとする面々の度肝を抜いたあの球のサインを出した。
邪悪な笑みを浮かべた女性投手は大きく振りかぶって投げた。
暴投といえる高さの速球が一気に低めに構えられた陽子のミットに向かっていく。
「!!」
草悟は思い切り踏み込むとその球をフルスイングした。強く叩きつけられた打球はセカンド真正面。足の速い草悟でも間に合うわけがなく2アウトになった。
その後冬狐は次の打者にストレートの四球を出したものの、次の打者をかすることすら許さない投球の三振で赤組の攻撃を終わらせた。
その後、弥子と冬狐は予定された残りの一回を無失点で切り抜けた。
試合は両者決定打がうまれず４―４の引き分けに終わった。

第五話　ルーキーと二軍半たち

二軍紅白戦終了後。
「くそっ！くそっ！くそがあぁっ!!」
冷泉冬狐（れいぜいとうこ）はロッカールームで荒れていた。
３イニング無安打無失点１与四球、奪三振８。
相手が自チームの二軍で若手中心とは言え、破格の好成績であるにも関わらず。
（完璧主義にも程があるってものよね……）
荒れる親友を呆れた目で見る陽子。ただ少しおかしいのも少女のような女性は感じ取っていた。
冬狐は完璧を求める所があるが、感情の起伏が激しい割に目的さえ果たさせれば多少のミスは許せる実利主義でもあった。
十分すぎる快投を見せた以上、一軍に上がるためのアピールという目的は果たせている。
充分すぎる内容でも満足できないことが起きたことに彼女は怒っていたのだ。
（何に怒っていたなど、考えるまでもないわね）
陽子の頭に一人の青年が浮かぶ。
前代未聞。中学高校と野球部に所属していないで野球界入りして球界を驚かせた無名の新人、有賀草悟に、だ。
（これではまるで、あの頃のよう……）
久しぶりに見る荒れ狂う冬狐の姿に、陽子は不愉快というわけではないが愉快でもない顔で昔のことを思い出す。
▪★
８年前。スイーツ球場。９回表２アウト２ストライクからの投球後。
「ボール！」
審判の判定に冬狐はマウンドで目を大きく見開いて怒鳴（どな）った。
「ふざけんな、審判！さっきの球のどこがボールなんだ!?適当なことを言うんじゃねえよ!!」

「た、退場ッ！」
球場に居た誰もが唖然(あぜん)とした。
監督、コーチ、チームメイト、対戦相手、観客、審判、全てである。
退場を宣告された冬狐は一歩も動かなかった。
周囲から宥(なだ)められるが、「いやだっ！」と荒れ狂ってマウンドを譲らない。
審判団を突き飛ばし、ボールをよこせと激しく騒ぐ。
先輩達に守備につけと怒鳴りつけた時、流石に周囲に取り押さえられたがそれでも譲ろうとしない。
ついにはマウンドの上に跪いて降板を拒否する。
０―９という負け試合での初登板は、女性初の沢村賞候補と称(しょう)された彼女のイメージをぶち壊すものだった。
冷泉冬狐は１５０ｋｍを超えるストレートを武器に強気なピッチングを心情する本格派投手と評価された。その評価通り彼女は母校の高校を甲子園出場に導き、六大学野球では連敗記録を更新中だった大学の連敗をストップしただけでなく準優秀まで導いた。
彼女は勝てる天才投手だった。
大学までは。
プロの世界では彼女以上の実力者だらけだった。

私は男に勝てる。私は男に負けない。

プロの世界でもそうだ、と思い込んでいた彼女に負けることは耐え難いものだった。
その後の登板でも彼女は審判や相手選手と衝突し、退場処分を受けるということを繰り返した。
今まで絶賛していた者たちの評価は『負けを認めない、些細なことでキレる最悪な投手』という認識に代わった。
ドラフト1位ということもあってすぐにはクビを切られなかったものの、３年目に戦力外通告を内示で宣告される。
だが、冬狐は戦力外にはならなかった。冬狐が一番迷惑をかけたは

ずの一軍の投手コーチ・石中花太郎（いしなかはなたろう）がストップをかけたからだ。
石中は自分のクビを条件に『冬狐を戦力外にするかどうかは一年後に判断する』と提案。上層部はその提案をうけた。

何で、何で私なんかのためにクビになんかなったんです!?

その問いに５０代前半なのにすでに頭は真っ白の男は答えた。

『良い投手を戦力外にする』なんて聞いたら投手コーチは大反対するよ。私は当然のことをしただけさ。

冬狐が聞いた石中の最期の言葉だった。
一ヵ月後。石中が心筋梗塞で亡くなったからだ。

石中コーチに恩返しが出来なかった。

その後悔が、冬狐を変えた。
石中の死を境に、冬狐は変わった。
マウンドでは常に冷戦沈着。マウンドで出ては退場処分を受け周囲の人間を困惑させる姿はどこにもない。審判の判定にも素直に従い、相手選手の挑発にも一切乗らなくなった。
先発、中継ぎ、敗戦処理。どのポジションでも文句言わずこなすようになった。

▪★

敗戦処理に続く敗戦処理。そんな登板を冬狐が続けていた時だ。
ロッカールームに忘れ物をしたため取りに戻ると、そこには陽子が一人でスコアブックに目を通していた。
忘れ物が入った鞄を手に冬狐は部屋から出ようとする。その時、陽子が声をかけてきた。
「楽しい？試合に出るのは」
「……何が言いたい？」

ドアノブに置いた手を離し、同期入団の捕手の方へ振り返る。
「石中コーチが在籍されていた時の貴女は勝ちにこだわっていた。でも今では言われた所で淡々と投げている」
「……それがどうした？言われた所で投げるのが投手の仕事だろう？」
冬狐は思うところがあったのだろう。どこか歯切れの悪く返事をする。
「まあ、一軍で投げられるならどこで投げても良い。そういう考えもアリかもね。例え敗戦処理でも」
「どう言う意味だ？」
冬狐の言葉には怒気が含まれている。その怒気にひるむことなく、嘲笑（ちょうしょう）した。
「『誰が投げてもいい、そんな所で投げていて楽しいのか？』と聞いているのよ」
「……楽しいわけはない」
バカにした言い方に反応しなかった。先ほどの怒気は消え、どこか悟ったような表情で冬狐は続ける。
「でも今までみたいに試合を壊すようなことをすれば私なんかのためにクビになった石中コーチの行為が無駄になる。コーチには何の恩返しも出来なかったけど、裏切ることだけはしたくない。自分のことしか考えなかった私がチームのために貢献することが石中コーチへの唯一の恩返し、そう考えるようになっただけ」
「……」
絞るように出した答えに数瞬黙った後、陽子は冷たく言い放った。
「まあ現役時代。先発では5、6回でへばって中継ぎに負担をかけ、中継ぎに回っては勝利投手の権利を消していった投手コーチへの恩返しはそれでいいかもね」
「陽子ッ!!」
冬狐は童顔の捕手の首を掴むとロッカーに叩きつけた。
クビになってまで自分を守ってくれた恩人を馬鹿にされたことに我慢が出来なかったのだ。

「これ以上石中コーチを侮辱してみろ！お前の首をへし折ってやる!!」
そう言って首を掴む手の力を強める冬狐。
苦しみながらもはっきりとした口調で陽子が続ける。
「石中、コーチは、貴女が『良い投手』だから、残すように……言ったんでしょう？うぐっ、……良い投手というのは、勝ちに貢献する、投手でしょう？ぐはっ、……今の貴女は……それでいい、の？」
その言葉に、冬狐は掴んでいた手を離し、崩れ落ちた。

いいわけないだろうがッ!!

魂の叫びがロッカールームに木霊（こだま）する。
「石中コーチの一番の恩返しは、勝つことだって……そんなの私が理解している!!でも、今の私には勝ちに導く実力がない。だったら敗戦処理でもして、他の選手の負担にならないように、チームに貢献するしかないでしょうが!!」
ポタポタと熱い滴が冬狐の顔を伝って床に落ちていた。
「だったら、一緒に探しましょう。貴女がチームを勝利に導く方法を」
いつもの子どものような印象とも先ほどの冷たい印象とも違う、苦しむ妹に救いの手を差し伸べる姉のような表情で語りかける。
「なぜ、私のために？お前に何のメリットがある？」
涙を拭って質問する冬狐に答えず、陽子は冬狐に背を向ける。
「むかしむかし、ある所に学校でいじめられたことが原因で家に引きこもりがちな女の子がいました。このままではいけないと思った女の子の父親は少女を無理やり外に連れ出しました。そこは近くの総合運動場で、そこでは女の子と同じくらいの男の子たちが野球をしていました。その中で一人、大きな少女が。その少女は男の子たち相手にボールを投げ、完全試合を成し遂げました。男の子に投げていた少女が自分と同い年だと知った女の子は『いつの日か、彼女が投げるボールを受け止めてみたい』と思うようになりました」
「……」

「憧れの少女のボールを受け止める。その目標を持った女の子は必死に野球のことを勉強し、ついにはとあるプロ野球チームに入るまでに成長しました。憧れの少女と同じ球団に」
「……」
「しかし憧れの少女は変わっていました。審判に不服があると怒鳴り散らし退場。相手選手の挑発に乗って退場。結果は出すには出すがそれ以上チームの雰囲気を悪くする厄介な存在になっていました……」
陽子が振り返る。打算など大人の顔ではない、純粋無垢な少女の顔。その目には涙がこぼれていた。
「私は、あの時の。私が初めて見た、力強くて……かっこよくて……輝いていた冬狐のボールを受け止めたい」
「……私をそんな時から見て、憧れくれて……ありがとう、陽子。でも私には、貴女が憧れる理想の私になれる自信はない。考えられることは全てやった！でも敗戦処理が私の今の実力だ！」
冬狐の弱音が本心だと陽子は悟った。だが彼女の心の奥で燃え上がるものもあることも知っている。
「貴女のおかげで、私はまがりなりにもプロ野球選手になるほど成長した。貴女と出会わなければ、私はもっと不幸になっていただろうから。だから今度は私に協力させて。そして、一流投手になって」
「……陽子」
そう言って冬狐は一度目を閉じて、ゆっくりと目を見開いた。
「もし私が一流投手になったとしたら、それは私たちの勝利だ。そしてマウンドに立つ私のボールを、受け取ってくれ！」
▪★
その日から二人は冷泉冬狐の一流投手になるための道に奔走した。
お互い試合に出つつ何が一軍に通用する武器になるか、そしてその土台作りに取り組んだ。
陽子が着目したのはスピード。女性ながら男性にも引けを取らない体格と身体能力を持つ冬狐にウエイトトレーニングをさせた。
先発投手に必要なスタミナは失われていったが、その分球威は増し

た。
一番苦労したのはウイニングショットとなる球だ。武器になる球が一つでもあればそれだけで通じると言うプロ野球。逆に言えば武器と言える武器がなければ通用しないことを意味する。
１５０ｋｍ以上の速球を投げられると言ってもプロ野球選手にはそれぐらい投げられる選手はいくらでもいる。ということは絶対的な武器にはならない。ストレートとは別の武器を手に入れる必要があった。
冬狐はスライダー、カーブ、フォークなどの変化球を持っていたがどれも通じる武器になりえるかと言えばＮＯと言えるほどの精度しかなかった。
今ある変化球を磨きつつ、色々な球種に挑戦しては模索し諦め、また新たに挑戦しては諦める。そんな繰り返しだった。

▪★

ある日のこと。
「そろそろ止めましょう」
冬狐の疲労具合を見て、陽子は切り上げることを提案した。
「ちょ、ちょっと待ってよ。私はまだ、投げられるわよ……！」
「肩で息をしている人が何を言っているのよ。さぁ、肩が冷える前にストレッチをして……」
「いや、ちょっと待ってくれ。何か、こう……何か閃(ひらめ)きそうなんだ！」
陽子は冬狐に聞こえるほど大きくため息をつく。
「貴女の『閃ひらめきそう』はいつ閃くのよ。これでもう７３１回目よ」
だが冬狐は譲らない。
「いいからお願い。一回だけだから」
「本当に最後の一回だからね！」
７３０回もこのようなことを繰り返していたため諦めている。陽子はキャッチャーミットを構える。
「よっ！」
冬狐は投げた。余計な力が入っていない腕の振りだった。シュッ

とボールが放たれる。
だがボールは高すぎる。ボールの動きを予想し視線を上げた次の瞬間

バンッ！

ボールが一気に急降下して地面に落下。ワンバウンドして陽子のミットに収まる。
陽子は言葉を失った。暴投と思われた球があり得ない落差を見せたのだ。
陽子は驚きのあまり投げた当人の顔を見る。
「……」
投げた当人が一番驚いていた。
「あ、えっと……どう、陽子？」
「ダメ！」
「な、何でよ！」
「地面に触れた瞬間にボール！どんな変化球もボールになるなら意味がないわ！」
「……地面に触れなければいいのね。だったら」
冬狐は先ほどの感覚を思い出しつつ、ボールを離す瞬間を先ほどよりも前にしてボールを投げた。

バシンッ！

暴投と思われる球が一気に急降下。小気味のいい音と共に、今度は陽子が構えたミットに直接収まった。
「どう、陽子？」
恐る恐る尋ねる相棒に、
「……グットよ！」
陽子は微笑みを浮かべた。

▪★
ブンッブンッブンッ……カランッ
バットが握れなくなるほど疲れた草悟は地面に崩れ落ちた。
「ち、ちくしょうっ……」
疲労で声が出ない。蚊の鳴くような小さな声。しかしその言葉には重かった。
紅白戦の試合。草悟は守備で一つエラーを記録したものの、4打数2安打1四球という好成績を残した。首脳陣にアピールは出来た。その目的が達成されたのにも関わらずである。
3回3失点の弥子は宿舎にこもり、3失点するきっかけを作った康友はスコアブックを見ながら一人考え込んでいた。
『よっしゃあっ！』

草悟の脳裏に一人の女性投手の声が木霊する。
忘れようとバットを振っていたがそれも一時的なものだった。少し経てばまた女性投手の投げる姿が浮かぶ。赤組を絶望に陥れた冷泉冬狐の姿が。
考えるなと思えば思うほど急降下する変化球が思い起こされる。
振れば忘れるがもう振るだけの力は残っていない。そもそもそれは何の解決にもならない。
「……よしっ！」
その問題を解決する方法を考えだし、草悟は実行に移す覚悟を決めた。
▪★
コンコン
「どうぞ」
「し、失礼します」
陽子の声に緊張した面持ちで青年が入ってきた。
（まずい！）
今この男と冬狐を会わせるのは危険だ。そう考えた陽子は適当な

理由をつけて入ってきた青年を追い出そうとする。
「どうしたんだい、こんな夜遅くに。何か相談したいことでもあるのかな？」
　大人が迷子に声をかけるかのように優しく声をかける冬狐の姿に、陽子は一安心した。
（さすがの冬狐も大人の余裕を持つようになったのね）
　しかし陽子は読み間違えていた。冬狐の激情を爆発させるほどの要素を、この青年が持っていることに。
「……あ、あの……」
　言おうか言うまいか。草悟は口をもごもごさせる。
「いやぁ、ゴロとはいえ私のウイニングショットを当てるなんてすごいわね。将来楽しみな選手が入ったものだ（いい気になるなよ、チビ助。次対戦する機会があったら、今度は私の顔を見たくないくらいにボコボコにしてやる）」
（作り笑いの裏で『いい気になるなよ、チビ助。次対戦する機会があったら、今度は顔も見たくないくらいにボコボコにしてやる』って思っているんだろうなぁ。まあ口に言わないだけ成長したってことよね）
　相棒の変化にホッとする陽子。
「あ、その……ありがとうございます……」
　頭を下げる草悟だがまた言おうか言うまいか口をモゴモゴさせる。
「言いたいことがあるならさっさと言えよ、ルーキーが！（まあ今日は遅いから何かあるなら後日またいらっしゃい）」
（本音と建て前が逆になってる！）
　相棒がまったく成長していないことに、陽子は愕然とした。
「は、はい……えっと……」
　冬狐の怒りに促される形で、草悟は９０度のお辞儀でハッキリと言った。
「冷泉先輩、俺にあのフォークを投げてください！」
　ブーーーッ×２
　青年の突然のお願いに二人は吹いた。
「有賀君、だったわね？貴方ふざけてるの？それとも冗談？」

陽子は笑った。しかし目は日野陽子という名前に反して冷たい。
その怖さに「ふざけてもいませんし、冗談でもありません！」と弁明する。
「……」
そして。久しぶりに見る陽子の真の姿に、冬狐も動揺する。
「私からも一つ聞いていいかしら？」
動揺から立ち直った冬狐が草悟を見る。
「え？」
「何で私なの？」
「え？」
「女の私ならいい練習台になると思ったからかッ!?」
大きく目を見開き激情を露わにする冬狐の怒りは、陽子の何倍も迫力があった。
熱気と冷気。異なる怒気にさらされ、草悟は縮こまる。
一言も話せなくなった青年に、目は笑っていない微笑で陽子が尋ねる。
「そんなこと言って、冬狐が投げてくれると思ったのですか？あと何で冬狐のあの変化球を投げて欲しいと思ったの？」
「な、投げてくれると思っていませんでしたが……少しでも望みがあれば、と思いまして。あと投げて欲しいと思ったのは、今まで見た変化球で、一番凄かったからです。それも素振りをしないと、不安になるほどに」

自分自身の不安を取り除くためだけに冬狐に投げてもらいたい。

陽子の口元から笑みが消えた。
今の陽子にとって冬狐は憧れであり希望である。そんな大事な存在を軽く扱われることは陽子には我慢ならなかった。
（こいつと話すことは何も無い）
そう判断した陽子は排除に動く。
「ふふ。まあ待ちなさいよ、陽子」

「冬狐？」
　陽子は呼び止める親友を見る。
「面白いじゃない。『不安だから打ちたい』なんて言うなんて。それも素振りをしないと、不安になるほどになんて言って」
「……」
　照れる冬狐に陽子は完全に言葉を失った。
「ねえ有賀君。私のどんな所が凄かったか教えてくれないかしら？」
　怖かった先輩からの優しい促しに高揚した草悟はそれまでのドモリが嘘だったかのように話だす。
「まず最初にスピードとキレが両立したストレート。俺も元投手だったんで肩の強さには自信があったんですけど、ぶっちゃけ言って冷泉先輩の方が速いです！」
「それで、それで？」
「そしてあのフォーク。暴投と思えるほどの高さからストライクゾーンに落下するなんて今まで見たことがありません。俺はあの球を打ちましたがぶっちゃけ凄すぎて無我夢中になってバット振っただけなんで！」
「ふむふむ。なかなか見所があるじゃない、有賀君。でもね、君は一つ間違っているわ」
「ま、間違っている!?」
　その言葉に先ほどの明るさが一変、無礼なことをしてしまったと顔面が蒼白になる。
「す、すみませんでした。何か失礼なことを!?」
　そんな草悟に冬狐は労わるように優しく笑う。
「失礼なんてないわ。貴方は近年まれに見る好青年よ。私が間違っていると言ったのは球種。あれはフォークではないわ」
「フォークではない!?ではあれは――」
　何ですか、草悟がと聞く前に冬狐は答えた。
「魔球『死神の鎌』よ！」
（いや、アレはフォークだから！ってネーミングセンス悪ッ!!）
　一方で陽子はこんなことも思っていた。

（奇人変人で基本不機嫌の冬狐に近寄るものなど、チームでもそうはいない。後輩に慕われるなんて初めての経験であったのかもしれない。でも――）
「ここまで煽てに弱いとは……」
　さすがの陽子も思ってもみなかった。
「他には？他にはないの？私の凄いと思ったところは？」
「もちろんありますよ！１５０キロは優に超えるストレートはほぼコーナーに決まってましたし、キレのいいスライダーとシンカーで左右の揺さぶりは完璧です！」
「ほぉ、なるほど！」
「それだけでも手がつけられないのに『死神の鎌』というそれだけで戦えそうな魔球がある。もう存在自体がチートですよ！」
「いやぁ、でも『存在自体がチート』は言いすぎよ！」
　と言われて気分を害しているようには到底見えなかった。
「左右、縦、ストレート……これら全てがハイレベル過ぎてもう右打者も左打者とか関係ないですよ！冷泉先輩ほどの技量があったら投手失格の烙印なんて押されなかったのに、って羨ましくもあり嫉妬もするほどのレベル！もう凄いしか言えないですよ！」
「えーーー！私ってそんなに凄い？凄いの？あ、そうだ。こうなったら私が貴方に投手になれるように指導してあげるわ！そうなったら某選手のような二刀流になって――」
「正気に戻れ！」
　陽子の右ストレートが冬狐の腹部に炸裂した。
▪★
　数分後。
「というわけで、投げられません。見世物ではないので。お引取り下さい」
「わ、わかりました。失礼なことを言って申し訳ございませんでした」
　あっさり引き下がる青年に、童顔の女性はある考えが閃く。
（でも冬狐のいい刺激になるかもしれないわね）
　そう思った陽子は草悟に提案する。

「そうだ。私たちの練習に参加するっていうのならアリですよ。とある大学の研究所と繋がりがありまして、フィジカルトレーニングは相当質のいいものあります。それを特別に教えてあげます。それと――」
「待って、陽子」
冬狐の落ち着いた声が、陽子の言葉をとめた。
「死神の鎌、投げても構わないわ」
「……」
冬狐の言葉に、草悟と陽子は言葉を失った。
陽子は目が笑わない笑みを浮かべる。
「何の冗談？冬狐」
「冗談じゃないわ」
何か言おうとする陽子に「まあ、聞いて」となだめてから冬狐は続ける。
「数年前のロッカールームの出来事。覚えているかしら？」
「忘れるわけがないじゃない。あれが私たちのスタート。忘れるはずが無いわ」
「じゃあ私がこう言ったのも覚えている？『自分のことしか考えなかった私がチームのために貢献することが石中コーチへの唯一の恩返し』と言ったことを？」
「確かに、貴女はそういったわね」
覚えていたが特に意識しない所だった。
「一軍で活躍して冷泉冬狐という女の存在を証明する。それも私の本音だけど、チームのために役に立ちたかったというのも私の本音。前者と同じくらいのね」
「……」
「初対面の先輩にウイニングショットを投げてくれなんて、頼もしいじゃない。その憎たらしいくらいの度胸が。私の死神の鎌みたいな変化球を投げる投手は私しかいないだろうけど、それが自信につながるならスイーツには喜ばしいことでしょう？」
「……練習に付き合ってあげたがため、貴女が一軍に上がれませんで

した。なんて言うオチはないわよね」
「ほう」
　冬狐は自信満々な笑みを浮かべる。
「日野陽子様は冷泉冬狐が一軍に上がれないと思っているの？ちょっと後輩に付き合う時間もないほどの実力だ、と？」
「まさか」
　陽子も自信に満ちた笑みを浮かべる。
「……はぁ」
　陽子は大きくため息をついた。
「もしかして私たちって先輩らしいこと、一度もしてこなかったのかしら？」
「そうね」
　冬狐はあっさりと肯定する。
「自分のことで手一杯だった。言い訳にはなるんじゃないかしら？」
「なるでしょうね」
　でも、と冬狐は一度目を閉じる。瞼（まぶた）の裏では一人の男の姿があった。厄介者となっていた自分を『良い投手』と評価し、救ってくれた男の姿が。
　そして目を開ける。
「言い訳はしたくない。戦力としても、先輩としても、チームに貢献したい」
「冬狐が言うなら仕方がないわね。でも本当に投げるの？」
「別に構わない。私の球を打つことで自信につながると言うのなら。私たちだって何かを得たいけど何をしたらいいかわからなかった。そういう時期があったでしょう？」
「確かに」
　何を練習すればいいのかすらわからない。
　どうすれば道が開かれるのか。
　闇雲に、意味があるかすらわからない練習を、二人で続けてきたのだから。
「しょうがないわね」

言葉とは裏腹に口元は緩んでいた。
「冬狐、貴女が自分から先輩なんていうなんて。変わったわね」
「おいおい。その言い方じゃまるで私が子どもだったみたいじゃない」
「はい子ども、それもわがままだだっこレベルでした。チームメイトで私以外の人間が話かけたことなんてありましたっけ？」
「ｋｆ；ｍ、ｄｆｇついあｒ；あｒまｄ；ぁｇｋじゃそおおい：えろあｒｓ；ｄ：いあ（日本語で表現できないほど意味不明なことを言って悶絶しています）」
「さて」
冬狐をいじめてストレス解消したところで、と陽子は草悟に振り返る。
「じゃあ有賀君。さっそくですが、やりましょうか。冬狐はすぐに準備させますので」
「いいんですか？」
事の推移を見守っていた草悟は、半信半疑という口振りで首をかしげる。
「二言はありません」
「はい！」
草悟の満面の笑みが陽子にも伝染する。そして冬狐の言葉と草悟の笑みで気がつく。
（野球って、みんなでやるものなのよね……）
冬狐と二人三脚で道なき道を模索していたため、そんな当たり前のことをすっかり忘れていた。
その時、派手な音がして、ロッカールームの扉が開かれた。
「日野先輩！」
現れたのは康友。
周囲をぐるりと見渡して、陽子の姿を認めツカツカと近寄る。
「日野先輩！お願いがあります！」
冬狐が口元を隠す。見覚えがある展開だったからだ。
「お願いだって、せっかくだから聞いてあげたら？陽子」

楽しそうに冬狐は言った。
「何ですか、お願いって？」
笑いをこらえながら陽子は尋ねる。

ゴクリ。

康友が緊張気味に、ツバを飲み込んだのが聞こえた。
そして康友は、意を決したように頭を下げる。
「ひ、日野先輩！俺にキャッチャーの指導をしていただけないでしょうか!?」
必死の言葉だった。
ただ、予想された言葉だった。
「ハハハハハハッ！」
突然笑い出す二人の先輩。その反応の理由が康友には理解できない。
「とりあえず私のどこが凄いと思ったのか。それを教えてもらってもいいですかね？」
笑い泣きした際に出た涙を拭いながら陽子が尋ねた。
その時だ。
「冷泉さん！私にあのフォークを教えて下さい!!」
ロッカールームの扉を開けるなり、弥子が大声で冬狐にお願いした。
「「――――!!」」
声にもならない声で腹を抱えながら笑う二人の女性。
「どういうこと？」
話の展開がわからない弥子は固まるしかなかった。
▪★
要点だけを教え練習する三人を眺める冬狐と陽子。無心に練習する三人に子どもの成長を見届ける親のような気持ちになる。
「なんか、一気に老けた感じがするな」
冬狐はボソッと呟く。

「でも、悪い気はしないよね」
陽子の返答にフフッと笑みを浮かべながら。冬狐は頷いた。
冬狐は目を閉じる。
瞼の裏では自分を救ってくれた白髪の男が嬉しそうに微笑んでいた。

南部無頼という男

２０１７年１０月２０日ドラフト会議。

『第一巡目、全球団の指名が終了しました。以上選択の結果――』

１９０ｃｍを超える厳つい顔の青年がその場に泣き崩れた。

南部無頼（なんぶぶらい）。一往（いちおう）大学で大学通算奪三振記録を塗り替えたが同時に与四死球記録も塗り替えた投手である。

彼は地元の球団から「ドラフト１位で指名する」と言われていた。

地元球団が指名したのは、別の投手だった。

指名の約束が破られることは長いドラフトの歴史でもないことはない。それは青年にもわかっていた。

だが幼少の頃からずっと応援している球団に裏切られたことに、青年の心は大きく傷つけられた。

その後。彼は外れ外れ１位でスイーツに入団した。

▪★

ある日。無頼は一軍監督の美空に呼び出しを受けて、彼女の待つ監督室に足を運んでいた。

「まあ座りなさい」

「し、失礼します」

パイプ椅子に腰を下ろす無頼。

「どうかしら、一軍にはなれた？」

「え、ええ。まあ、ぼちぼちです」

「そう」

「……」

「……」

「……あの、監督。俺、いや僕。監督からお話があると窺（うかが）ったのですが」

「……」

美空は机の上の２５０ｍｌのペットボトルのお茶を開けて、喉を潤（うるお）す。

「南部、貴方」

無頼は喉をゴクリと鳴らし身を硬くする。二軍降格を言い渡されると思ったからだ。だが美空の言葉は思いもよらないものだった。
「先発のローテーションに加わるつもりはない？」
「ろ、ローテーション……ですか？」
プロ野球では複数の投手を先発投手として起用する。野球は先発投手が投げないと始まらない故にその中のメンバーに選ばれるというのは大変名誉なことである。
「あら、不満かしら？」
「い、いえ……そのようなことは！ただ――」
言いかけて止めた言葉を、美空は読み取る。
「打たれるのが怖い、かしら？」
「……い、いえ……」
言いかけて止めた言葉を言い当てられ、無頼は思わず美空から視線を逸らす。
「打たれ、点を取られ、罵声を浴びせられ……不安要素は数えたらキリがないわね」
そう言って笑う。
「……」
同感だった。
一軍の選手たちと一緒に練習をし、オープン戦にも出させてもらって無頼は思った。
自分はまだプロの、一軍のレベルに達していない、と。
無頼自身がそう思っているのに長年プロ野球に携わった美空が気つかないはずがない。だから美空が自分をローテーションピッチャーにしようと言い出したか、図りかねていた。
監督の真意はどこにあるのか!?
悩む無頼に美空は優しく問いかける。

「でもローテーションに入ることで貴方は一軍の世界を身体全体で知ることが出来る。今年だけを見たらマイナスかもしれない。貴方の評価を下げるかもしれない。でもプロ野球選手南部無頼の人生を彩(いろど)る、絶好の機会じゃなくて？」

「！」

無頼は考える。

（確かに。一年目は俺の、南部無頼という男は最低の投手になるかもしれない。でもこの経験は後につながるのではないのか……しかし）

悩む無頼に美空は続ける。

「いきなり勝てとは言わないわ。やってみる気はあるか？それともないか？それだけの話よ」

「……ッ」

「やらせてください！」と無頼は言いたかった。しかし脳裏に掠める嫌な記憶がその言葉を言わせるストッパーとなっていた。

「まあいきなりやれと言われて『やらせてください！』というのは難しいでしょう。数日あげるからその間に返答をちょうだい」

▪★

「先発、ローテーション……」

無頼は階段に腰掛けて美空の提案にどう返答しようか考えていた。

無頼の母校、一往大学は『得意なものを絶対的な武器になるくらいまで鍛え上げろ』という方針で、その方針の下で無頼はストレートを鍛え上げた。

そのおかげで無頼はＭＡＸ１６０ｋｍ近い球を投げられるまでになった。だがその代償と言うべきか、コントロールは絶望的なほどになった。

そして大学最後の決勝戦。９回裏４―０で勝っている試合で無頼は登板した。監督はエースとしてチームを引っ張ってきた無頼の労いの気持ちで彼を登板させた。

結果は四球２つとエラーで満塁を作った後に死球で押し出し、サヨナラ満塁ホームランで逆転負けという最悪の最後となった。

無頼の名誉のために追記すれば、彼は前の試合完投していた。疲労

がたまりにたまりベストコンディションにはほど遠かった。
１アウトも取れず逆転負けしたことで彼を応援する声は怒声と批難に変わった。一往大学初優勝を逃した怒り。それは全て無頼に向けられた。

自分は大舞台に弱い。

プロ野球選手になろうとしている人間が決して思っていけないほどに。
「ん？どうした。無頼。そんなところで」
「あ、杉井（すぎい）さん」
振り返るとそこには一見チャラそうな男がニコニコと無頼を見ていた。
杉井貴士（すぎいたかし）。
スイーツのクリーナップを務める隠九条憂男（いんくじょうゆお）と同期入団の選手で、投手と捕手以外ならどこでも守れるユーティリティープレイヤーである。
通算打率こそ・２５０前後とけしてよいとは言えないがバントや進塁打など他者を生かす最低限の仕事を行う。
文字通りスイーツの縁の下の力持ちだ。

スポットライトを当てられなくてもチームに貢献する。

同い年ながらチームに貢献する先輩を、数多くいる先輩選手の中で無頼は一番尊敬していた。
「杉井さん。俺、今悩んでいることがありまして……」
無頼は杉井に全てを話した。美空からローテーションに入らないかと言われたこと。大学時代の苦い経験から了承出来ずにいることを。
「杉井さん。俺は、どうしたらいいんでしょうか？」
頭を抱える無頼に「それはお前が独りで決めることだ」と突き放す。

ただ、と杉井は続ける。
「今年度のドラフト会議。美空監督は一番最初にお前を選択しようとしていたそうだ。俺を担当してくれたスカウトが言っていたから間違いない」
「何ですって……!?」

美空監督が自分を必要としてくれていた。

杉井の言葉が心に突き刺さる。
無頼は目を大きく見開いて驚きを顕わにする。
「『制球力が無い投手は使えない』と反対するフロントと揉めて破れ、最初にお前を指名できなかったことを大層悔やんでいたそうだ」
監督が本当の1位指名に自分を推してくれていた。こんなに惹(ひ)かれる言葉は無い。
「色々不安なことはあるだろう。決断は出来ないと思う。ただ監督はお前に期待している。その監督の期待を裏切らないでやってほしい。俺から言えることはそれだけだ」
そう言うと杉井は無頼の前から姿を消した。
「監督は、俺を……スピードしかとりえが無い俺を1位に！」
試合を壊す可能性が高い自分をかってくれた。
監督とは勝つことを求められている。なのに美空は勝たなくてもいいと言った。自分の将来のため、勝てなくても使おうとする。責任を背負おうする。よほどの覚悟が必要なはずだ。
「なのに俺は、自分のことばかり考えて、傷つかない……逃げることだけ考えて……」
自分の心の弱さに、無頼の目から涙がこぼれる。
その涙はドラフトの時に流した絶望と裏切りへの涙ではなく、美空の期待に逃げることしか考えなかった自分への怒りと期待に応えようと覚悟を決めた決意の涙であった。
無頼は動く。自分を認めてくれた監督の元へ。
「美空監督！南部無頼、ローテーションピッチャーの役を仰せつかり

ま――」

ノックせず監督室の扉を開けた無頼が見たもの、それは。

「……」

ユニフォームを脱ぎ終えたばかりの美空の下着姿だった。

「あ、その……」

「出て行け！」

「ウガッ！――ッ!?」

無頼の額と両目に至近距離から放たれた硬球がめり込んだ。

ス・リーグ球団説明

スイートエンジェルズ（通称スイーツ）

ス・リーグに所属するプロ野球球団。本拠地はスイーツスタジアム。親会社はデザートスイーツという果実を用いたお菓子をウリとするお菓子で発展した製菓会社。

ス・リーグ創立２０年間で唯一優勝経験がない。Ａクラスに入ったのも一度だけという弱小球団で、セ・パ・ス・リーグの１８球団で１，２位を争う貧乏球団。そのため自前で選手を育てるしかなく、育ててもＦＡで出て行ってしまうというのは風物詩。

北方（きたかた）ファントムズ

ス・リーグに所属するプロ野球球団。本拠地はファントム球場。親会社は「世界一怖い」、「現実世界の地獄」と恐れられるホラーハウスを持つ遊戯関係の会社。

マスコットキャラクターは人魂をモチーフにしたゆるキャラ、ふぁんとむくん。

『肉を切らせて骨を断つ、骨を断たせて命を絶つ』を地で行くほど打高投低のチーム。

ス・リーグ一の打力を持つが、一方で投手力は万年Ｂクラスのスイーツにも劣る。

選手は容姿や名前が変わっている者が多いことから別名『野球界の百鬼夜行』とも呼ばれている。

海神（うみがみ）ポセイドン

ス・リーグに所属するプロ野球球団。本拠地は海から徒歩３分ほどの距離にある海神（かいじん）スタジアム（チームは『海神（うみがみ）』なのに球場は『海神（かいじん）』なのは不明）。親会社は貿易会社。

コスモスターズに次ぐの資金力を持っているが安易に外部の力に頼らず、豊富な資金力で自戦力を揃えて、それでも足りない所を外部の力（ＦＡやトレードなど）に頼るスタンス。

２０１７年優勝を果たし連覇を狙う。

金翼(きんよく)グリフォンズ
ス・リーグに所属するプロ野球球団。親会社はＩＴ企業。本拠地はグリフォンドーム。ス・リーグ一の投手力を持つ球団とされていたが若手育成が上手くいかない所にグリフォンズを支えてきたベテランが離脱したため多難を極めている。
久石譲二がかつていた球団。
防人(さきもり)ガーディアンズ
ス・リーグに所属するプロ野球球団。親会社は全国有数のセキュリュティ会社。本拠地は伝説の防具から名前が取られたイージスドーム。
名前の通り鉄壁の守備力をもち、最少得点を守りきるスタンスを取る。
首都圏(しゅとけん)コスモスターズ
ス・リーグに所属するプロ野球球団。親会社は全国でも有名なゲーム会社。本拠地は開閉型のコスモドーム。
初代ス・リーグチャンピオン。豊富な資金力を元にスター選手をかき集めてきたが、守備位置が被る、若手が育たないなどの問題が発生し一時期停滞。その反省を元にＦＡ獲得もするが育成にも力を入れるようになる。

幕間　遅れてきた男とスイーツ一軍選手たち

３月末。スイートエンジェルズ本拠地、スイーツスタジアム。
美空星蘭（みそらせいらん）はまだヘッドコーチだった去年のシーズンを思い出していた。
「……酷かったわね、去年は」
遠い目で空を見ながら呟く。
失点を許す投手陣に繋がらない打線。ス・リーグ最弱の名前の通りの酷さで最下位だった。
５位グリフォンズとは９ゲーム差。１位ポセイドンとは４０ゲーム差という散々な成績だった。
Ａクラスだったのは美空が現役時代に一回あるだけ。それ以外は全てＢクラスだ。

スイーツが優勝する前にスイーツ自体が消滅する。

それが多くの野球ファンが思うスイーツの印象だ。
だが美空の考えは違う。
（今年こそ優勝の旗はスイーツにたなびく！）
幾年も待ち焦がれていた時が、ついに訪れた。
最弱球団の汚名を持つスイーツにもスターと呼ばれる選手はいる。
一人はスイーツの守護神、響梅太郎（ひびきうめたろう）。プロ１６年で通算１８０のセーブを積み上げたスイーツの歴代抑え投手最強といえるストッパーである。
ただ、彼は抑え投手だ。リードしている場面で登場する選手である。
勝利の道を確かにしてくれるものの、自ら勝ちを掴み取ることはできない。
いくら響が絶対的でも、チームが勝っている状況でなくては響の出番がない。
つまり、響がより輝くためには、他のスター選手が必要だというこ

とになる。チームを確実に勝ちへと導くスターと呼べる選手は二人いる。

隠九条憂男（いんくじょうゆお）

プロ４年目で初年度こそプロの壁を越えられず苦労したが、その壁を乗り越え今ではクリーンナップを務める長距離砲のアベレージヒッターである。

中宮寺優奈子（ちゅうぐうじゆなこ）。

去年ＦＡでスイーツに加入した女性選手で『肉を切らせて骨を断つ。骨を断たせて命を絶つ』をモットーとするス・リーグ最強の打撃陣、ファントムズのクリーンナップを務めた強打者である。

プロ１４年で積み上げた本塁打数は２２０。当たればスタンドに飛ぶ、生粋のホームランバッター。そして移籍初年で初の本塁打王（４３本）に輝いた。（ちなみにスイーツで初の本塁打王であり、女性ではかつてガーディアンズに所属していた男気剛拳（おとこぎごうけん）（４５本）に続く二人目）

他の球団にも負けない最強の三、四番である。

スターと言えるほどではないが、二人に次ぐ活躍をしている選手もいる。

入江舞名（いりえまな）。

女性ではあるが優奈子と憂男に次ぐ長打力を持つ外野手で足も速いことから主に五番（隠九条が五番の時は三番）を任せられる選手である。ミスも少なくまた状況に応じて進塁打などを打てるなど計算が出来る選手でもある。

年齢や金銭的な理由で選手が固定出来ない中、埋め合わせで使った結果、成長した若手もいる。

杉井貴士（すぎいたかし）。

憂男と同期入団ということで彼を意識して打撃に力を入れていたが、打撃で彼に勝てないと悟ると自身が目指す方向性を修正。元々器用な人間だったためチーム事情をコロコロ変えられても素直にこなし、バントや進塁打など自分を殺して他者を生かす打撃を身につけた。

どこでも守れ、細かな作戦が立てやすくなる。レギュラーとしての実力もさることながら誰かが離脱した時の穴埋め的な意味でもスイーツに欠かすことの出来ない人材となっている。
古山博光(こやまひろみつ)。
スイーツのエースだった鳳火呼子(おおとりひよこ)の人的保障で獲得したファントムズ第三捕手で、正捕手だった篠原習志の後を継ぐように正捕手に納まった選手である。
駒は揃(そろ)った。
優勝は自分達のものだ。そんな期待が美空の中に起こる。ただし
「投手さえどうにかすれば、ね」
美空は重いため息をついた。
先発投手は崩壊していた。
一番手投手という位置づけになる成田功(なりたいさお)。
ただし最後の詰めが甘くたびたび勝利投手目前で点を取られるなど安定感ある選手とは言えない。
二番手投手には西河原善一郎(にしがわらぜんいちろう)。
多彩な変化球を持つが、六回まで持つことは稀でそれまでに試合を決定付けてしまう失点をするのが特徴の投手だ。
三番手投手として外国人投手、チョロ・イング。
８勝をあげているが相手が二流投手だったから勝っただけでお世辞にも良い投手とは言い難い。それでも中４日でも投げられるタフネスで穴が空きがちなスイーツにとっては貴重な投手ともいえる。
候補と言えるのはドラフト1位で獲得した大卒投手、南部無頼(なんぶぶらい)。
制球力の悪さから四球は多いがオープン戦では奪三振は全投手の中で一番多い。
あまり多くは期待しない。６～７回まで持ってくれればそれでいい。それが無頼に対する美空の評価だった。
それ以外の先発投手はその時に投げられる者を投げさせるとどうしようもないほど整っていない。
中継ぎも似たようなものだが、そんな劣悪な状況で。否、劣悪な状況だからこそ生まれた選手もいる。

岡本悦(おかもとえつ)。
右投げの女性投手でコントロールはあるものの被弾率が高いために他球団なら一軍に上がれなかった。チーム事情で一軍に上げられた女性投手はそこで数多くの変化球を習得。体力がないため連投や回またぎはさせづらいがワンポイントでは計算できる数少ない投手である。
そして今年は二人の選手が計算できる選手として一軍にやってくる。
左の中継ぎとして久石譲二(ひさいしじょうじ)。そして本格右腕の冷泉冬狐(れいぜいとうこ)。
(9回に響。8回に冷泉。先発は5回まで投げさせて状況次第で岡本と久石で何とかしのぐ。これがスイーツの継投パターンになりそうね。そして今年のスイーツは大技と小技を組み合わせた攻撃で相手を苦しめる。負けてもしぶとい。食らいつく野球を)
穴はあるが他球団とも互角に戦える戦力が整ったスイーツ。そのスイーツの快進撃を想像して、美空は笑った。
「楽しそうですね、監督」
そんな美空の後ろから、一人の引き締まった体つきの男が声をかけてきた。
新城護(しんじょうまもる)。
38歳の外野手で、今いるスイーツの現役選手で唯一、投手・美空星蘭と共にプレイした古参である。
「そんなに楽しそうだったかしら?」
美空は照れを隠すように言い捨てた。
「ええ、全身から」
寡黙な男が嬉しそうに笑う。
「新城。貴方も楽しそうね」
「ええ」
嬉しそうにグラウンドの選手達を見渡した後、感慨深く口を開く。
「ついにスイーツの在るべき姿が見られたのですから!」
「そうかしら?」
同じ思いだったがあえて美空は疑問で返す。

「違いましたか？」
生真面目な男には珍しく茶化すような口調で返す。
「そうかもね」
美空はとぼけた。
「……」
「……」
二人の間に永遠とも思える無言が続く。
「ねえ、新城」
その無言を破ったのは美空だった。
「我がスイーツは『反撃のスイーツ』と呼ばれているわね。大体が反撃も及ばず、で終わるけど」
「そうですね」
新城は苦笑する。
「おそらく今年も反撃のスイーツになると思う。去年までと違うのは墨に誰かがいれば返せる選手が増えたということ。だからこそ終盤に代走で出れば帰還できる脚を持った選手が欲しい」
そうなる情景を思い浮かべて、美空はグラウンドのダイヤモンドを見た。
「……」
数年前に顎に死球を受けて以来、打撃が崩れてしまった新城は代走・守備固めとして現在まで活躍している。
新城は黙り込む。その理由を美空は知っていた。知っていたがあえて尋ねた。
「お願いできるかしら？」
「もちろんです。ご安心ください。スイーツのために相手守備陣を破壊する機動力破壊をお見せしましょう」
真面目な表情で新城は言った。そして、微笑む。
「なぁに。持たせて見せますよ。今年一杯くらいは……」
恐怖心から打者として役に立たない身体になっても、怪我や契約などで次々と選手がいなくなるスイーツを新城は支えた。
身体がボロボロなのは美空にもわかっている。

一瞬目を伏せた後、美空はバックスクリーンを見上げる。視線の先には旗をつけるポールが。
「見てみたいわね」
「何がです？」
「あそこに、スイーツのチャンピオンフラッグがたなびく姿が」
「……なるほど。確かに私も見てみたいですね」
「あの、美空監督。よろしいでしょうか？」
若い女性の声。外野手の入江舞名（いりえまな）の声に美空と新城は現実に戻される。
「どうしたかしら？」
感傷に浸っていたのをごまかすように、美空は真面目な顔で尋ねる。
「新入団の外国人と名乗る男を連行しました」
「連行とは、穏やかじゃないわね」
「確か遅れに遅れた外国人が今日くるとはミーティングで聞かされていたような？」
「と、とりあえず連れてきます」
そう言って一度二人の前から姿を消す。
数分後。手錠をつけられた端正な顔立ちの甲冑姿（かっちゅうすがた）の男が姿を現した。
「おおっ！我が美しき姫君!!」
「つまみ出せ」
「ハッ！」
舞名は男の鳩尾（みぞおち）に一撃食らわせると、動かなくなった甲冑男を外に連れ出す。
「な、なんだったのでしょうか。今のは」
「エイプリルフールかハロウィンだったのでしょう」
美空が謎の男を記憶から消去しようとした矢先。
「おおっ！我が美しき姫君!!お会いする日を一日千秋の思いで心待ちにしておりました!!」
どうやって戻ってきたのか、甲冑男が美空の前に姿を現した。

「……新城。警察にグラウンドに変質者が出たって通報して」
「待ってくれ。ミソラ、シンジョウ」
きりっとした声が通報しようとする美空を止める。
美空が振り返るとそこには銀髪の男性が立っていた。
ウィソ・ロッテンハイマー。
かつてスイーツの外野手として活躍した外国人選手で海外スカウトに転身。美空と新城と同時期に活躍した旧友である。
「この男が新加入の外国人投手、チャオ・ワンチェン（超・王臣）です」
「この変態が？」
「ああ、この変態が」
嘘と言ってくれと滲ませる美空に、ウィソは残酷な事実を伝えた。
「おお！我が姫君！その美しいお顔をもっと見せて――」
普段から持っているのだろうか。舞名は美空に飛び寄ろうとした外国人にスタンガンを押し付け失神させる。
「どうしましょう監督？この男、すぐにでも排除しますが」
「そうね、お願いするわ」
「待ってくれミソラ！」
謎の外国人を連れて行かせようとする美空をウィソが止めた。
「変だとは思うがこの男を連れてくるのには本気で苦労したんだぞ！」
「まあこんな変質者を連れてくるのは大変でしたでしょうね」
興味なさそうに言う美空にウィソは続ける。
「じゃあ一つだけ。この男、チャオ・ワンチェンは複数のメジャー球団から複数年契約を熱望されるほどの実力者だ」
メジャーはプロ中のプロだけがプレイすることが許されるトップクラスの野球界である。そんな選手たちが集まるメジャーで複数の球団から複数年契約を申し込まれると言うのはよほどの実力者にしかありえないことだった。
「じゃあ聞くが、なんでそんな男がウチにくる？」
新城が尋ねる。
「メジャーからの誘いを断ったセリフです。『我が主はメジャーにお

らず、日本にあり！』と」
　ぽかんとする美空と新城。
　そんな二人を見ながら笑い話をする口調で、ウィソは続ける。
「そして『我が主の下で働くための力を身につけるため』と彼はエベレストに登りました」
「「意味が分からん」」
　美空と新城がそう言ってしまうほど、男の行動は理解できなかった。
「エベレストに登った後、彼はユーラシア大陸を徒歩で横断しドーバー海峡を泳ぎ、手こきボートでアメリカに渡りカナダ、ロシア、北朝鮮、韓国と歩いて渡り日本に向かって手こきボートで向かおうとした所を接触したというわけです」
「「……」」
　二人は声が出なかった。
「まあ、頭の中身は保障は出来ないが、実力は保障できるぞ」
　明るく言うウィソの言葉を聴きながら、美空は謎の外国人を見る。
（これをどう判断して信用しろというの？）
「信用していないようだな、ミソラ！俺はこの男と接触するのに――」
「待たれよ、ウィソ殿！」
　抗議の声を止めたのは当の本人だった。
　再び止めようとした舞名だったが、首下に当てられた刀で動きを止められてしまった。
「いきなりこのような変な男が現れて信用して欲しいというのは無理というものでしょう！」
（（あ、変と言う自覚はあるんだ……））
　美空と新城の心の声がハミングする。
「信用されるために必要なのは言葉にあらず……証明である！今からこの超・王臣、我が姫君にお仕えするに相応（ふさわ）しい実力を持っていることをお見せいたしましょう!!」
　そう言うと王臣はマウンドに向かっていく。
「何だお前は!?今は俺が調整中だぞ！」

マウンドで古山を相手に調整を行っていた成田が怒声をあげたが
「超・王臣である!!」
「あ、そうですか……」
男の迫力に負け（というより関わりたくないという気持ちに負け）、成田はマウンドを降りた。
そして王臣がマウンドに立つ。
十分に肩を回し投球できる準備を整える。
「王をも超える臣下の力、存分にお見せしよう！」
男が気合を入れるや否や、男の髪が某アニメのキャラクターのように金髪に逆立つ。同時に甲冑ははじけ飛び、ユニフォームが姿を現す。
王臣が大きく振りかぶる。
ボールを握る右手が唸りをあげる。
放たれたのはストレート。だが浮き上がるかと錯覚するような伸びの火の玉のような、否。魂のこもった砲弾のような力強いストレート。

バシィィィンッッッ!!

捕球した古山の手が痺（しび）れる。
数多くの投手の球を受け止めてきた古山ですら受けたことの無い、衝撃とスピードのあるストレートだった。
「貴方は……とんでもないストレートを持っているのですね」
驚きを隠せぬ古山が、そう言いながらボールを返す。
王臣は、余裕の表情で言葉を返す。
「ハハッ。今の球がストレートに見えたかな？」
「なん……だと！」
（ストレートではないだと!?）
驚く古山に王臣は続ける。
「今の球はストレートではない。某が仕える尊き姫君の魁（さきがけ）となる、神をも殺す魔球。そう……超（チャオ）・神（シェンチェン）臣である！」

（あ、ただの馬鹿か……）
古山はスルーすることに決めた。
「見ていただきましたか！我が主!!」
「ええ見たわ」
嬉しそうに近寄る王臣に、美空はきりっと顔を引き締める。その姿はまるで近寄ることすら許されない気高き女帝のよう。その姿に王臣は思わず立ち止まる。
「その前に私は聞きたい。私はスイーツを優勝に導きたいと考えている」
「承知！」
王臣は力強く答える。
「改めて聞くわ。貴方はただ私を狂信するファンの一人？それともスイーツの一人としてス・リーグの頂点を目指す仲間？」
その言葉に王臣の中にあった、浮かれていた気持ちが消えうせる。
王臣が日本に来た理由。それはインターネットで見た現役時代の美空に惹(ひ)かれたからだ。容姿もさることながら、投げるフォーム。諦めた選手達の中で一人、敵に向かっていくその姿に王臣は心を奪われた。
目の前で自分に厳しい言葉を投げかける女性は、映像の中で見た女性。否、それ以上に気高く、美しさを持っていた。
（我が姫君が必要としているのは投手である超・王臣であって、狂信する我ではない）
先ほどの変な外国人から一変、名将に付き従う規律ある兵士のように王臣は敬礼をし、答える。
「無論、スイーツと共に戦う戦士であります。美空監督！」
どこか変だが美空の下で共に戦う選手の誕生だった。
「……世も末ね」
「人格と才能は関係がない。とは言っても」
「卑怯ですね、ああいうの」
三人とも馬鹿馬鹿しいといった感情を拭(ぬぐ)えないが、共通して思うことはある。

新外国人(超・王臣)が使えるということ。穴が埋まらなかった先発がが整ったということに。
美空は新城をチラッと見ると、新城は微笑を浮かべた。
常識をはるかに逸脱する外国人の加入で、優勝への道が見えたと感じた。
ただしその光明は一瞬で消える。ウィソの言葉によって。
「ところでミソラ。チョロ・イングが緊急帰国したぞ」
「なんで？」
「給料と環境」
「なるほど」
それだけで美空は納得した。
弱小球団のスイーツは金がない。金がないから環境も悪い。だから育っても選手が外に出て行く。外国人投手は嫌気を指して出て行く。スイーツにとっては日常茶飯事のことだった。
「あと新加入するはずだった外国人が幼女への痴漢行為を働いて来日できなくなったぞ」
美空は大きくため息をつくが、次の瞬間気を取り直す。
(良いことも悪いこともいつも気まぐれにやってくる。大切なのは、良い事で喜び、悪いことで必要以上に沈まない事。そして自分のできる最善を、できる限りでやっていくことね)
「忙しくなるわね」
その言葉とは裏腹に、美空の顔は緩んでいた。
「ところで美空監督お願いがあるのですが」
ニョキッと美空の前に立った王臣に複雑な表情をする。
「……あの、いきなり出てこないでくれる？ビックリするから」
それは申し訳ございません、と頭を下げて王臣は続ける。
「一刻も早くチームに溶け込みたいので、自己紹介をしていただいてもよろしいでしょうか？」
「あ、そうね」
常識的なことも言えるんだ、という素振りは隠し、美空は選手たちを集合させる。

「え～、突然で済まない。今日チームに合流することになった超・王臣だ。皆仲良くするように……あと私に何か言いたげな視線を送るのはやめなさい」
　選手たちに釘をさしてから美空は続ける。
「ではいっぺんに言っても覚えられないでしょうから、野手のレギュラーを自己紹介するわ」
「だったら打順ごとに説明した方がいいわよね」
　と、背中までである黒髪で紫の口紅を塗ったオカマが高い男の声で会話に入る。
「じゃあ八千代からお願い」
　美空の言葉に先ほど提案したオカマがコホンと咳ばらいをした。
「では、打順一番。八千代智那、２７歳。オカマだけど可愛いマイハニーがいるわ。ポジションはファースト。打率は規定打席達成選手の中で低い方だけど出塁率は高いわ。よろしく、イケメンさん」
「こちらこそよろしく頼む！」
　投げキッスをするオカマに、王臣はピシッと敬礼をして答える。
（八千代さんの投げキッスを嫌がるどころか真面目に返しているよ、この人……）
　他の人も思っていることを中性的な容姿のチャラそうな男が口を開く。
「じゃあ次は杉井貴士、２３歳。ポジションはセカンド。ポジションは主にセカンドを任されていますが、ピッチャーとキャッチャー以外ならどこでも守れます」
「なるほど、それは素晴らしい！」
「三番サード、隠九条憂男。２３歳。さっき紹介した杉井とは同期です。タイトルとかはありませんが、打つのには自信があります」
「なるほど、良い身体をしている！」
　ウッと一瞬嫌そうな顔をする憂男に同情しながら長身の小麦色の肌の巨乳女性が続く。
「私は中宮寺優奈子。３２歳独身。四番でポジションはレフト。通算本塁打は２２０。去年本塁打王になったので、どでかい花火は私に任

せて」
「本塁打王！それは素晴らしい。大船に乗った気で行かせてもらいましょう！」
　では、と先ほど王臣を取り押さえた女性が自己紹介する。
「五番センター入江舞名（いりえまな）。２５歳の独身。自慢できる実績と言えば本塁突入アウトを三回成功させたほどの強肩かな」
「素晴らしい肩の持ち主だ」
　今度は俺か、と苦労人顔の男が続く。
「六番ショート直木得留（すぐきえる）は別件のため外して。七番ライト白藤聖（しらふじひじり）。３３歳既婚者だ。打撃も出塁率も守備も肩も一軍半レベルだが一軍半以下の投手には強い。一軍半キラーと覚えておいてくれ」
「なるほど、期待させてもらいます！」
　白藤さん……なんという自虐的な自己紹介を。と思いながら日本人男性を平均化したような特徴のない容姿の男が続く。
「八番キャッチャー古山博光（こやまひろみつ）。２８歳独身。タイトルはないですが去年後逸は１でした。安心して投げ込んでください、と言っておきます」
「なるほど。後逸が１とは安心して投げられるというもの。大いに期待させてもらいます！」
（よし、今度は俺が！）
　気合を入れる投手、成田だったが
「一回では覚えられないでしょうから今日はここまでね」
　あ、そうですよね……と気合を入れていた成田が意気消沈する。
「それじゃあ、皆。２０１８年、スイーツの年と言えるような活躍を期待している、解散！」
　美空がそう言って締めた。

外伝　超王臣物語

２５年前

台湾でとある男の子が誕生した。

彼の祖先は中国のとある王朝の重鎮（じゅうちん）だったが、讒言（ざんげん）を信じた王によって国を追われて台湾に逃げ、失意のうちにこの世を去った。

その王の仕打ちを恨んだ子孫は代々長子に『王を超える臣下』という意味で王臣をつけるのが習わしになった。

これは先祖代々続く『王臣』の名前を引き継いだ男の話である。

▪★

王臣少年は運動神経が並はずれていた。

小学生の時に中学生と対等に渡り合える身体能力を持ち、中学生の時には高校生と渡り合える身体能力を持っていた。高校生の時に王臣少年の運命を大きく変えるものに出会う。

クラスメイトから野球に人が足りないから助っ人で来てほしいと言われた。

ここで彼は野球の虜になった。

野球は打席に立てば個人競技だが、守れば味方と協力しなければ点を守れない団体競技。個人競技と団体競技。その相反するものを矛盾することなく成立させていることに。

サッカーやバスケットボールなどの他の運動部でも活躍した王臣だが、野球は元々才能があったのか、めきめきと実力をつけてきた。

投げれば完全試合やノーヒットノーランを、息をするように成し遂げた。

チームが弱かったため大きな注目を浴びることはなかったが、そんな彼の活躍を聞きつけたメジャーのスカウトが接触するようになっていた。

そんなある日。台湾に自分の敵はいないと思った王臣はどこに入団するべきか考え、参考にしようと日本の野球を調べた。

彼はＹｏｕＴｕｂｅである動画を見つける。それは美空星蘭（みそらせいらん）の現役時代の投球だった。

試合は完全にスイーツの敵だらけという試合だった。
対コスモスターズ戦。補足説明を見るとこの試合はこの試合勝てばコスモスターズが三連覇を成し遂げる試合と書かれてあった。
スイーツの投手、美空星蘭は毎回ランナーを背負うピッチングだったが要所を締めて9回まで無失点で切り抜けていた。

『俺達はコスモスターズの優勝が見たいんだよ!』、『さっさと諦めろや、この最下位エース!』、『この試合頑張ってもお前らはもう最下位なんだよ!』

日本語が分からない王臣でも、観客の言葉が彼女に向けてのブーイングだと理解出来た。
後ろを守る選手は諦めを漂わせている。
それでも彼女はキャッチャーミットめがけてボールを放つ。敵は打たれるのを期待し、味方は勝利を諦める中、彼女は独り投げ続けた。
9回裏。ついにその時は訪れる。
0—0で迎えた9回裏。美空は2アウトながらヒット、四球、味方のエラーで満塁の危機を背負っていた。
打者は本塁打王競争で1位タイの四番打者。フルカウントの7球目。孤軍奮闘を続けていた彼女が、力尽きた。
投げたボールは真ん中付近の緩い変化球。打って下さいと言わんばかりの失投を四番打者は看板直撃のホームランを放った。
割れんばかりの喝采に包まれるドーム球場。
美空は崩れそうになる身体を堪え、三塁ベンチに引き揚げる。
そして。三塁ベンチから胴上げする相手球団を燃え尽きた身体で見ていた。
▪
▪★
動画を一時停止して、王臣はコメント欄を見る。
コメントにはコスモスターズの勝利に歓喜するコメントで埋め尽くされていたが、王臣だけは違った。

美空星蘭、美しい。

それが動画を見た王臣の全てだった。

周りが全て敵になり、味方も勝利を捨てた中でも諦めず、独りで勝利につながる投球をした彼女の姿に。

そして自分に問う。自分は彼女のように投げるのは出来るのか、と。

「出来ない」

王臣は自らの問いに小さく苦虫を潰したような顔で答えた。

彼にはいつも味方がいた。彼の実力に群がる味方が。

今の彼には多くの人間が集まるが、彼の超人的ともいえる実力が無くなったら。おそらく味方はクモの子を散らしたようにいなくなるだろう。

動画の彼女と今の自分。どちらが投手としての技量は上かと言えば王臣は自分が上だと心から言える。しかし野球選手としてどちらが上かと問われれば、美空と答える自分がいた。

王臣は決心する。

「行こう、我が主。美空星蘭の元へ！」

こうして王臣はメジャーからの誘いを全て断ると、彼女の下で働くに相応しい人間になるために自分を磨こうと何故かエベレストに向かっていった。

王臣２２歳の時だった。

三年後。彼がスイーツの海外スカウト、ウィソ・ロッテンハイマーに勧誘され監督となった美空の元で投手となるが、それはまた別の話。

幕間　エースとは

「成田」
美空星蘭はベンチの隅で落ち込んでいる成田功に近づいた。
「何ですか、自称エースに」
成田はやさぐれていた。超・王臣の存在感同様の凄まじい投球にショックを受けていた。
「まったく……」
女性監督はやさぐれた投手に聞こえないため息をついてから続けた。
「開幕戦の準備は出来ているかしら？」
「ふぇ!?」
先ほどまでの投げやりになっていた顔が一変、どんな顔をすればいいのかわからない表情へと変わる。
『ふぇ!?』じゃないわよ。開幕戦の準備は出来ているのか？って聞いているの。まさか出来ていないとは言わないわよね？」
「い、いえ……出来ていますが」
呆然としながら成田は否定する。
彼が驚いたのには理由がある。

開幕戦はエースが投げる。エースとはチームで一番強い投手。だったら自分は開幕戦で投げられるはずがない。

成田にとってエースとはそういう存在だったからだ。
「じゃあ任せるわ。エースの名に恥じない投球を期待するわ」
美空は成田をエースと呼ぶと成田の前から去ろうとする。
「ま、待ってください。監督！」
成田の声に美空は振り返る。
「何かしら、成田？」
「あ、あの……」
成田はぽつぽつと話を紡ぐ。

「か、監督……俺を、エースと呼んでくれるのは嬉しいのですが、開幕戦は……王臣に」
開幕戦を王臣に譲る。それを言うと言うことは自分が負けているということを認めることになる。その抵抗はあったものの成田は言った。譲られたエースでいることが我慢できなかったからだ。
その意図を汲んだ美空は目の前の男に尋ねた。
「成田。私がスイーツの投手として活躍していたことは知っているわよね？」
「は、はい」
美空は成田がスイーツに入団する前年に現役を退いたが、美空の現役時代をテレビや球場で見ている年代だ。知らないわけがなかった。
「世間では私をスイーツのエースと呼ぶけど、私は自分をエースと思ったことは現役最後の一年しかないわ。長谷部良平、松野稔と言った他にエースと呼ぶに相応しい人たちがいたから」
「長谷部投手と、松野投手が、ですか……」
失礼と思いつつも成田はそう言った。
二人は負け越しが多く、スイーツで成し遂げた勝利数は美空よりも少ない。美空が自分より二人を上という理由が理解できなかったからだ。
そんな反応を何度も見ているのだろう、美空は気にせず続ける。
「あの二人は負けると解っていても誰かが投げなければならない所で投げていた。結果、罵声を浴び、自らの経歴に傷がつくことになっても。全ての責任を背負っていた」
「……」
「エースとは勝つ投手じゃない。エースとは〝こいつで負けたのなら仕方が無い〟。そう思える投手のことよ」
美空は言い切った。
「チームのため、無茶させてしまったわね」
先発の成田は中継ぎや抑えなど色々やらされた。それでも彼は文句一つ言わずそれに従った。先発として成績を残していない成田だったが、選手のことを考えていないともいえる起用によって負け越

しの数を多く積み重ねたからとも言えた。それでも彼は投げ続けた。
多くの投手が離脱するチーム事情を理解して。
「色々と……背負わせてしまったわね。ずいぶん……苦労をかけたわね」
美空は視線を落とした。
「か、監督……」
成田が震える。
「成田。貴方がスイーツのエースよ。開幕戦、頼んだわよ」
それだけ告げると、美空は成田の前から姿を消した。
（監督、やはりエースは……勝つことが出来る投手だろ!?）
成田は心の中で訴える。自分の思うエース像が間違っているとは思わない。
そう思う成田だが美空の言うエース像を否定することは出来なかった。
「……」
成田はしばらく呆然と立っていたが、
「うおおおぉぉぉぉぉぉっっっ!!」
とベンチを飛び出し、マウンドに立つと叫び声をあげた。
「俺が!この俺、成田功が……スイーツのエースだッ!!」
叫び声が、グラウンドに響き渡った。

第六話　オープン戦

スイーツスタジアム。あと数時間でスイーツ対ガーディアンズの試合が始まる。

プロ野球では3月にオープン戦が始まる。

4月に控える公式戦開幕に備え、実戦での調整を行う意味が強いオープン戦。当然、結果はそこまで問われるものではない。

だが1軍が確約されていない選手にとっては大きなチャンスである。

オープン戦で他球団の一線級と勝負し、好成績を残すことで、一軍入りの道も見えてくる。

調整目的で試合に出場する〝1軍選手〟とは目の色が違う。

もちろん。念入りにバットを振る青年、有賀草悟も例外ではなかった。

二軍での紅白戦の結果や本人の努力、これという内野手がいないというチーム事情もあって一軍からお呼びがかかったのだ。

首脳陣は草悟に代打からの守備固めをさせる思惑を本人に伝えている。

スタメンではないことに多少の不満はあるものの、実績がない自分がないきなりスタメン出来るはずがないのも理解している。

（ならば代打でヒットを放ち、守備も出来ることをアピールすればいいだけのこと）

草悟は念入りに柔軟運動をする。

（必ず結果を出してやる）

瞳に闘志を宿す。

康友と弥子がいないことに対する不安や揺らぎはなかった。

2月、幾度にも渡る二軍戦において結果を残せなかった二人に、チャンスが無いのは当たり前のことである。

（このチャンス、絶対ものにしてやる！）

2人のことなど、草悟の頭には無かった。

集合時間近くになり、まばらに人が集まり始める。
来る人来る人、見知らぬ顔がグラウンドのど真ん中でアップをするのを遠めで眺めている。
おそらく新人だろうというのは理解していたが、普通なら向こうから挨拶にくるものだ。
人見知りのする性質として、百歩譲っても話掛けられる雰囲気は微塵(みじん)もないのは、非常に問題がある。
「久しぶりだな」
その中に一人の男が草悟に声をかける。
隠九条憂男(いんくじょうゆお)。
草悟がプロ野球入りするきっかけをつくった恩人ともいえる先輩である。
去年の突然の訪問以来、二人は一度も会っていない。
投手から内野手に転向したことは人づてに聞いている。バッティングと足は一軍で通用するレベルを有しているが守備などは素人レベルとも。そんな人間が短時間でオープン戦に出られるほど成長してきた。
その異常な成長スピードに、憂男は気になった。
「おはよう。草悟君」
「あ、おはようございます……」
草悟は不満そうな顔で振り返る。だが憂男は気にしない。楽しそうに草悟に話しかける。
「あと数時間で一軍の試合でプレイする感想は？やっぱり緊張するかい？」
「オープン戦って練習試合ですよね？練習試合で緊張する人間っているんですか？」
聞く人が聞いたら激怒しそうな言葉を、草悟は平然と吐き捨てた。
「練習試合……確かに練習試合だな！」
青年の言葉に一瞬言葉を失った憂男だが、チームや選手の今後を占うオープン戦を練習試合と言い切る新人に器の大きさを感じて笑う。
だが草悟は笑っていない。

（いくら一軍の選手が出るといってもオープン戦は前哨戦に過ぎない。俺が活躍したいのは公式戦。誰もが本気にならざるをえない公式戦であの男に、広田義信（ひろたよしのぶ）を倒す。それが俺の目的なのだから！）

「……」

そんな草悟の表情を、憂男は黙って見た後、「まあ無理して怪我だけはするなよ」と言い残し目の前から姿を消した。

▪★

そんな様子を厳つい長身の男が遠くから見ていた。

南部無頼（なんぶぶらい）。

即戦力と球団内で評判高く、キャンプから1軍帯同を続けている。

制球力がないと酷評されていたが、今の所はその酷評に反して順風満帆なプロ人生をスタートさせている。

入団会見のときに一度会ったことはある。だがその時は「よろしく」という挨拶程度。それ以上の接点はない。

（高校生で投手から内野手に変更したと聞く。なのに『５５』をつけているということは荒木大吾（あらきだいご）三軍監督に認められたということか）

球界に素晴らしい功績を残した選手に球団がその選手の背番号は永久欠番にすることがあるが、スイーツでは球団に大いに貢献した選手が引退する時に、その背番号をつけるに相応しいと思う人間が出るまで背番号を本人に預ける準永久欠番制度を採用している。

５５はスイーツ創立初めてのタイトルとなる打点王に輝いた荒木大吾が最後につけていた背番号だ。大吾が引退して十数年。多くの選手が大吾に憧れて５５を欲していたが、大吾は誰にも与えることはなかった。

十数年も譲られることがなかった５５が譲り渡された。それも未知数中の未知数の新人に。相当期待されると無頼は感じた。

（どういう活躍をするのか、楽しみだな）

同期入団した年下の青年に背を向けて準備に向かった。

▪★

試合は7回まで進み3―5でスイーツがリード。

ちなみに失った3点は4回まで無頼である。

無頼から草悟と同じく一軍に呼ばれた久石譲二がランナーは出しながらも0に抑えると、味方打線がそれに応えるかのように変わった選手に連打を浴びせた。
試合は3―6に変わり久石の代打で草悟の名前がコールされる。ノーアウト2塁1塁。流れは完全にスイーツに来ていた。

オープン戦とはいえ相手の波に飲まれるようにして負けては士気に関わる。

そう考えたガーディアンズは勝利の方程式として起用していた右腕を投入する。
君先正哉。
ホールド40を上げ、去年のセーブ数38を誇るガーディアンズの守護神、具志堅城高につなぐス・リーグ屈指のセットアッパーである。
君先はあごに蓄えた髭を触りながら左打席の草悟を見る。
(若いな……これが噂のドラ6か)
君先が次に見たのは、草悟のバットだった。
(短いな……新人でこんなバット持った奴は初めてみたぞ)
「果たして、その実力はどんなものなんだろうな」
自分以外聞こえない小さな声で、君先は注目の新人を見据えた。
▪★
自分に対して色々考える君先に対して、草悟は冷静だった。
冷静というわけではない。

打つ。

それしか頭になかった。実績ある一軍選手と相対することへの緊張や初めての打席に感激するなどの感情は、ない。
君先がランナー達をチラッと見た後、大きく振りかぶる。投げたのは外角低めのストレート。ただでさえ短い草悟のバットで一番届き

にくいところに投げた。しかしストライクゾーンからわずかに外れた。
「ストライクッ！」
審判はストライクと宣告した。
（今のはボールだろ？どこに目をつけているんだ？）
草悟はチラッと審判を見たがすぐに気を取り直す。草悟と同じく一軍に呼ばれた冷泉冬狐（れいぜいとうこ）から「審判の判定に必要以上に不服を申し立てるな」と釘を刺されたからだ。
（まだ1ストライク。まだチャンスはある）
そう考え、草悟はバットを構えた。
▪★
（このルーキー……）
君先は舌打ちした。
普通の打者は際どい球にバットが出かかったりする。それより少し上の打者はピクっとバットが動きそうになる。だが目の前の新人は全く動かなかった。手が出なかったわけではない、完全にボールを見切っていた。そんな見逃し方だったからだ。
（ん？）
右手からじんわりと汗が出ていることに君先は気がつく。その汗の正体が恐怖だと知り、狂ったような笑みを浮かべた。
（おもしれぇ、こんなルーキーが去年最多ホールドを獲得した俺に恐怖心を植え付けるとは！乗せると将来ヤバイことになりそうだ。出るくいは打っておかないとな！）
▪★
二球目。君先が投げたのは内角高めの１５２キロのストレート。
「！」
草悟は踏み込み、フルスイングした。
鋭い打球はサードの横のファールゾーンを突き抜ける。
（速かったか）
２ストライクと追い込まれたにも関わらず草悟は冷静だった。
▪★

（ちっ……。舐めていたわけではないが）
だが自分の想像よりも草悟が上だった。久石や冬狐が認めた草悟のスイングスピードを、君先も身をもって知ったのだ。
自分の渾身のストレートを当てたのだ。それも当てにいくのではなく、フルスイングで。
（タイミングが合っていたら、良くてフェンス直撃、走者一掃のツーベースヒット。最悪ホームランだったな……）
その後。慎重になりすぎた君先は三球連続で見極められてしまう。
カウントは3ボール2ストライク。
君先はキャッチャーのサインを見る。
外に逃げるシュートだった。
君先はキャッチャーの構える外角低めにシュートを投げた。
だが汗で握りが甘くなり、シュートが曲がりきらない。
キャッチャーの構えるミットよりも上に入った球を草悟は振りぬいた。
▪★
（よし！完全に捉えた！）
草悟は確信する。ボールはセンター前に抜ける。そう思った時だ。
（!?なんだとっ……）
投手の横に抜けると思った打球に、顎鬚の投手が足を出したのだ。
踵に当たったボールはふわりと上がりショートの前に落ちる。そのボールをワンバウンドで処理した遊撃手はすぐさま三塁手に送球。サードベースを踏んだ三塁手はすぐにセカンドベースを踏んでいる二塁手に転送する。フライを警戒していた二塁走者の走塁が遅れ1アウト。
二塁走者同様、走塁するタイミングを逃した一塁走者もアウトになり2アウト。二塁手は一塁手にボールを転送する。
センター前と思った当たりがショートへのゴロに変えられたことにショックを受けて立ち止まっていたため、3アウト。
ノーアウト二塁一塁からのトリプルプレイ。
君先の足に異常がないことを確認したガーディアンズベンチは大

いに盛り上がり、追加点のチャンスが一気に終わったスイーツは一気に暗雲が立ち込める。
その後、美空は草悟が一塁に走ることを怠ったとして守備に就かせる予定をキャンセル。草悟が守るはずだったショートに別の人間を据えた。
▪★
（勝った気がしねえな……）
温かく迎えるベンチと裏腹に、君先はニコリともしなかった。
渾身のストレートを打ち返され、新人にプレッシャーをかけられて明らかなボールを三球連続で投げさせられた。最初に投げたボールをストライクとされなかったら四球で歩かせていた。
最後の踵で打球の進路を変えたのも体が勝手に反応しただけで意図的にしたものではない。
だが結果が求められるのがプロの世界。その結果を出せるのが一軍で活躍するプロである所以（ゆえん）である。
「……大したルーキーだ」
数多くの修羅場を乗り越えた中継ぎ投手の呟きはワイワイと騒ぐベンチにかき消された。
▪★
ベンチで草悟は呆然とする。
追加点が入るチャンスでトリプルプレイという最悪の結果を出してしまったのだ。また君先の好プレイにショックを受けて走ることを怠ったのが一軍監督の美空にマイナスに写り守備固めの機会を逃したのだ。
そんな草悟の隣に久石が座る。
「草悟」
「何ですか？」
体を震わせて、草悟は聞き返す。
「試合を見ろ。お前が見なければならないものが、目の前にある」
視線を逸らす草悟に優しく、それでいて厳しく久石は言う。
「試合を見るんだ」

それが１０歳以上も年下の青年を追いこむ事を承知で。
草悟は顔を上げる。
マウンドには８回を任された冬狐。三振で１アウト取ったものの、その後アンラッキーとも言えるポテンヒットと悪送球で三塁にまで進められていた。
次の打者があと少しでフェンス直撃のセンターライナーを放つ。
タッチアップする三塁走者。
センターを守る女性、入江舞名の矢のような送球を中継に入った二塁手、杉井貴士が受け取るや否やすぐに振り返り捕手の位置を確認せずに捕手、古山博光に送球する。
無駄のない送球に三塁走者は回りこんでタッチをかいくぐろうとするが、古山の素早いタッチを避けることが出来ず３アウトに終わった。
誰か一人でもミスをしたり、諦めていたら点を許していたアウトだった。
「……ッ！」
一軍の選手が見せる本物のプレイに、草悟は絶句する。
心の折れた音が聞こえた。
どんな困難にも、どんな辛酸にも、一人で戦い、一度も折れたことの無い心が折れた音。
それでも草悟は歯を食いしばってみていた。
草悟の心を初めて折ったのは、敵ではなく味方の見事なまでの守備だった。
試合はスイーツが逃げ切り３―６で勝利した。
勝利の余韻に酔いしれる選手とファン。その中で草悟は一人悔しさに目に涙を浮かべては拭っていた。

第七話　同年の好敵手（なかま）

試合後。有賀草悟（ありがそうご）は二軍降格を宣告された。

帰りのバス。疲れて寝る者。勝利に喜び騒ぐ者。そして草悟のように結果を出せず意気消沈する者と様々だ。

「草悟」

隣に座る久石譲二（ひさいしじょうじ）が話しかける。

「どうだ。草悟。これがプロの世界ってやつだ」

「……」

草悟がポツリポツリと言葉をつむぐ。

「プロとは、何なんでしょうか……」

「結果を出せる人間のことだ」

普段から考えているのだろう。久石は即答した。それとこれは俺の持論だが、と続ける。

「試合は戦場と同じだ。弱い者、運がない者、準備不足の者、油断した者……そういう奴から消えていく」

「……」

試合を戦場と言い切る久石に草悟は違和感を覚える。試合では人は死ぬことはない。だが久石の言葉にはそんなことが言えない説得力があった。

「草悟。強くなれ」

「……はい」

そう返事をする草悟は宿舎に着くまで頭を下げたままだった。

▪★

強くなれ。

そう久石に言われたものの、草悟は悩んでいた。

だがどうすればいい？

久石に聞いたが「それは自分で考えることだ」と教えてくれなかった。

二軍落ちを通達された草悟はタクシーで二軍の宿舎に足を運ぶ。だがその足取りは重い。
誰とも会いたくない。一人になって泣きたかった。
だが神様はいじわるだった。あと少しで自分にあてがわれた部屋に着く。その直前だった。
「あ、草悟！」
「おお、草悟じゃないか！」
青津弥子（あおつやこ）と赤木康友（あかぎやすとも）だった。二人は草悟を見るなり足早に歩み寄る。
「ねえ、オープン戦はどうだったの？」
「おい、教えろよ！」
二人はまだ結果を知らない。悪気の無い二人の興味津々な言葉は草悟にとって酷だった。
「……や、やっぱりプロは厳しいなぁ。はは、ははは……」
今にも泣きそうな気持ちを抑え付け、草悟は小さく苦笑した。
「う～ん、やっぱり厳しいな」
そんな草悟を尻目に弥子は考え込んだ。その理由が草悟にはわからなかった。
「厳しい？どういう意味だ？」
疑問に思う草悟に「だってさ」と唇を尖らせる。
「草悟に私の球は通用しないでしょう？でもそんな草悟が打てなかったってことは、草悟に通用するレベルは最低限必要ということでしょ。プロで戦うには。そういう意味だよ」
あっさり言う弥子に康友が草悟の心をえぐる一言を放つ。
「凡退でもしたか？」
「……」
その一言に草悟の顔が崩壊する。
「あぁそうだよ。自慢のバッティングで凡退、しかもノーアウト2塁1塁というチャンスを潰すトリプルプレイだよ！」
「そうか、それは俺にとってきついな」
弥子同様、草悟を心配するわけでもなく康友も考え込む。
「なんで康友がきついんだよ！」

「だってお前のバッティングって俺たちの中でダントツだろう？そんなお前にヒットを許さない投手がウジャウジャいるなら、俺なんかが一軍に上がっても活躍できるわけがないだろう。そういう意味でついって言ったんだよ」
「……」
　二人の言うことは草悟にとって意外とも思える言葉だった。
「なあ」
「教えてくれないか？」
　二人の言葉か重なる。
「どういう流れで打ち取られたか」
　二人の言葉は興味本位ではなかった。草悟を傷つける意味合いでもない。草悟の話を元にどうすれば自分が一軍で通用するかの糸口にしたい、そのような思いが込められた言葉だった。
「……」
　草悟は首を落とし、身体を小刻みに震わせる。親しき間でも一軍に上がるためには敵でしかない。そう考えている草悟にとって普通に慰められるよりも嬉しかった。
「ど、どうした草悟！」
「何てひどいことを言うんだよ康友。謝りなよ！」
「いや、弥子。お前も同じこと言っただろうか！」
　自分たちの言葉が草悟を傷つけたと思った二人は言い合いを始める。
「……ふふっ、ふはははははっ！」
「ど、どうした草悟！」
「康友の顔が面白くて笑ったんだよ康友。謝りなよ！」
「弥子。俺に対して失礼すぎるだろ！」
「いや、ごめんごめん」
　草悟は自分が悩んでいたのが馬鹿馬鹿しくなった。
　自分の会心の当たりを相手に阻まれた。たった一度の失敗で絶望していた自分に。

たった一度壁にぶつかっただけでウジウジと悩んでいたら目の前の二人に抜かれる。

そう考えた草悟に先ほどの後ろめたさはすでに無かった。

「教えてもいいけど、ここでは何だから」

そう言って三人は草悟の部屋で話し合った。

「やはり初球にバントだろ！1アウト3塁2塁になるだけでなく上手くいけば草悟も生きてノーアウト満塁になる！」

「何を言っているんだよ、康友。草悟はバントの練習なんてほとんどしていないし当て損なって下手したらゲッツーになる可能性がある。やっぱりここは打つのが正解だったよ！」

再び言い合いをする二人を見ながら草悟は思った。

（こうやってすぐに次につながる行動をすることこそが強くなる方法なんだろうな）

「ありがとう、二人とも」

そのことに気がつかせてくれた二人に草悟は礼を言った。

「ん？」

二人の顔色がどんどん悪くなっていく。

「草悟が、お礼……だと!?」

「草悟！今すぐ医務室に行こう！」

「え？」

「弥子。お前は足を持て！俺は上半身を持つから！」

「うん、わかった！」

「お前らなぁぁぁぁぁぁっっっ!!」

草悟の怒声が部屋中に響き渡った。

第八話　大吾と草悟

二軍落ちが決まった翌日。
草悟は三軍監督・荒木大吾（あらきだいご）の部屋を訪れていた。
「三軍に戻りたいだと？」
開幕一軍に残れなかった若手は、二軍で実績を上げることで一軍への道が開かれる。
若手選手の強化と故障選手のリハビリの意味合いが強い三軍にいてもあまり意味が無い。
一年目での一軍入りを目指す草悟が戻ってくる理由は、無いはずだった。
「俺は二軍で通用する実力が欲しいのではない。一軍で戦える実力が欲しい」
「なるほどな」
普通なら何をいっているのだ？と言いそうだがこの男なら納得する。
「二軍は嫌か？」
「嫌だ」
「一軍で戦う実力を身につける練習だけがしたい。そう言いたいのだな」
「ああ」
草悟は自分の代名詞と言える５５を譲り渡した大事な存在。孫といえる存在だ。「置いてやる」と言いたかった。だが三軍でやるべきことを草悟は身につけている。
「二軍に行け。それがお前の生きる方法だ」
「……」
草悟はジッと大吾を見る。置かせろ、瞳は語っている。
「草悟。ワシは指導者だ。打撃ならまだしも野球は守備や連携、細かい動きを覚えなければならない。三軍（ここ）ではそう言ったことは教えられん」
「俺より実力のない連中とやって、俺に得があるのか？」

聞く人が聞けば激怒は必須の言葉を高校を出たばかりの未成年が言い切る。
「ではお前には康友や弥子は不要か？」
「え？」
「あの二人は草悟、お前以下の実力だ。お前の理屈だとあの二人は不要だろう？」
「違う！」
草悟は否定した。入団前なら躊躇せずに「必要ない」と言っていたはずだ。
そして草悟は気づく。実力ある自分が自分より実力がない連中と一緒に練習をしたくないと言ったのに、自分より下の康友と弥子を必要と感じたという矛盾に。
「草悟よ」
孫を諭す祖父のように、大吾が優しく言った。
「二軍に行け。そこで己を磨け。……機会がくれば、時期に一軍に上がれる」
「……はい」
頭を落とす草悟の肩に手を置く。
「餞別（せんべつ）だ。グラウンドに来い」
▪★
グラウンドにバッティングマシンをセットすると大吾はバッターボックスに立つ。
「始めろ！」
草悟にマシンを起動させる。
「よく見ろ、草悟。これがお前にやる餞別だ！」
大きく曲がるカーブ。大吾は右足を大きく上げて片足だけで立つ。そしてタイミングに合わせてバットを振りぬいた。
打球はフェンスに直撃する。
「歳は取りたくないな」
打点王を取った時の自分を思い出し、ため息をつく大吾。
「い、今のは……」

「ワシの奥義。一本足打法。緩急を使い分けるピッチャーに対応するために修練した打法だ。きっとお前の役にたつだろう」
うんうんと大きく頷く。
「二軍の休みの日。ワシの元を訪れるがいい」
その時二人は気づいていなかった。バッティングマシンが次の球をセットしていることに。
「ワシがみっちりと指ど、ウウウゥゥゥッッッ!?」
マシンが放ったストレートが大吾の急所に直撃したのだ。
「――――!!」
あまりの痛さに地面に悶絶する大吾。人を殺せそうなほど鋭い視線は「草悟殺す!」と書かれてあった。
「そ、それでは荒木監督!ご指導ありがとうございました!!」
大吾が動けないことをいいことに、草悟は一目散にその場を逃げ出した。

第九話　公式戦

7月。ガーディアンズ本拠地、防人（さきもり）スタジアム。
スイーツ対ガーディアンズ。3―6でガーディアンズ3点リードの7回表。
ガーディアンズの攻撃を何とかしのぎベンチに戻ってきた南部（なんぶ）無頼（ぶらい）を美空はじっと見た。
「ハァ、ハァ……」
無頼が肩で息をしながらベンチに座った。顔からは滝のように汗が流れ落ち、厳つい顔が苦しく歪（ゆが）んでいる。
無頼のこれまでの成績は0勝6敗防御率5．24。今日の試合も自責点4。奪三振こそ多いものの与四死球が多い使えない投手。その前評判通りの姿をさらしていた。
しかし美空は無頼を責める気持ちにはならなかった。
無頼は美空の当初の予想を裏切るほどよく働いていた。
打ち込まれ、ボロボロにされ、ファンから「引っ込め、ノーコン！」とブーイングを受けようとも投げることをやめない。
それも自暴自棄によるものではなく、自分の意思で。

信頼とは、こんなに重いものだったのか……。

美空は自分が言ったことに後悔する。
同じように信頼する言葉を投げかけた成田（なりたいさお）功も、自らの身体の不調をごまかしつつも奮闘を続けている。
無論、言った言葉に嘘はない。心から思ったことを伝えた。だが彼らがどんなにボロボロになろうとも、自分の信頼に応えるためにここまで奮闘するとは美空は思ってみなかった。
美空は自分が本当の意味で彼らを信頼していなかったことを恥じる。

勝たせてあげたい。一つくらいは、どんなに醜態をさらそうとも。どんなに苦しもうとも自分の信頼に応えようとする選手に、報いてあげたい。

「南部、よくやってくれたわ」

美空はベンチで疲れきる青年に声をかける。

「か、監督……」

自分を見るその目は「まだ行けます！」と訴えていた。そんな青年を勝たせたいと思う美空は首を横に振る。

「すいません……」

無頼は頭を落とした。

「南部の打順に代打を送るわ」

美空はヘッドコーチにそう言うと代打に送ろうと考えている青年を見る。

青年は公式戦始めての出場にも関わらず緊張した様子もなく美空に視線を合わせた。

青年に代打が送られるということで何人かが声をかけたが、青年はどうでもいいと言わんばかりにバットを握り締めた。

「有賀君……」

代打を送られると知った無頼は草悟に歩み寄る。

公式戦始めての同期の緊張を和(やわ)らげるために声をかけようとした。

「集中しているんだ。どっか行け」

「何だと！」

傲慢な態度で流す草悟に無頼は声をあげる。

草悟に殴りかかろうとする無頼を、様子を見ていた憂男が慌てて間に入った。

「ま、待てよ。南部！草悟は初出場なんだ。緊張しているだよ！」

そう言った憂男だが、自分が嘘を言っていると自覚する。

草悟は投手だけを見ていた。無頼の存在など、これっぽっちも気にしていない。

目が、全身が、バットが、マウンドに立つ男に集中していた。

▪★
防人スタジアム、三塁側ブルペン。
ワンポイントリリーフとして起用が多い女性右腕、岡本悦（おかもとえつ）は登板に備えてブルペン捕手に投げ込んでいた。ガーディアンズは上位打線に回るが三人とも右打ち。打たれるか代打が送られない限り一人で投げるようにと軟投派右腕は伝えられていた。
「よし」
テレビの方を見る。
そこには代打に草悟が出たのを嬉しそうに見る久石譲二（ひさいしじょうじ）と冷泉冬狐（れいぜいとうこ）の姿があった。
久石はともかく基本的に周りと干渉しない先輩女性投手が嬉しそうにする姿に、悦は不思議そうに見たが、すぐに投球練習を再開させた。
▪★
7回表。ガーディアンズは7回に逆転される傾向があることで去年8回を任せていた男、君先正哉（きみさきまさや）を7回に登板させるようになっていた。
その選手起用に応えるかのように、君先は17試合連続無失点記録を築いていた。
そしてこの回、7番8番をきっちりと抑えていた。
「来たか！」
顎髭（あごひげ）を蓄えた投手がネクストサークルに立つ青年を見る。
そしてコールされる。
『選手の交代をお知らせいたします。九番、南部に変わりまして。代打、有賀。背番号55』
▪★
7回表2アウトランナーなし。
一軍に昇格した草悟が左打席に立つ。
バットを構えた草悟はそっと目を閉じる。
康友、弥子、荒木大吾三軍監督。自分を支えてくれた三人の顔が浮かぶ。

（三人のおかげで、自分はここまでこれた）
心の底から草悟は思った。
そして目を開ける。
その目には先ほどまで回想していたとは思えないほど、研ぎ澄まされていた。
打者と投手の真剣勝負。今の草悟にはそれしかない。
草悟の脳裏から三人が消え、目の前の敵が映る。
自分の会心の当たりを妨げ、二軍落ちを決定づけた男。借りを返さなければならない男、君先正哉を。
▪★
「……」
君先は捕手のサインを見ながら脳内にある有賀草悟というルーキーの情報をまとめていた。
君先はオープン戦で草悟をトリプルプレイで討ち取った。だがそれは君先にとって苦い勝利だった。
伸ばした足に当たった打球が偶然トリプルプレイになっただけで、普通ならクリーンヒットになる当たりだったからだ。ルーキー相手に、だ。
プロに入って間もないルーキーにボールを見極められた挙句、会心の当たりを打たれた。ガーディアンズのセットアップパーということに自負を持っている男にとって、屈辱的だった。
君先は密かに草悟を研究した。一流選手の君先が、ルーキーの草悟を、である。
ただし研究と言っても大したことが出来るわけではない。一流選手ゆえに忙しい君先は草悟を見ることが出来なかったからだ。最も草悟が一軍の出る試合は一度しか出ていないため研究しようが無かったという理由もある。
そのため君先は５０万円を支払い、地元がスイーツ二軍本拠地近くの高校時代のチームメイトのニートに草悟を調べてもらった。
ルーキー一人調べてもらうのに５０万円とも思ったが、それだけの価値はあった。

有賀草悟攻略の糸口がつかめたのだ。
短いバットゆえに初見のバッテリーはほぼ１００％の確率で外角低めを集中的に攻める。
そこが落とし穴だった。
草悟はボール球には手を出さない。そのためきちんとコースに決めないという意識が働き四球、もしくは甘く入ったところを打たれてしまう。
二軍戦ではあるが草悟は出塁率４割という数字を叩き出している。だが草悟の選球眼を知る君先にとっては納得の数字だった。
（と言っても全く手が出ない、というわけでもないんだよな）
元チームメイトはどういう状況で草悟が三振やゴロ、フライになっているかも調べていた。
草悟は選球眼がよく速いボールにも対応できるスイングスピードをもっている。ただ速い球から遅い変化球を投げられると凡退する傾向が多かった。
それを知って君先は初めて草悟という打者を理解した。
有賀草悟という打者はルーキーでありながら並外れたフルスイングで当てられる選球眼とスイングスピードを持つ。ボールは見えるが緩急をつけられると身体が我慢できずバットを振ってしまう。
君先は草悟をそのように導き出した。そして緩い球を一球も混ぜなかったからあの時打たれてしまったということも。
（攻略法が明確になっていればどんな選手であっても怖くは無い。あとは投げきる勇気だ！）
投球の組み立てが出来た君先は捕手のサインに大きく頷き投球動作に入った。
▪★
「……」
ボールは外角低めのストライクゾーン。捕手の構えたところにこれ以上はないボールが収まる。
「ストライク！」
審判のコールに草悟は気にする様子もなくバットを構える。

（相変わらず薄気味悪いルーキーだ）
３ヶ月前に戦ったルーキーを君先は見据える。先ほどの見逃しも手が出なかったのではなく打ち頃の球じゃなかったから振らなかったと君先は確信していた。
君先はその後外角低めを中心にボールになってもいい速球系の球を投げ込んでいく。何球か外れてボールになり、ファールで粘られたもののカウントを2ボール2ストライクに持っていった。
（頃合だな）
有賀草悟はこうやって打ち取ると前もって捕手には伝えていた。捕手は君先の思惑通りミットを内角に構えた。要求する球はチェンジアップ。
（あいつは外の速球系の球を投げられ、目線が外に向いているはず。そこに内角、それも緩い変化球を投げればタイミングが合わず凡打になるはずだ！内角のストライクゾーンに入れば、高低は気にしなくていい！）
君先はそう自分に言い聞かせると腕を振った。
速球が急失速したかのようなボールが内角低めに向かっていく。
そのボールに、草悟の身体が反応するのが見えた。
（打ち取った！）
草悟のバットスイングは速い。今から始動すればバットが先に空を切る。そう思った。
だが次の瞬間、君先は我が目を疑う。
草悟が右足をあげ左足だけで立ったからだ。その打法を君先は知っている。
（一本足打法だと!?）
内角低めに向かっていく遅い球にタイミングを合わせ、草悟はバットを振りぬいた。
打球はライト線ギリギリのフェアゾーンに落ち、フェンスに跳ね返る。
君先は一本足打法で自分のボールを打ったことが信じられなかった。

一本足打法は足を上げることによって、ボールを手元まで引き付けたり、タイミングを取りやすく出来る打法である。
ボールを手元まで引きつける、打つタイミングを取りやすくなるというメリットがある一方、下半身への負担が大きく、下半身の弱い選手は軸もぶれやすいため習得が難しい。上半身に頼らず、強靭な下半身とバランス感覚が要求される。
それ故に難しく、長年多くの打者と対戦した君先ですら知識としては知っていても見たことがなかった。
そして君先は先ほどの打席が運やまぐれでないことを知る。右翼手がボールを取った時、すでに二塁を回っていたのだ。ボールを受け取った二塁手が慌てて三塁に送球する。ボールは高く、三塁手が草悟にタッチしたのはサードベースに滑り込んだ後だった。
二塁打を快速飛ばされ三塁打にされたことで君先はまだ見つけていなかった草悟の武器、快速を飛ばす下半身の強さを知った。

▪★

防人スタジアム、三塁側ブルペン。
「よし！」
小さくガッツポーズをする久石と冬狐に投球練習をやめた悦が声をかけた。
「嬉しそうですね？」
ひやかすように言う悦に久石が反論する。
「そりゃあ俺らリリーフからすれば嬉しいだろう」
「え？どうしてですか？」
察しが悪いな、と久石は暖かみと冷静さを兼ね備えたベテラン投手の顔に変化させる。
「1点でも多く野手が点を取ってくれれば俺らは楽に投げられるのではないのか？」
「……あ。なるほど、確かにそうですね」
ベテラン左腕に指摘され、２４歳の女性右腕は苦笑する。
スイーツのリリーフ陣で防御率が3点未満なのは久石と冬狐、悦、そして守護神の響の四人だけ。

崩壊しがちの先発陣が作る穴を、中宮寺優奈子というホームランバッターの加入と隠九条憂男の成長で格段にアップした得点力が埋めつつある。よって接戦が増えて４人の登板が多くなった。一点を死守する、一点も許さないというのはざらにある。

一点でも多く取ってくれる野手が増えるということは自分たちの心に余裕が出来る。大量点を取れば自分達以外の投手を起用することも考えられる。

「私としたことが、察しが悪い」

「ああ。それは考えてなかったなぁ」

そう言ったのは冬狐だった。

「……え？だったら何でそんなに喜んでいたんです？」

悦は疑問の言葉をそのまま出した。

冬狐はテレビに視線を戻して答える。

「……後輩だから。初めて出来た、私の後輩だから」

冬狐の言う意味を悟ったのか、久石はニコニコと笑う。草悟の事を知らず、また草悟と冬狐とのやりとりを知らない悦はキョトンとした顔で思考を巡らせる。

（冷泉さんは大卒８年目の３０歳。私は高卒６年目の２４歳。私も冷泉さんから見て後輩ですけど……）

そう言おうとした悦だが、口にしなかった。

冬狐の表情が真剣だったからだ。

考えても無駄と考えた悦は「そうですか」と適当に相槌を打った。

そんな二人を穏やかな目で久石は見守っていた。

▪★

その後君先は一番・八千代智那（やちよともな）にレフト前ヒットを打たれ１点を失うと二番・杉井貴士（すぎいたかし）に四球、三番・隠九条憂男（いんくじょうゆお）にセンター前ヒットを打たれ満塁。四番の中宮寺優奈子（ちゅうぐうじゆなこ）に満塁ホームランを打たれ、８―６と逆転を許した。五番の入江舞名（いりえまな）は空振りの三振にしとめたものの、もう試合は決してしまったと君先は悟った。

▪★

「よくやったわね、草悟。後は私たちに任せなさい！貴方の初デ

ビューを勝利で飾ってあげるわ！」
悦に連れ添うようにベンチに現れていた冬狐はベンチに座る草悟に話しかけた。
「別に気にしてませんよ」
草悟は短く答える。
「そう言っても可愛い後輩の初デビューだ。貴方が気にしなくても私は気にするわ」
「試合はもうスイーツの勝ちでしょう？岡本さんや冷泉さん、響さんが投げるんですから」
「ふふっ。そう言われたらますます負けるわけにはいかないな」
後輩の言葉に、力をもらった先輩投手は次の登板に備えてブルペンへと姿を消した。
▪★
君先の悪い予想は的中した。
無頼の後を引き継いだ岡本悦が７回を、８回を冷泉冬狐が三者凡退で締め、９回裏をスイーツの守護神・響梅太郎（ひびきうめたろう）がきっちりと三者連続三振でゲームセット。
この試合で無頼は初勝利と、ビジターではヒーローインタビューは一人という事もあり、初のヒーローインタビューを受けた。
▪★
インタビューが終わったがベンチはまだ騒がしかった。その中心にいるのは逆転の火蓋を切った草悟。
（こいつらうるさいなぁ）
言い寄る先輩たちに心の中で悪態をつきながら、草悟はマウンド上の態度とは打って変わりベンチにお行儀良く座り込んでいた。
そんな草悟に、インタビューを終えた無頼が複雑な表情で近づいた。
笑顔を作ろうとして、作りきれていない顔。
無頼の頭には、７回のいざこざと負けを消すきっかけを作ってくれた感謝が混ぜこぜになっている。
「……有賀君」

呼びかけられた草悟は、顔を向ける。
無頼に対して、何の感情も持っていない顔だった。
「……何だよ」
「ありがとう。助かった」
無頼はなんとか礼儀を貫いたが、
「ところで前々から気になっていたんだけど。何で、お前の背番号は８１なんだ？」
草悟は見当違いなことを口にする。
「……」
無頼は一瞬言葉を詰まらせ、意を決して口を開く。
「打者を全て三振で打ち取った場合、最少８１球だ。……そういう投手になれるように、という願いからだ」
三振こそ積み上げているものの現実は三振以上に四死球を与え、味方に迷惑をかけている。
理想とはかけ離れた自分の姿に自嘲する無頼。その気持ちを知らない草悟は、
「なぁ～んだ」
と無邪気な笑みで言った。
「８１連敗しないようにって意味で８１にしたのかと思ったよ」
ベンチ内で乱闘が始まった。
勝利投手南部無頼（１勝６敗）
敗戦投手君先正哉（３勝１敗１３Ｈ）
有賀草悟
７月上旬公式戦初安打三塁打（ガーディアンズ、君先正哉）

第十話　無頼と草悟

7月中旬

ガーディアンズ戦でスリーベースヒットを放ち鮮烈なデビューを果たした草悟は遊撃手のレギュラーになっていた。

正遊撃手の直木得留（すぐきき る）が膝の故障で長期離脱を余儀なくされたからだ。

直木の後を受け継いだ形の草悟は新人とは思えない選球眼とバッティング、久石とのけん制対決から培われた盗塁技術でスイーツの得点力上昇に一役買っていた。

だが性格は相変わらず傍若無人で親しい選手や草悟の態度も笑って許せる選手以外とは衝突を繰り返していた。

「俺はアイツが大嫌いです！」

そう言って缶チューハイの酒を一気に飲み干す大学卒のドラフト1位、南部無頼もその一人だった。

「気持ちはわかるが同期なんだから仲良く出来ないか？」

反対側に座る同い年の先輩選手、杉井がやれやれという顔でたしなめるが酒で口が軽くなっている無頼はマシンガンのように口走る。

「杉井さんだったら解るでしょう！野球は皆でやるスポーツだ。だがあいつは一人で野球をしている！チームのことを考えない奴が野球選手など、子どもが見たらどう思うのです？間違った野球選手像を植えつけるだけだ！そんなの俺は、俺は認めない！」

「……」

普段から思っていることを熱弁する無頼だったが、杉井の反応は薄かった。

「まさか杉井さんは……」

あの男を認めるのですか。と言いそうになるのを言い留める。肯定されるのが怖かったからだ。

杉井貴士は現在スイーツのクリーンナップを務める隠九条憂男と同期入団だ。

高校時代は三塁手として甲子園出場もあり三塁手を切望していた

が、上層部は憂男を三塁手に据えた。その間杉井は空きだった二塁手を主に守らされた。
二年目は憂男の不調で三塁手を射止めたがそれもわずかだった。二軍で抜群の成績をたたき出した憂男は三塁手のポジションを杉井から奪い取った。それからスイーツに不可欠な活躍を見せ、三塁手の位置を不動の物にした。
出来レースともいえる配置転換に、杉井は従った。
本人にとっては納得がいくものではなかっただろう、と無頼は思っていた。
無頼は杉井に聞いたことがある。「隠九条さんのことをどう思うのですか?」と。自分のポジションである三塁を奪った相手に恨みや妬みはないのか、という意味を込めて。
杉井はこう答えた。
『隠九条を恨んだ。だが自分より優れた選手がいたならその者にポジションが与えられることは当然のこと。そしてあいつにポジションを奪われたおかげで俺はあいつには出来ないことを考えようと考えた。そして『ピッチャーとキャッチャー以外はどこでも守れるユーリティープレイヤーと最低限のことをしてくれる計算できる選手』という評価を頂くことが出来た。あいつのおかげで今の俺がある。今ではあいつは俺の掛け替えの無い親友だよ』
恨んだ男とは違う形でチームに貢献しようとする姿。恨んでいた男を優遇した球団の方針に従い自分を変えた杉井に無頼は尊敬の念を持たずにはいられなかった。
以降無頼は杉井を兄のように慕っていた。また杉井もそんな無頼を弟のように可愛がった。
「そうだ、無頼。ここはギャンブルでもやってパーッと憂さ晴らしをしよう!」
「は、正気ですか!?無頼さん!!」
野球界は野球賭博で大きく叩かれている。それを杉井が知らないわけがない。
杉井は続ける。

「大丈夫だ。この部屋には俺たちしかいない。隠しカメラがない限りバレることはない」
「そ、それもそうですね。杉井さんがそうおっしゃるなら……」
普段の無頼なら間違いなく止めていただろう。だが酒が入っていることもあり無頼は先輩の誘いに乗ってしまう。
「よし、じゃあ始めるぞ」
杉井は引き出しからトランプを取り出しシャッフルし始めた。
▪★
３０分後。
「悪いな、無頼。フォーカードだ」
「くっ……！」
無頼は悔しさに歯をかみ締める。
序盤こそ何連勝していた無頼だが賭けを大きく張った時だけ杉井が勝つのだ。次第に負けが込んできた。

負けた分を取り返さなければ！

ギャンブル特有の熱に侵された無頼は更に大きな賭けを張ってしまい、負けた。
ついには３００万円の負けを背負わされた。
「じゃあ今日はここまでにしよう」
杉井は無頼に『南部無頼は杉井貴士に３００万円を払うことをお約束します』という内容が書かれた誓約書に拇印とサインをさせた。
「無頼。今日俺たちがこの部屋でギャンブルというのは誰にも話すなよ」
「……は、はい」
大負けしたショックに無頼は杉井の部屋をトボトボと後にした。
▪★
翌日。一軍監督室。
『そうだ、無頼。ここはギャンブルでもやってパーッと憂さ晴らしを

しよう！』
『は、正気ですか!?無頼さん!!』
『悪いな、無頼。フォーカードだ』
『くっ……！』
『無頼。今日俺たちがこの部屋でギャンブルというのは誰にも話すなよ』
『……は、はい』

「これはどういうことかしら？」
無頼と杉井はスイーツ一軍監督、美空星蘭（みそらせいらん）に呼び出されていた。
彼女の机には昨日の二人のやり取りが録画された動画がノートパソコンで流され、昨日の杉井の部屋のやりとりと『南部無頼は杉井貴士に３００万円を払うことをお約束します』という内容が書かれた誓約書が置かれている。
「え、あ、その……」
何かを言おうとする無頼だがここまで証拠が揃（そろ）っていては言い逃れできない。
「ま、まさか……俺の部屋に隠しカメラがつけられていたなんて（棒読み）」
杉井が頭を抑えて崩れ落ちる。
その姿に無頼は取り返しのつかないことをしてしまった。なぜ俺はあの時止めなかったのだと自分を責める。
「か、監督お願いです！厳罰は俺だけに！南部は俺に誘われてギャンブルに手を出しただけです！だから、なにほど軽い処罰を！（棒読み）」
「す、杉井さん……っ！」
土下座する杉井に無頼は心打たれる。
「そうね。本来ならあるべきところに出すのが筋だけど、ここは私が預かることにするわ」
ほっとする二人に美空は「ただし！」と続ける。
「杉井は一週間休みを返上して裏方スタッフの手伝い。南部には有賀

の一週間の観察日記を命じるわ！」
「は、わかりました！」
立ち上がった杉井はピシッと規律ある軍隊のような敬礼を決める。
「……」
だが無頼は即答できなかった。
（なぜ俺があの男を観察しなければならないのだ!?）
しかしギャンブルに手を出した以上、無頼に拒否権などあるわけがない。
無頼はしぶしぶ有賀草悟を見ることにした。
▪★
仕方なく無頼は草悟を観察することにした。
観察と言っても何か出来るわけではない。
無頼はローテーションピッチャーを務めている。先発投手は多くの球数を投げる。それ故に腕に過度な負担をかけがちだ。充分に休めないと肩や腕に支障をきたす。練習もするが休息も優先しなければならない。一方野手は投手より負担がかからない分休みは少ない。よって練習を行わされる。
つまり観察しようにも先発投手の自分と野手の草悟では接点がないのだ。
だからと言ってそれを言い訳に観察をしないわけにはいかなかった。
（俺より杉井さんの方が大変だ。練習はしないといけないし、休み返上で裏方スタッフさんの手伝いをしなければならないのだから）
賭博の主犯とはいえ自分より重い処罰の先輩が奉仕活動に打ち込んでいると思われるのに、後輩の自分が楽をするわけにはいかなかった。
自分に与えられた軽めの練習を終えた無頼は散歩をしながらグラウンドでキャッチボールをする草悟を見る。
元投手だったこともあるのか、キャッチボール相手の憂男のミットからはバシンッ！といい音が鳴る。
ジッと草悟を見る無頼だったが、練習に集中している草悟は全く気

づく様子もなくキャッチボールを続けていた。
その後はノック。コンバートされてまだ半年。ボールのバウンドを見誤りボールを弾く場面は多く見受けられたが、取った後の動きはスムーズだ。中でももう少しで外野の守備位置になる内野の最奥で取ったボールをダイレクトで一塁手のミットに収めたのには驚きを隠せなかった。
そのシーンを見届けると、無頼はスケジュールの関係もあってグラウンドを後にした。
▪★
2日目。
練習前に球場にいると聞いた無頼はまさかと思いつつ、球場に足を向ける。
誰もいないグラウンドに草悟が一人球場のフェンスを時計回りに沿うようにぐるりと走っていた。額から流れる汗が地面に落ちる。
草悟がベンチにいる無頼に気づき、「げっ！」と嫌そうな顔をする。それは無頼も同じだった。
草悟はベンチにいる無頼に向かっていき、
「チッス……」
と挨拶をした。
「……おはよう」
最低限の挨拶を済ますと草悟は無頼に目もくれず、走り込みを再開させる。
（……速いな）
どれくらい前から走っているのか無頼には検討つかなかったが相当長く走っているのだろう。
（体力があるんだな）
その後も無頼は草悟を見ていたが別のことをするわけでもなさそうで、かつ無頼の朝食がまだだったこともあり、その場を後にした。
▪★
「はぁ、はぁ……」
登板と登板の谷間の日にある長時間の練習。その朝の練習に無頼

は疲労困憊になっていた。
先発ローテーションに加わってすでに3ヶ月以上たつが未だに慣れずにいる。
一年通して投げ続けるという経験をしていないのだ。疲労が溜まるのはしょうがないと言えた。
「ん？」
視線にバットを振る姿が見える。
そこには普段使っている短めのバットではなく、長く太いバットをひたすら振る草悟の姿があった。
今日はナイトゲームが行われる。
調整程度に軽く汗を流す練習のはずだ。
にも関わらず滝のような汗を流し歯を食いしばりながらバットを振っている。
さすがに周りの先輩選手が止めるが、草悟は手だけで合図して再び素振りを開始する。
（先輩たちを無視してまでやるか、普通？）
馬鹿馬鹿しいという表情で、無頼は草悟を見る。
そんな無頼を、杉井は離れたところで見ていた。
▪★
ナイトゲーム。対コスモスターズ戦。
スイーツは7回時点で、１０―２で勝っていた。
無頼は先発投手だが、今日は1塁側ベンチでチームの試合を観戦する。
プロ野球の一軍登録枠は２８人。
そしてその日の試合に出場選手登録された選手、通称「ベンチ入り」の選手枠は２５人。
先発投手が全員休んでは、ベンチに欠員がでる。
そのため、「登板しないがベンチ入り登録される先発投手」が少し出る。
その少し出る選手が今日の無頼だった。
「……」

チームの優勢に明るい雰囲気の1塁側ベンチに反して無頼はどこか不機嫌だった。
遊撃手として出場している草悟が4打数2安打1四球と活躍しているからだ。
後続のヒットでホームに帰り、他の選手が温かく出迎えてもどこか嬉しそうではない。それどころかベンチに戻るなり、試合を見ずグローブをはめている姿が無頼は気に食わなかった。他の選手などどうでもいい。自分の仕事さえすればいい。そう言っているようで。
相手の攻撃が終わり、ベンチに戻ると草悟はグローブをジッと見る。
例外があるといえば打順が近づいた時だけ。その時はさすがにネクストサークルでバットを持って立っているが、それ以外では誰とも話そうとせず、試合を見ようともせずグローブをはめてはジッと見ていた。
そんな草悟に試合に集中したらどうなんだ、と言いたくなったが他の先輩選手が草悟の態度を指摘していないのだ。草悟を除けば一番若い無頼がいえるはずがなかった。
試合はスイーツ優位のまま進み、12—2でスイーツが勝利した。
先制打の入江舞名と2本塁打7打点の中宮寺優奈子のヒーローインタビューが終わり、選手たちが片付けを始める。
「ん？」
ベンチを去ろうとする無頼はふと草悟が良く座っているベンチに目がいった。そこには折りたたまれた紙が落ちていた。
無頼は紙を広げる。
そこにはあらゆる状況で遊撃手がどう動くべきかが事細かに書かれてあった。
「あっ！俺の！」
声のした方へ無頼が振り向く。
そこには驚いた表情の草悟が無頼を見ていた。
「す、すまん」
無頼は持っていた紙を草悟に返す。

「中身、見たか？」
疑心暗鬼な瞳を無頼に向ける。
「い、いや。中身までは見ていない。手がかりがあるかと思って開いたが」
無頼はとっさに嘘をついた。
「……。悪かったな」
ジッと無頼を見た草悟だったがそれ以上言わず無頼に背を向けた。
「な、なぁ……有賀、君」
なんだよ、と顔で草悟は振り返る。
「これから何をするんだ？」
メモの内容を知ってしまった無頼は気になったことを口にした。
「何でお前に教えないといけないといけないんだ？」
「守備の練習か？」
無頼がカマをかけると、草悟は顔を真っ赤にする。
「ば、馬鹿じゃないの、お前!?し、試合が終わって、つ、疲れてるんだぞ！そ、そんなことするわけないだろう!?」
「……そうか」
自分が言い終わる前に立ち去る草悟を、無頼は微笑みながら見送った。
時間を見つけては草悟を見る。そんな日が5日続いた。
▪★
美空に草悟を観察するようにと言われてから一週間後。
朝早くからグラウンドでストレッチを始める草悟の横に、無頼が立っていた。
「何のつもりだ」
「俺も走る」
ぶっきらぼうに言う草悟に、無頼もぶっきらぼうに言う。
「お前、俺のこと嫌いじゃなかったか？」
近づこうともしなかった人間が自分に歩み寄ったのだ。草悟が警戒するのも無理も無かった。無頼は答える。
「嫌いだよ」

だが、と無頼は続ける。
「俺は頑張っている人間は嫌いじゃない」
「え？」
困惑しながら自分の顔を見る草悟に、無頼は真剣な表情で草悟を見る。
「お前は凄く頑張っている。お前の野球に対する姿勢は好きにはなれないが、野球に真摯（しんし）に頑張る人間を。俺は嫌いになれない」
「……」
草悟は固まることしか出来ない。
「ほら、行くぞ。身体が冷える」
そう言って無頼は走り出す。
「……意味不明なやつ」
どこか嬉しそうな顔で、草悟は無頼を追いかけた。
ランニングを終え、二人はシャワーを浴びる。
口を交わすことはなかったが、無頼の初勝利の日からの嫌悪感はなくなっていた。
▪★
「無頼」
シャワー室を出た無頼が振り返ると、そこには何故かメイド服姿の杉井が立っていた。手には洗濯カゴがあった。
元々中性的な顔立ちのため、あまり違和感がない。むしろ似合っている節もあった。
「観察はどうだ？」
「……勉強になりました」
何という格好をしているんですか、と言いそうな言葉を呑みこむと、無頼はすがすがしい表情で答えた。
その答えに笑顔を浮かべると杉井は尋ねる。
「今のお前にとって有賀草悟はどんな人間だ」
「嫌な奴です」
「でも嫌いではないだろう？」
杉井の指摘に無頼は苦笑する。

杉井は続ける。
「あいつの態度は悪い。だが仕事はちゃんとしている。仕事をちゃんとしていれば態度が悪くても別段問題ないのが社会というものだ。もちろんプロ野球もな」
「……」
「腑に落ちない、という顔をしているな」
「俺があいつを好きになれない理由。それはあいつが一人で野球をしている。そう思える節があるからです」
「しているだろうな」
杉井は肯定する。
「『自分が活躍すればチームが勝ってもどうでもいい』と考えているなら俺も否定する。しかしあいつにはそれはない。チームのことを考えているかどうかは判断できないが、少なくともあいつの目指す勝利はチームの勝利につながっている。仕事を果たしているなら、俺は否定しない」
その言葉に無頼は頷くことは出来なかった。
メイド服を着た選手は、顔を引き締めて言い放つ。
「無頼。チームに貢献しようとする気持ちは素晴らしいが、結果が伴わない貢献は自己満足に過ぎないぞ」
無頼の目頭が熱くなる。
今シーズンの自分を否定されたと思ったからだ。
「打率が2割5分前後と決して打っていない俺がレギュラーにいる理由。それは俺がバントや進塁打を確実に行い、ピッチャーとキャッチャー以外の穴を埋められる守備力を身につけたからだ。本職と見劣りしないレベルで。俺がバントや進塁打を確実に打てずただ守れるレベルなら二軍か控えだろうな」
「……」
「俺たちはプロだ。結果を残していない人間の言葉など空(むな)しいだけだ。理解できるな?」
無頼は頷く。頷くしか出来なかった。
自分が一番尊敬し、チームのために自分を曲げて、結果チームに貢

献した杉井の言葉だから。
「……でも、俺は」
（あいつにこういうやり方もあるんじゃないのか、と言いたい。でも俺には。それを言う資格はない……）
無頼の心を、察した杉井が口を開く。
「だったら。お前が結果を出して、草悟にお前を認めさせてやればいい」
「俺が……？」
キョトンとした顔で無頼が聞き返す。
「お前が結果を出して草悟にお前の思う正しい野球を教えてやればいい。もう嫌ってはいないのだろう？」
優しさと力強さが兼ね備えられた瞳は、お前ならできるという期待が込められていた。
「そうですね。俺が、俺が草悟に教えてやりますよ！」
有賀君から草悟に呼び方が変わった無頼が猛（たけ）る。
「お前は同期ではあるが年上だ。悪い方に行かないように、導いてやれ」
そういい残し、メイド姿の野球選手は洗濯カゴを持ってどこかに歩みだした。
▪★
翌日。無頼登板の日。
試合開始前のミーティング。ミーティングが終わろうかとした時だった。
突然杉井が
「皆さんに謝罪しなければならないことがあります」
と言ってホワイトボードの前に立つ。
「俺は、ギャンブルをしてしまいました！（棒読み）」
机に頭をこすり付けて杉井は告白した。
「「な、なんだって!?（棒読み）」」
突然の告白に詳細を知る美空と興味がない草悟以外の人間が驚きの声を上げる。

「ギャンブルだと!?どういうことだ杉井!!（棒読み）」
スイーツの四番で男顔負けに体格に巨乳の女性、中宮寺優奈子が杉井の胸倉を掴む。
「ま、待ってください。中宮寺さん！」
二人の間に無頼が入る。
「杉井さんを責めないで下さい。俺も同罪です！」
「南部、お前もか！（棒読み）」
無頼に食って掛かろうとする優奈子に今度は杉井が間に入る。
「待ってください。全て俺が、俺が悪いんです！俺がギャンブルをしようと言い出したんです！だから責めるなら俺だけにして下さい！（棒読み）」
「だったらこの責任、どう取るのだ!?（棒読み）」
優奈子の問いに杉井が叫ぶように答える。
「この試合、俺は全打席出塁します！それでいかかでしょうか！」
その答えに優奈子が笑うように答える。
「よし、ならば四番・中宮寺優奈子。隠九条ごとお前を返してやろう！」
その答えに
「え、ということは三番の俺も全打席塁に出ないといけないんですか？ま、いいですけど」
憂男がニヤリと笑う。
「では五番・入江舞名が中宮寺さんを返せばいいんですね？」
と続く。
「じゃあその入江を」、「だったら俺は全打席ホームランだ」
と周りが色々なことを言いながら騒ぐ。
その光景に無頼は驚いた。そして感動に胸が突き上げる。
出来ないことは初めから言わない杉井が全出塁すると言い切ったこと。そして周りが同調する姿に。
その時、視界に輪に入ろうとしない男が写った。
目が合ったその男、草悟は少しだけ笑う。
「俺も塁に出るように努力するけど、それ以上打ち込まれないでくれ

よ」
「ああ、気をつけるよ」
無頼は笑った。
▪★
試合は圧勝だった。
宣言どおり杉井が出塁すると後続選手が塁上の杉井を返した。
この日の無頼は今までのどこか悲壮だった姿は無かった。

正しいのは俺だ。

そう誰かに自己主張するように投げた。
この日。無頼は無四球１１奪三振完封勝利で２勝目をあげた。
▪
▪★
ベンチ裏
「杉井。貴方の献身的な働きは評価するけど、あまり自分から汚れ役を買うのは感心できないわよ」
そう言って苦笑すると美空はギャンブルの証拠である誓約書に火をつけた。

第十一話　ヒーロー無きヒロイン

7月下旬。グリフォンドーム。

『スイーツエンジェルズの選手の紹介を申し上げます。1番ショート有賀（ありが）。背番号55――』

ウグイス嬢がスイーツの選手を紹介する。そして八番古山博光（こやまひろみつ）が紹介された後、

『9番ピッチャー。久石（ひさいし）。背番号32』

「え、嘘だろ？」、「まさか久石が？」、「どうして？」

ウグイス嬢の案内に会場がどよめく。久石譲二（ひさいしじょうじ）が元グリフォンズの選手だったこと。そして中継ぎ投手である久石が先発として登場することに。

▪★

「不思議な感覚だな」

一回裏。三者凡退に終わりマウンドに立つ男、久石譲二は感慨深くドームを見ていた。

かつてグリフォンズの一人として投げていたドーム。敵となってしまった今も何度も登板している。しかし先発としてはグリフォンズでもスイーツでも一度もなかった。さらに言えば人生初めての先発だった。

本来ならば今日の先発は新外国人スグニ・ヌケーロだった。だが試合が始まる数時間前にヌケーロが腰の違和感を訴え急遽降板。代役に久石が投げる事になった。

言われた直後は戸惑ったものの、久石はすぐに了承した。

一度は先発で投げてみたい。

そんな感情があったからだ。

（よしっ！）

心の中で、久石は気合を入れるとキャッチャーミットめがけてボールを放った。

▪★

（いつもと違うな、久石さん）

後ろで守る草悟は久石がいつもと違うことに気づいた。もちろん久石は今まで通り淡々と投げている。しかしどこか嬉しそうだと草悟は感じていた。

久石は内野ゴロ三つで三者凡退に抑えた。三回まで両投手は完璧な投球を見せたが、四回に試合が動く。

先頭打者の草悟がライト前ヒットで出塁すると二番杉井貴士（すぎいたかし）がバントで送って1アウト2塁。三番隠九条憂男がレフト前ヒットで3塁1塁の形を作ると四番中宮寺優奈子（ちゅうぐうじゆなこ）の犠牲フライで先制。五番入江舞名（いりえまな）は内野フライに終わり2アウト1塁になるが、一軍半キラーの六番白藤聖（しらふじひじり）の予想外のホームランで3―0と久石に援護点をプレゼントした。

（よし、次の回を0に抑えれば久石さんに先発初勝利をプレゼント出来るぞ！）

草悟は心の中でガッツポーズをしていた。

草悟にとって久石は仲間であり、自分に多大な影響を与えた恩人の一人である。

久石は新人の草悟に色々教えて、持ち前の兄貴分で人間関係の良くない草悟をサポートしている。

恩返しがしたかった。

だがこの日、神ではなく悪魔の掌にいることを草悟は知らなかった。

▪★

5回裏。悲劇の幕開けはすぐに起きた。

グリフォンズの先頭打者は一番。一番打者は久石のスローカーブに手を出してしまいボテボテのゴロを打ってしまった。

打球はショートの草悟に。草悟は待って取ろうとする。その時、バウンドが変わり取ることが出来なかった。すぐにファーストに転送したものの、セーフ。

2番3番にシングルヒットを打たれノーアウト満塁。

ここで内野陣が久石を中心に集まる。
「す、すいません。久石さん。俺のせいで」
傲慢と言う言葉が服を着ているような草悟が申し訳なさそうに謝罪の言葉を述べる。
「気にするな。お前は不慣れなポジションでよくやっている。それより次の打者を料理するぞ」
四番打者は久石が良く知るグリフォンズ時代の後輩だった。久石は彼にどういった球を投げれば内野ゴロに打ち取らせるかを知っていた。
必ず内野ゴロで打ち取ってやる。そう言い切った久石は内野陣を元に戻させる。
四番打者が打席に入ると内野陣は極端とも言えるほど前進守備を敷いた。
(俺の所にボールが来たら即座に本塁に送る……俺の所にボールが来たら即座に本塁に送る……)
草悟は心の中で何度も呟く。
久石は投げた。相手の懐に飛び込むようなスローカーブ。相手は窮屈なバッティングで振ってしまった。打球は草悟の真正面に飛んだ。
(よしっ、ゲッツーだ!・え――!?)
草悟は自分を疑った。先ほどまで本塁に投げるように心の中で呟いていたのに身体が投げたのは二塁。
極端な前進守備を敷いていたため二塁手の杉井が取れるはずもなくボールは外野に転々と転がる。
3―0の2アウト3塁2塁が、3―2のノーアウト2塁1塁。再び集まる内野陣。
「……」
謝罪の言葉も出ないほど動揺する草悟に、久石がグローブでポンと草悟の頭を叩いた。
「草悟、試合はまだ続いているんだ!・しっかりしろ」
「あ、はい……」

消え入りそうな声で答える草悟。そんな草悟に久石は再び声をかける。
「いいか。この回同点に追いつかれてもいい。逆転さえ許さなければいい。そういう気持ちで行くぞ！」
「……」
「俺を信じろ、草悟！」
「……あ、はい！」
まだ気持ちは落ち着いていなかったが、草悟は久石の目を見て返事をする。
その言葉通り、久石は続く打者二人を三振にきって取った。
ノーアウト２塁１塁から２アウト２塁１塁に持ち込んだ。
七番打者に対しても久石は緩急をうまく使って追い込んでいく。
２ボール２ストライク。４球目で追い込んだ久石の５球目。

――ッ！

（え？）
草悟は言葉を失った。
振りぬかれた打球が、久石の頭に直撃した。
「うわあああぁぁぁっっっ!!」
崩れ落ちる久石。高く上がるボール。
草悟は上がったボールを捕球しようと飛び込む。
（頼む、届いてくれ！）
必死に祈りながらグラブを必死に伸ばす。ゆっくりとスローモーションのように落ちるのが草悟の目に映った。そして。グローブの先に当たっただけで地面に転がるのも。
捕手の古山がすぐさまカバーに入るが投げられず２アウト満塁。
「久石さん！」
ピクリとも動かない久石の様子を確かめるため触れようとする草悟を憂男が身体を引っ張った。
「な、何を!?」

キッと睨む草悟に憂男は言い放つ。
「バカッ！頭を動かすな。脳に支障が出ているかもしれないんだぞ！」
憂男の言葉に草悟は近寄りたい衝動を抑え久石から離れる。
担架を持った救護班が久石を乗せてグラウンドの外へと運んでいく。
グッタリと動かないまま運ばれる久石を、草悟はただ黙って見るしか出来なかった。
3―2。2アウト満塁。久石が抜けたマウンドに上がったのは女性右腕、岡本悦（おかもとえつ）。
ワンポイントリリーフの彼女だが、肩が充分出来ていない急の登板だったため8番打者にストレートの四球で押し出し。3―3に同点にされてしまった。
9番投手の打順でグリフォンズは左の代打を送ったが、岡本悦はファーストゴロに打ち取った。
▪★
六回表。
8番打者が四球。九番岡本悦の所で代打が送られたが内野ゴロ。
先ほどのミスを帳消しにしようと打席に立つ一番草悟だったが、気合が空回りピッチャーゴロ。1塁走者はコースアウト。ヘッドスライディングを見せた草悟だがあと一歩及ばずアウト。ゲッツーに終わった。
その後六、七回をお互い一歩も許さず八回。
八番古山はショートゴロに終わったものの、九番投手の所に送られた代打がレフト前ヒットで1アウト1塁。代走には美空に活躍を託された代走の切り札、新城護が送られる。
そして打順は一番。草悟に4打席目の打席が回った。
▪★
「……」
草悟は何も考えずに打席に入った。否、何も考えることができなかった。

頭に浮かぶのは五回の自分のエラー。久石の頭に直撃したピッチャーライナー。
（俺が、俺があの時にエラーをしなければ……久石さんは怪我をしなかった。先発での勝利投手が久石さんに……）
悔やみきれないプレイ。心の中で自責の念が草悟の心を責め立てる。
投手が投げる。
（俺が、俺がッ！）
草悟はバットを振った。だがそれは打とうと思って振ったのではなく、自責の念を振り払うために振ったスイングだった。
「……え？」
気づいた時には草悟は2塁ベースを回っていた。スイーツ側の観客席の大歓声、膝をつく投手、立ち上がって盛り上がる自軍のベンチ、ゆっくりとホームベースに向かう1塁走者。
（あ、俺……ホームランを打ったんだ……）
他人事のように思っていた。プロ初めてのホームランにも関わらず。涙を流しながらダイヤモンドを周る。
ホームベースを踏み、ベンチに戻ると「この野郎！」「いい所で打ちやがって！」と歓迎するが、なぜ俺が、という思いでいっぱいだった。
スイーツの攻撃が終わり八回を冷泉、九回を響が抑えてゲームセット。
スイーツは5―3で何とか逃げ切った。
▪★
試合が終わり、多くの人が自らのミスを帳消しプロ初ホームランが決勝打になった有賀草悟がヒーローインタビューだと予想した。
テレビカメラはドラフト会場を大いにざわつかせた未知数中の未知数のルーキーのヒーローインタビューを捉えようと待つ。
しかし待てど待てどもその本人が現れない。
ざわめく観客。ざわめきが苛立ちで怒声に変わるか否かの所で、進行役のアナウンサーが困惑顔でアナウンスをした。
「え、えっと。有賀選手はヒーローインタビューには出るのを拒否す

る、とのことです」
突然の発表に観客はざわついた。
▪★
草悟はバスタオルを被ったまま球場を後にするとすぐ様久石が入院した病院に向かった。
「大丈夫だ。有賀。球の跳ね返りからみておそらくダメージは残っていないはずだ」
「……」
付き添ったコーチの言葉に、草悟は何も言わなかった。
▪★
美空は頭を悩んでいた。
勝利はしたものの期待していたベテラン左腕が抜けた。
ただでさえ左腕は不足がちである。そして久石は計算できる投手であり精神的な主柱も兼ねている。
これから佳境に入るリーグ戦。ベテラン左腕の離脱は若い選手の多いスイーツにとって大きな痛手だった。
「誰を、あげるべきか」
▪★
翌日。グリフォンドーム。
草悟は合同練習で皆と共に練習を行っていた。ただその表情は暗い。
(俺が、あの時俺が。エラーをしなければ……)
そんな心情を察してか、他のメンバーも刺激させまいと少し距離を取っている。
そんな時だった。
「ん?」
草悟の視界にスイーツのユニフォームではない人物が入る。
久石に打球を当てたグリフォンズの七番打者、徳山則之(とくやまのりゆき)だった。
(ケッ)
草悟は心の中で吐き捨てた。久石が負傷したのは自分に責任があると草悟は考えている。だが美空に頭を下げている選手が打たなけ

れば久石は負傷することもなかった。
美空に謝罪の言葉を述べると、徳山は草悟の方へ歩いてくる。
「有賀選手。よろしいでしょうか？」
「なんすか――ウガッ!?」
いつの間にか傍にいた憂男が草悟の頭に拳骨を与える。
目を大きく見開いた顔には『他球団の先輩選手になんて口のきき方をしているのだ』と書いてあった。
「何でしょうか？」
嫌そうな顔を隠そうとせず、草悟は言い直した。次の瞬間、草悟は言葉を失った。
「有賀選手、申し訳ございませんでした！」
徳山がいきなり地面に手をついて頭を下げたのだ。
「え、あの……その……え……？」
「どうしたんですか、徳山さん？」
混乱する草悟の代わりに憂男が尋ねる。
「俺、じゃなくて私、聞きました。私が久石投手に当てたばかりに有賀選手が、大変悔やまれていると……。昨日のヒーローインタビューの拒否も……ご自身のエラーを責めていらっしゃっていると。私が久石投手に当てたばかりに……」
ポロポロと涙をこぼしながら途切れ途切れに言葉を紡ぐ年上選手を前にして、草悟は初めて気がつく。
（そうか、久石さんを負傷させた件で苦しんでいるのは俺だけじゃなかったんだ）
と。
一方で当ててしまった相手の気持ちを考えず一方的な怒りを抱いていた自分の醜さに胸が痛くなる。
「……い、いえ……あまり気になされないで、下さい……」
自分の事しか考えず、相手の苦しみに気づかなかった自分の身勝手さに気づいてしまった草悟は、そう言うしか出来なかった。

智那と草悟

八千代智那（やちよともな）。

男も女も好きなオカマであり、スイーツの先頭打者を務める男（女？）である。

打率は規定打席に到達した選手の中で下から数えて二番目の０．２０２。守備は一塁しか守れない上に平均レベル、肩や足も一般選手以下。だが去年の２０１７年の出塁率はリーグで一位。

草悟が一番に定着すると下位に打順を下げられたが、それでもスイーツに欠かせない存在として活躍をしている。

幼少の頃から自分は変わった人間だと思っていた。男なのに女の恰好をしたがる自分。一方で男も女も好きになってしまう。

人間だったら誰でもいいのか、と思ってしまうほど智那は男女が好きだった（ただし同世代～４５歳）。

好きな男性を追いかけ、智那は野球部に入る。

オカマということもあって孤立していた智那だったが、そこで彼は運命的な出会いを果たす。当時監督だった松平監督（５５歳）が彼を気に入ったのだ。野球選手としての能力は並以下だったが彼のある点に注目し彼を先頭打者に抜擢した。

智那の活躍に仲間たちも先入観を捨て彼の存在を認めた。

甲子園出場は果たせなかったものの、智那の活躍で野球部は県のベスト８に入るほどとなった。

そして運命のドラフト会議。意外性のあるドラフト選手を取ることで有名なスイーツの４巡目で獲得。特にここではないと入らないなどのこだわりがなかった智那はそのままスイーツに入団することになった。

打撃、守備、肩の強さ、足の速さ。どれもプロ野球選手では標準もしくはそれ以下。当然三軍での育成にされることになる。

大吾は彼がグラウンドの整備、料理の手伝いなど下働きを率先してする姿。そして松平も認めたある点を認め当時の一軍監督に智那を推薦。

一塁しか守れない智那を一軍監督は使おうと思わなかったが、スイーツ初のタイトルを獲得した大吾の推薦ということもあり数試合使う事にした。
そして知る。松平や大吾が認めた出塁率の高さと一打席当たりに投げ指す投球数の多さを。
実力を認められた智那は打てない、走れないながら出塁、または捨石としてスイーツの一番打者に任命される。
▪
▪★
ある日のことだった。
一軍寮に戻ると、玄関先で智那がスマートフォンで野球の動画を見ていた。
動画を見ながら、ふふっと笑う智那を、草悟が横切る。
「ポセイドンの広田君と何かあったの？」
「!?」
不意に声をかけられ、否。その内容に草悟は言葉を詰まらせる。
「なんで!?……って顔をしているわね。じゃあネタ晴らし。有賀君。貴方、ポセイドンと戦う時、何か意識しているわね？」
「……」
「私ね。野球をする人が大好きなの。一軍選手から育成選手までね。全球団選手のポジションはもちろん生年月日、出身地、成績……当てられる自信はあるわ。出身校とかもね」
「……」
「ポセイドンと当たる時。有賀君は誰かを探している目をしているの。で、見つからなくて残念ともホッとしたとも言える複雑そうな顔つきになる。そこから有賀君に何かしらの接点があってかつ出会っていない人。この条件にあてはまるのって広田君しかいないのよね」
「気のせいでしょう。俺は広田投手とは高校違いますよ。出身地も違いますし」
草悟は否定する。草悟の言う通り高校は違う。広田は中学時代を評価されプロ野球選手を輩出している名門校にスカウトされたから

だ。
出身地も違う。だが一度も会ったことはないとは言わなかった。
「……そう。ごめんなさいね」
智那はそれ以上追及しなかった。
「そうだ、最後に一言」
「まだ何か？」
あからさまに嫌そうな顔をする草悟に智那は優しく微笑(ほほえ)む。
「あまり悩み過ぎちゃだめよ。一人で悩み過ぎると視界も聴覚も考えも狭くなってしまうから」
「……肝に銘(めい)じておきます」
社交辞令でそう言うと草悟はその場を離れた。

古山博光の憂鬱プロローグとその1

西河原善一郎(にしがわらぜんいちろう)。

投手西河原がどんな投手と言えば、先発投手二番手でありながら5回持たずにノックアウトされることが多い。そんな投手を2番手にせざるほど投手陣は崩壊していた。

変わり者が多いスイーツで変わり者の一人である。どう変わっているかを一言で言うならば突拍子もないことを夢見る大人である。

▪★

「なあ、博光」

「何だ?」

超・王臣が来るまでは二番手先発投手だった西河原善一郎が、ファントムズから人的保障で移籍してきた古山博光に声をかける。

「魔球が投げたい!」

「……善一郎」

スイーツ正捕手は冷たい視線で馬鹿げたことを言う投手を見る。

「『魔球が投げたい!』と言われて『じゃあこうすれば投げられるよ』と俺が言うと思ったのか?俺は21世紀からやってきた猫型ロボットか」

「違うのか!?」

「当たり前だろ!!」

「だったらピーーーー(ある特定人物の名前です)を呼ぼう。彼ならば魔球を投げる方法を伝授してくれるはず!」

「作者がピーーーー(ある作品のタイトルです)のピーーーー(ある特定人物の名前です)を主人公にした二次創作を書いているからって出来ると思うな!あと実際にピーーーー(ある特定人物の名前です)に魔球を投げさして欲しいと言ったらとんでもないことになるぞ!!」

漫才のようなやり取りをする二人。

二人は猪飼(いのかい)高校という意外性のある高校でバッテリーを組んで甲子園に出場したことがある間柄だった。

プロでは西河原はスイーツに、古山はファントムズに入団し袂を分

かつことになったがスイーツのエースだった鳳火呼子のＦＡ移籍の人的保障で再び同じチームになった。
甲子園出場バッテリー復活は古山博光の心労が増えることを意味した。
こうしていい加減現実を見ろよ、と言われる男とその男に悩まされる男の物語が始まった。

古山博光の憂鬱その１
「なあなあ博光。俺こんな魔球考えたんだけど！」
「……言ってみろ」
スイーツの正捕手、古山博光は頭を抑えながら促す。止めたところで言うことを聞かないのは高校時代からわかっていたからだ。
「普通のストレートと見せかけてバッターの手前でピタッ！と止まる。こんな魔球投げられたら凄くないか!?」
興奮気味に語る夢見る投手の言葉に、スイーツの正捕手は重いため息をつく。
「……あぁ、すごいな」
「だろ!?」
そして指摘する。
「でもバッターの手前でピタッ！と止まるって一番打ちやすいボールじゃないか？」
「あ」

第十二話　憎悪

7月下旬。3位につけたスイーツは首位ポセイドンを本拠地で迎え打っていた。

草悟は相手ベンチを見ていた。

草悟と視線が合った男は、嘲笑しながら草悟を見ていた。

広田義信(ひろたよしのぶ)。

一年目からポセイドンのローテションピッチャーとして活躍。三年目となる今期では4年連続二桁勝利をしているエース、松本刃録(まつもとはろく)。通算防御率2．11と抜群の安定感を誇る加藤茉莉夫(かとうまりお)と共に三本柱と評される活躍をしていた。

スイーツとの対戦は今期三度目。

前回、前々回とスイーツは広田を打ちあぐねている。

5回表の攻撃。

「クソ……三年目にいいようにやられるとは！」

空振り三振に終わった優奈子はバットを叩きつけたい衝動を何とか抑えてバッターボックスから下がる。

草悟自身も打ちあぐねていた。

選球眼とスイングスピード、現役時代に盗塁王争いをした御山(おやま)も認める脚力を持つ草悟だったが、ここに来て疲労の色も隠せなくなっていた。

また緩急を使われると弱いことも球界に知れ渡っていた。

一本足打法で緩急に対応しているが、一本足打法を完全に会得したとはいえず一流投手やコースをつかれるとタイミングを崩されてしまうこともままにある。

一流選手に匹敵する力は持っているが、プロの世界で戦える体力・技術を持っているとはいえない。

過少も過大もせず慎重にいけば打ち取れないことはない選手、それが有賀草悟だった。

無論、一年目のルーキーがここまで恐れられること事態が異常だが。

★
八回表。
４打席目。打ちたいという念を利用されているかのようにボール球に手を出してしまい三振の山を気づいていた。
自分を崩すバッティングだった。
（失態だ、醜態だ……ッ！）
草悟はバットを叩きつける。
倒すべき相手になす術もなくやられている自分への怒り。
何もかも放りだして、ここから逃げ出してしまいたかった。

自分はまた負けた。

広田に勝てないということを思い知らされる結果となった。
（俺は、あの男を倒すために努力してきた。だが結果は一球もかすることもない三振……自分の人生を狂わせた男に恨みを晴らすことは最初から無理だったのか？あの男に勝つこと自体間違いだったのか!?）
考えても負の迷路から抜け出せない。そして最後にたどり着くのは、絶対に認めたくない自分の不安。
（俺は……一生。広田義信に勝てないか？）
次はどうしたら打てるか、などではなく自分の存在を否定することばかり思い浮かぶ。
（負けたら……負けたら何も意味は無い……）
「草悟君」
声をかけたのは草悟に押し出される形で一番から下位に打順を下げられることが多くなった八千代智那。
禄（ろく）に話したことの無いオカマの先輩選手。
「何ですか……」
「試合を見なさい」
「……」
草悟は喋らない。喋れば胸中に渦巻く感情が決壊しそうだったか

らだ。
「……もう少し、待ってもらえませんか」
草悟は、なんとか喉を振り絞る。
「見るのも勉強よ」
オカマの先輩は優しく口調で厳しく言い放つ。
「まだはウチの攻撃は終わっていないわよ」
草悟は黙って視線をグラウンドに向けた。
グラウンドを見ているものの、草悟はグラウンドを見ていない。
視線はグラウンドだが、心は負の迷路に閉じこもったままだ。
(俺は、何のためにプロ野球選手になったのだ?)
心が痛む。
その時歓声が上がった。
二番杉井が凡退した後、憂男が三遊間を抜くシングルヒットを放ったのだ。
続く優奈子がフェンス直撃のツーベースヒットで1点を返す。
ここまで0点に抑えていた広田が苦笑いを浮かべたのを見て、草悟の心に邪な感情が浮かぶ。
(広田……お前なんか打たれてしまえ)
「私の打席、よく見ておいてね」
そう言い残し、六番打者の智那はネクストサークルに移動する。
智那の言葉を草悟は心に留めず呆然と前だけを見る。
(自分は独りだ。グラウンドの中で、仲間などいない。俺を助けられるものなど、いない)
そう鼻で笑っている間に、舞名が死球で出塁。草悟が一瞬視線を外した時。

カキンッ!

白球が空に舞い上がった。
フルスイングした智那の打球は大きな弧を描きレフトスタンドに飛び込んだ。

一瞬の静寂の後、
「うおぉ！」「よっしゃあっ！」、「逆転の３ランだ！」
歓声が破裂した。
ベンチで選手が飛び跳ねた。
３対４。八回で球界のトップクラスに上り詰めた広田から４点を奪い、スイーツは試合をひっくり返した。
「……馬鹿な」
草悟は信じられなかった。
あの広田が。自分ではどうやっても勝てないと思っていた広田が、逆転弾の被弾。
しかも、当てるだけのバッティングの６番バッターに。
マウンドの広田を見る。
声をかけてくる先輩に向け笑っていたが、どこかぎこちない。
無理して作った笑顔だった。
視線を広田から、智那に向ける。
草悟に気づいた智那は、草悟に向けて握り拳を作って見せた。
顔が、綻ぶ。
自分が負けた事に変わりは無いと思うけれど、心は一挙に軽くなる。
智那に素直に感謝して、草悟も、右拳を突き上げた。
智那はそれを確認して、走り始め、
「……ッ!?」
途端、智那はグラウンドに蹲（うずくま）った。
蹲る智那が押さえるのは、腰。智那が慢性的に痛めている箇所である。
智那が立ち上がれない。
救護班が駆け寄り美空が代走を告げる。
ガヤガヤガヤッ……
歓声はどよめきへと変わっている。
「……」
草悟は、グラウンドを呆然と眺める。

瞳に一筋の涙が流れ落ちていることに草悟は気付かない。
智那が担架で運び出され、騒動は一段落する。しかし、球場では依然としてどよめきは残る。
憂男がふと草悟を見た。草悟は打たれたショックを引きずる広田を見ていた。
（八千代さん、もしかして……）
憂男は悟る。初めて会った時から草悟に感じていた違和感を、智那は気づいていたことに。
草悟の野球選手、否、人間として致命的な間違いを。
この若い、未成熟な人間に教えたかったのだろう。
見せたかったのだろう。
復讐に心奪われている青年に、もっと大事なものがあると。
▪★
スイーツは勝った。
だが失うものが多い、問題が露呈した苦い勝利だった。
左の中継ぎ投手の久石に続き、正一塁手の智那の故障。草悟の脆さ。
「とりあえず代打の切り札、岡本（純一）をファーストに置くしかないわね」
抜けてしまった人間を心配したい人の情を振り切り、監督としての思考を優先させて今後の編成に心を配った。
★
（広田が負けた……あの広田が敗戦投手……）
悩む草悟に憂男が歩み寄る。草悟が何に勝とうとしているかに憂男は気付いたからだ。
そして気がついた。憂男がなぜ草悟を危険だと思ったかを。
（こいつは野球をしに来たんじゃねぇ……私怨を晴らしに来たんだ！）
その理由に気づいた憂男は激怒した。
憂男は草悟の胸倉掴んで持ち上げた。
「な……何するんですか！」

「良かったな、勝ててよ！」
草悟の顔が陰惨なものになる。
憂男は、自分の考えが的中したことを確信した。
「何が……ですか。ウッ？」
しらばくれようとする草悟の胸元を、更に絞る。
草悟が、小さくうめき声を上げた。
「おめでとうって言ってるんだよ……よかったな。広田に勝てたぜ？」
草悟の顔が、見る見るうちに赤くなった。
「違う！こんなのは勝ちじゃない！」
胸元を引き絞られても草悟が叫ぶ。
そんな草悟に憂男は「はぁ？」と嘲笑う。
「負け投手は広田だろ？だったらお前の勝ちじゃねぇのか？」
その嘲笑が、その言葉が、草悟を興奮させる。
「違う！違う！」
草悟は、違う違うと喚き散らす。それ以外の言葉を知らないように。
「だったら何がお前の勝ちだ!?」
憂男が、言葉を叩き付けた。
「え？」
「どういう結果ならお前の勝ちになる？……それを聞いてるんだよ！」
黙る草悟に憂男が投げかける。
「お前の決勝打で、広田が負け投手になる。それならいいのか!?」
「いや……」
「お前が全打席安打で勝てば、それがお前の勝ちか!?」
「いや……」
「だったら何だってんだ！」
憂男が右拳を握りこんだのを見て、二人の女性が制止に入る。
「隠九条、落ち着け！」
「冷泉の言うとおりだ」

優奈子は憂男の右手を掴んでいた。憂男は驚きを見せた。
草悟に甘い冬狐は別として、優奈子が制止に入るとは思わなかったからだ。
「……中宮寺さん。解るだろ!?あんたなら!」
驚愕の表情を浮かべる憂男に、優奈子は笑う。
「やるなら奥でやれ」
「ああ、なるほど」
優奈子が手を離すと憂男が草悟を奥に連れて行く。
「ちょ、ちょっと待て!」
止めようとする冬狐を優奈子がさえぎり、草悟はベンチ奥に引き摺られ。殴られた。
けれどこの痛みは納得できるものだった。
草悟は頬を押さえながら球場を後にする。
帰り道。いろんなことを考えたが広田の事は頭に浮かばなかった。

幕間　２０１８年ス・リーグ後半戦終盤

今年のス・リーグは首位から5位まで7．５ゲーム差というまれにみる混戦になっていた。その中で多くの人々の予想を大きく裏切ることがあった。

１位。海神ポセイドン
２位。北方ファントムズ
３位。首都圏コスモスターズ
４位。スイートエンジェルズ
５位。金翼グリフォンズ
６位。防人ガーディアンズ

『ス・リーグのお荷物』、『６位はスイーツの指定席』と呼ばれていたスイーツが8月中旬時点で3位に1．５差の4位につけていた。

ガーディアンズは君先が草悟に打たれて以降調子を落とし二軍落ち。不動のセットアッパーを失ったガーディアンズも最下位に転落した。

だがスイーツも順風満帆ともいえなかった。

投手陣の精神的主柱を担っていたベテラン投手、久石がグリフォンズ戦で離脱。それによってスイーツは徐々に投手陣の歯車が狂いだし、後退していた。

左の中継ぎに選手の精神的な存在の離脱はあまりにも大きすぎた。

基本的に先発が持たないスイーツは中継ぎに負担がかかる傾向になる。８回に冬狐、９回に響という勝利の方程式につなぐ役目として久石ははまっていた。

久石が抜けたことで6、７回に点を取られるようになった。

冬狐と響以外に期待できる投手は岡本悦がいるが、彼女は体力がないことと被弾率が高い故にワンポイントリリーフという役目を与えられている。

久石が抜けてことで真っ先に影響を受けたのは岡本悦だった。

美空も彼女の負担を出来るだけかけまいと苦心していたが、投げさ

せないといけない。
久石が抜ける前は2点台だった防御率は、連投による疲労と被弾の影響で4点台後半に跳ね上がった。
冬狐と響は目立ってはいないが、疲労の色が濃くなっているのは投手出身の美空は見抜いていた。
だが有効な手段が見つからない。
問題点は明確なのに解決する手段がない。
表情には出さないものの、美空の心は暗くなるばかりだった。
そして次の相手は、ス・リーグ最強の打撃陣を持つファントムズ。
優勝を狙うスイーツにとっては三連敗は許されなかった。
▪★
『ファントムズ直衛、逆転のサヨナラホームラン！』
逆転勝利に沸くドームの熱気がテレビからも伝わるようだった。
「……」
優奈子はテレビをジッと見ていた。
テレビにはかつて同じチームメイトだったファントムズの正捕手、直衛景勝が映っていた。
ファントムズにいる間4番を務めていた強打者。
優奈子の一歩前を歩いていた男。優奈子は一度も4番にたつことが出来なかった。
笑顔一つ見せず仲間の手洗い歓迎を受ける直衛を優奈子は真剣な視線を向けていた。
▪

ファントムズ主要人物説明

北方(きたかた)ファントムズ。

『肉を切らせ骨を断つ　骨を断たせて命を絶つ』という点を取られたらその分取り返せ、を地で行く打高投低のチーム。変わった容姿と名前が多い。ちなみに彼らは整形をしているわけでもなくかつ本名。

打撃陣はス・リーグ一だが投手陣に関してはＢクラス常連の弱小球団スイーツより悪い。

元ファントムズの古山博光が恐れるトップ３に直衛景勝が打席に立つ、不枝木謎葉の前に走者を貯めること、先頭打者で桜木傾子を迎えることをあげる。

ファントムズ選手一覧

豊(とよしげ)？凶死浪(きょうしろう)

ファントムズの一番打者で遊撃手。血と首を求め戦場をうろついていそうな武者のような容姿。

一発長打を持ちかつ脚が速い。一方でバントや走者を先の塁に進める進塁打などチームバッティングが苦手のため、チームバッティングをする場面が少ない一番に据えられる。

影沼(かげぬま)腐深(ふみ)

ファントムズの二番打者で二塁手。幽霊屋敷にいたら思わず声を上げたくなるようなギョロ目の女性。

パワーはそれほどだがバントや進塁打が上手く、二番に強打者を置くという風潮が出始める野球界で昔ながらの二番打者。

不枝木七八(ふえだきしちや)

ファントムズの三番打者で三塁手。顔の右半分が老人で左半分が美青年。謎葉の双子の兄。

長打率はチーム一。流れに続くタイプで前二人（もしくは片方）が出れば高確率でホームに返す長打を放つが、前二人がアウトだと打つ確立が極端に低下する。

直衛景勝(なおえかげかつ)

ファントムズの四番打者で正捕手。阿修羅のような厳しい顔をし

ている。彼が笑っている顔を見たことのある人はほとんどいない。
打点と打率で二冠王を獲得したことのある球界を代表する強打者。中宮寺優奈子を認めつつも自分を意識しすぎて打撃を崩す優奈子に怒りをもっている。
元ファントムズの博光が一番恐れている打者。
唐沢繰夫（からさわくりお）
ファントムズの五番打者で左翼手。某プロレス漫画のロボ超人の素顔のような容姿。
長打率はあまり高くないが打率は直衛に次に高い。内角に弱いが読んでいれば打てる。
不枝木謎葉（ふえだきなぞは）
ファントムズの六番打者で一塁手。顔の左半分が老婆で右半分が美少女。七八の双子の妹。
勝負強さはファントムズ一とも言われている。敬遠されるなどで塁にいることが多い直衛、唐沢を返す役目が多い。そのため打点は直衛の次に高い。
十曲躯（とまがりむくろ）
ファントムズの七番打者で中堅手。食べないと異常に痩せる（ように見える）体質。そのため骸骨のように見える。
確実性は低いながらも意外性のあるという典型的な恐怖の七番打者。
桜木傾子（さくらぎけいこ）
ファントムズの九番打者で右翼手。妖艶な雰囲気を持つ美女。その美しさと他のレギュラーが妖怪や仏像、ロボなど人間とは思えない容姿をしているためサキュバスという扱いになっている。写真集を出して売れている。
ス・リーグダントツで打率が低く「投手の方が打率がいい」と揶揄されるほど。実際塁に走者がいるとゲッツーなどで好機を潰すこともしばしば。
しかし先頭打者で始まる場合高確率で出塁する。盗塁成功率は９割。先頭打者で始めてしまうと恐怖の一番打者になってしまう。

ファントムズ一の強肩で草悟が二塁からいけると思ってタッチアップしてアウトに出来るほど。

鳳火呼子（おおとりひよこ）

元スイーツのエースで現ファントムズのエース。

決め球はナックルだがストレートや他の変化球も決め球レベルに高い。

スイーツ在籍中に女性初の完全試合を達成できる直前に当時投手コーチだった美空が監督に投手交代を進言したため完全試合を出来なかった。

オールスターでファントムズ監督山元勝頼の「美空は自分が成し遂げられなかった女性初の完全試合を愛弟子のお前にさせたくなかったから変えた」という言葉を信じてしまい美空と完全に決裂。

完全試合をさせなかった美空と当時監督だった5代目監督毛利（もうり）和章《かずあき》、自分と入れ替わるようにFAでスイーツに加入した中宮寺優奈子に異常な怒り＆恨みを持っている。

外伝　中宮寺優奈子物語

優奈子は小さい頃から体格に恵まれた女の子だった。そして男子顔負けの運動神経を持っていた。

高校に入るとバレーボール部やバスケットボール部に熱烈に勧誘を受けたほどだ。

そんな彼女が選んだのはもちろん野球だった。

プロ野球でも女性が活躍するようになった影響もあって能力があれば女子も甲子園で活躍できる時代になっていた。

男勝りの怪力を持つ優奈子。

彼女の母校である松城高校は彼女の活躍もあり甲子園出場を達成した。

ドラフト会議で彼女はドラフト3位でファントムズに入団した。

彼女はすぐに一軍とはいかず二軍で育成されることとなった。

一年後。彼女の超えるべき存在が入ってくる。後にファントムズの正捕手になる男、直衛景勝。

社会人出身の捕手。

年上とはいえプロでは後輩。そして投手の次にアウト製造機とされがちの捕手。この選手が自分の壁になるとは優奈子は思っても見なかった。

二軍でプロの球に慣らし、守備を勉強してきた彼女は持ち前の長打力で七番からすぐにクリーンナップに抜擢された。しかしＦＡでスイーツに行くまで四番になることはなかった。

ファントムズの四番には直衛が定着していたからだ。当初は外野を守らされていた直衛だが正捕手だった選手が調子を落とすと正捕手に抜擢。その後は捕手と強打者という両立が難しい仕事をこなし、ファントムズのキャプテンに命じられるほどの名選手に成長した。

優奈子は苦しんだ。どんなに努力をしても自分の前にいる男の存在に。

ある日のことだった。
スイーツとの対戦で優奈子はファールを打った。ファールボールは三塁ベンチに飛び込み跳ね返りに跳ね返り、当時投手コーチだった美空に直撃した。
翌日。優奈子は美空のもとに謝罪に向かった。
その時美空は何の前触れもなく優奈子に尋ねた。
「乗り越えられそうにない壁を乗り越えようとする時、貴女ならどうする？」
「え、それは……一旦壁から離れて別の所から上れないか観察してみるとか、でしょうか？」
「そうね」
優奈子の回答に美空は嬉しそうに微笑む。
「あ、あの……美空コーチ。何が言いたいのでしょうか？」
何が言いたいのか理解できず、優奈子は尋ねる。
「元女選手として忠告させてもらうわ。今のままでは直衛選手には勝てない」
「え？」
超えようと思っている相手に勝てないと言われた怒りよりも、直衛景勝を超えようとしていたことを見抜かれていたことに優奈子は驚く。
「外から見てみて。直衛景勝という選手を。そして振り返ってみて。中宮寺優奈子という選手を」
「……あ、はい……。わかりました」
頭が真っ白になる美空の発言の連続に、優奈子はそう言うしか出来なかった。
▪★
試合が終わって家に帰るなり、優奈子は美空の言葉を思い返していた。
（ＦＡでファントムズを出ろ、と言っていたのか。美空さんは？）
直衛を超えようと考えれば考えるほど大きく感じられる直衛。
美空の言うとおりＦＡで出るのは逃げではないのか、と疑問を覚え

る。
だが『振り返ってみて。中宮寺優奈子という選手を』という美空の言葉が頭から離れない。
（どうすればいいのだ、私は!?）
その答えを導いたのはあろうことか直衛本人だった。
ある日のこと。後輩である豊（とよしげ）?凶死浪（きょうしろう）と影沼腐深（かげぬまふみ）が優奈子に黙って直衛を酒の席に誘ったのだ。
そしてチーム一のバカで一番打者、豊?凶死浪はとんでもない爆弾を投下する。
「ところでファントムズで一番の強打者って誰だと思います?」
と。
その発言にフォローに定評があるギョロ目の二番打者、影沼腐深が凶死浪の口にガムテープを張ると「危危。あら直衛先輩、優奈子先輩。お酒が空になってますよ」と誤魔化そうとする。
「…今のファントムズでは俺。だが中宮寺は俺以上の強打者になる力を持っている」
「嫌味か!!」
ドンッと机が割れそうなほどグラスを叩き落す。
だが直衛はひるむ様子もなく続ける。
「…俺は本当に思ったことしか言わない。お前は本当に俺以上の強打者になれる力を持っている。だが気負いしすぎて――」
「そう言って本当は私が目障りなんだろうが、本当のことを言えよ!」
「悲悲!優奈子先輩、落ち着いて下さい!!」
腐深が止めに入るがそれは無駄に終わった。
「…そう思う限りお前はその程度の選手だ！一生お前は俺には勝てん！」
「いいだろう、お望みどおりファントムズから出ていってやるよ!!」
「疑疑。優奈子先輩話がつながってないんですけど。って待ってください!!」
酔いに任せて店を出る優奈子。
この時のやりとりがきっかけで言い出したら引かない優奈子はＦ

Aでファントムズを出て行った。

最後の亡霊三連戦第２２戦前編

北方ファントムズ。
『肉を切らせて骨を断つ。骨を断たせて命を絶つ』という打高投低のチームでス・リーグ一とも言われる打撃力でＡクラスが７回。優勝３回、日本一１回になった強豪チームである。

▪★

ファントムズ球場内ミーティングルーム
「これよりミーティングを開始する。全員、よく聞け！」
白髪混じりの縦にも横にも大きい男が集まった選手たちに気炎を吐く。
山元頼勝（やまもとかつ）。
現役時代はファントムズの中心人物として活躍していた名選手であり、現役＆監督時代に退場を１１回も宣告されている『燃える闘将』の愛称でファンから愛されている監督である。
「今日からはスイーツ３連戦。そして首位にいるポセイドンは３位のオーディンズと戦う。ここでスイーツに３連勝すれば、オーディンズ次第で首位に上がれることも可能だ」
だが、と山元は一度切る。
「逆に言えばここで負け越すことがあれば掴みかけたポセイドンの尾を逃すばかりか、２位転落する可能性は高い。ファントムズが優勝できるかどうかを占う天王山の戦いがこのスイーツ戦と思え！」
山元は僚友といえる福島氏康ヘッドコーチに説明を続けさせる。
「もうすでに何度も対戦しているが、それでも特に注意しなければならない人間をピックアップ！」
福島はホワイトボードに選手の名前と写真を貼り付ける。
「まずは有賀草悟。２０１７年ドラフト会議で前例のない野球部に所属していない謎のルーキー。だが７月に一軍登録されたのにも関わらず主に一番打者を務め打率・２９８。得点４０。安打８１。盗塁１９とルーキーとは思えない活躍をしている。まだルーキーだと思って油断していると痛い目を見るぞ」

「福島ヘッドコーチ殿!!我々に油断するなど微塵もございません!!この凶死浪、同じ一番打者として正々堂々戦い打ち破ってごらんにいれます!!」
　気合たっぷりに言うのはファントムズ一番打者を務める男、豊？凶死浪。
「嬉嬉。正々堂々戦うというのは意味不明だけど、その意気はいいわね」
　ギョロっとした目の二番打者、影沼腐深が微笑を浮かべる。
「有賀草悟もヤバいがそれ以上にヤバいのはこいつだ！」
　福島はバンッとホワイトボードを叩く。
「スイーツの若き主砲、隠九条憂男！」
　その言葉に全員がピクリと反応する。
「通算高校本塁打数７５という長打力を買われてスイーツに入団したがその後はプロの壁に苦しめられ伸び悩んでいたが二軍落ちして再昇格してからはサードのポジションを自分の物にしたばかりか、成長した打撃と勝負強さでチームに貢献。貧乏球団スイーツじゃなければ間違いなく億超え！まさにこの二人は脅威……ま、ということはスイーツで怖い打者と言えばこの二人くらいということでもあるが」
　その言葉にある選手が呟く。
「入江舞名は今の所普通の打者だし、ウチを裏切った中宮寺優奈子（あの胸デカ女）はウチだと極端に調子を落とし――ッ！」
　言葉が止まった。止めるしかなかった。
　ファントムズ正捕手にして４番、直衛景勝が睨みつけたからだ。
「……ま、まあ先発と言えるのは３戦目の超・王臣くらいだし」
「今日は気合入れて点を取って３連勝と行きますか」
　和やかにミーティングが終わる中で、直衛と直衛の脇に座っていた凶死浪と腐深、そしてＦＡでファントムズに入団した鳳火呼子だけは笑顔を見せていなかった。

★

　ファントムズ最後の三連戦。

先陣を任されたのは成田。この2位のファントムズ、4位のスイーツ。その差はわずか2．5ゲーム差。首位ポセイドンと0．5ゲーム差につけているファントムズとしては首位奪還する絶好のチャンス。まだ優勝を狙える位置にいるスイーツとしては三連勝すれば3位コスモスターズ次第では2位に浮上する可能性もある。どちらも大事な三連戦といえた。

「ふうぅ～」

マウンドで帽子を直し、成田は大きくため息をつく。

左打席に入るのはファントムズの一番打者、豊繁凶死浪。変化球には滅法弱いがストレートには滅法強く、今期だけで先頭打者ホームランを4回しているなど意外性と長打力を持ち合わせている。一番最初から油断の出来ない相手だった。

（どうする？）

成田は正捕手の博光のサインを確認する。外から入る緩いカーブ。変化球に弱いとされる凶死浪からすれば定石だと言える。

頷いた成田は要求通り外角の緩いカープを投げる。完全にタイミングを狂わされた凶死浪は尻もちをつくほど大振りをする。

（空振りのストライクを取れるとはいえ、怖い奴だ）

尻に着いた砂を払いバットを構える凶死浪にホッと一息つく成田。

次に博光は釣り球のストレートを要求する。要求通りのストレートを投げる。釣られた凶死浪はそのストレートにファール。

三球目。サインは最初に投げたような緩いカーブ。成田は頷くと緩いカーブを投げた。構えたのは外角低め。初級と同じカーブ。そのカーブを。

カキィンンンッッッ!!

凶死浪は迷いなく振り抜いた。

打球はファントムズファンが待つレフト側スタンドへと飛び込んだ。

「な、何故だ!?」

呆然とする成田。
（張られていたか！）
キャッチャーマスクの下で苦虫を潰したような顔で凶死浪を見る。
「ん？」
博光はあることに気づいた。気づいたのは博光だけではなかった。次の二番打者、影沼腐深も先頭打者ホームランを打った殊勲者に向かって大声で何かを叫ぶ。
だが博光はそれを許さなかった。
「審判。豊繁選手、ホームベース踏み忘れています」

▪★

「もうこれで何回目かしら。もうここまで来ると形式美と言っていいかも」
怒り狂うファントムズベンチで優雅に笑う妖艶の女性、桜木傾子。
野球界の百鬼夜行と呼ばれるほど特徴的な容姿が集まる中で、唯一写真集を出版するなどモデル顔負けの容姿でサキュバスと呼ばれる9番右翼手。
「ちょ・い・と、待って！」
「だめだめジャーン、でしょ！」
妖艶な美女に双子の選手、不枝木七八＆謎葉の兄妹が突っ込んだ。

▪★

「怒怒！あの馬鹿がぁぁぁっっっ!!」
ネクストサークルで影沼は怒り狂った。
先頭打者ホームランで先制点が入る場面がアウト。幸先良い場面がなかったことになる落胆は大きい。ただアウトよりも性質が悪かった。
「無無。ここで私が感情に任せていてはいけない。私が塁に出る。それしかないわね」
そう自分に言い聞かせると影沼は右打席に入る。
しかし先制点が入らなかったという落胆からすぐの打席で立ち直れるほど彼女は強くなかった。

フルカウントまで粘ったものの先制点を取られずにすんだことによる安堵で精神状態を取り戻した成田の前に見逃し三振。三番打者不枝木（兄）はストライクゾーンから外のボールゾーンに落ちていくカーブに手を出し空振りの三振。

一回表。ファントムズは先頭打者の豊？の失態によって三者凡退に終わった。

▪★

一回裏。

左打席に立つ。

ファントムズ先発は左腕、大塚秀幸。成績は王臣と成田の中間ほどという印象を草悟は持っていた。

初球に投げたのは外角低めを狙おうとして甘くなったストレート。王臣や冬狐、無頼より遅く、かつ久石や君先のような投球術を持っていない左腕のストレートを打つことは草悟にとってたやすいことだった。

踏み込んだ草悟は迷うことなく振りぬいた。

スイーツでは1，2位を争うスイングスピードを誇るルーキーの打球は失速することなくライトスタンドに飛び込んだ。

ファントムズを見返すような先頭打者ホームランを放つ草悟はしっかりとベースを踏んでベンチに戻っていった。

盛り上がるスイーツベンチと観客。

うつむきかけるファントムズ。そんな中一人の男の声が彼らを立ち直させる。

「まだ1点だ！」

正捕手、直衛だった。

その一言でなえかけたファントムズ選手の瞳から活気が戻る。

直衛は草悟に続こうと大降りになった2番杉井をボール球で三振。杉井の三振を見て慎重になった3番憂男を早々と追い込みセカンドゴロに打ち取る。

そして。

右打席に中宮寺優奈子が入った。

直衛は考える。
全身から吹き出る闘志。これはサヨナラホームランなど多くの本塁打を量産した時に発する姿。
（……この姿の中宮寺と戦うのは得策ではない。そしてこの戦いはファントムズの優勝を占う大事な試合。これ以上の失点は避けたい。……仕方ないか）
直衛は立ち上がり、グローブを構える。
1回裏の2アウトランナーなしの状況から直衛は敬遠を選択した。
この状況に球場全体がざわめく。ファントムズ守備陣も驚きを隠せないが、直衛が考えなしにランナーなしの状況で敬遠するという選択をするわけがないと気を入れなおす。
大塚は心の中の疑問をねじふせて立ち上がる直衛のミットにボールを投げた。
▪★
（……ど、どういうことだ!?）
敬遠で歩かされた後、舞名の四球で二塁ベースにいた優奈子は第一打席の敬遠のことを考えていた。
敬遠は相手が強打者の時、打たれることを恐れ歩かせる戦法の一つ。基本的に敬遠をされるということはその打者と戦いたくない＝実力を認められるということになる。
（あの状況で私を敬遠する必要はない。私がホームランを打つとでも思ったか、それとも私との勝負を避けて……いや、あいつはそんな奴ではない。ということは、もしかして私を軽んじているのか？いや、それだったら勝負をするはず……ハッ！）
大塚のけん制で慌てて二塁ベースに戻る。
二塁ベースに入った遊撃手が投手にボールを投げる動作をした後、優奈子はリードを取りながら再び考える。
この時、初打席のことを考えて過ぎていた優奈子は舞名が叫んでいる声が聞こえていなかった。
「タッチでござる!!中宮寺の姐御!!」
豊？のグラブにはボールが収められていた。

「え？」
「アウト！」
（しまった、隠し球か!?）
二塁塁審のコールで優奈子は目線を切っていた自分を歯軋りした。
▪★
博光の前に直衛が右のバッターボックスに入る。
（さてどうするか……）
思考を巡らせながら博光はサインを出す。
（直衛さんは苦手な球種やコースは存在しない。どこを投げられてもヒットにする技術を持っている。逆に言えば得意なコースもない。だったら揺さぶっていくしかない！）
今でも尊敬する先輩捕手に博光は胸元近くにミットを構える。球種はストレート。
頷いた成田が博光の構えるミットめがけて投げ込む。
直衛は体を少し後ろに逸らす。判定はボール。
（次は……）
博光が要求したのは外角のカーブ。多少甘くなってもいいというジェスチャーをする。
成田のボールはほぼ真ん中の高さの外角に曲がるカーブ。
「！」
直衛はそのボールを振りぬいた。しかし先ほどの内角のストレートが効いていたのか、それとも狙い球と違ったのか打球は草悟の正面のゴロ。草悟が一塁手の岡本純一に転送しアウト。
（打ち損でくれて助かったな……）
打者は3割打てば強打者と言われる。逆に言えばどんな打者でも7割近くは打てないことを意味する。その理屈は理解している博光だったが打たれるイメージがちらついた博光はホッとため息をつく。
「おっと博光。一息つくのはまだ速いんじゃないロボか？」
右打席に立った某プロレス漫画のロボ超人の素顔のような顔をした男、唐沢繰夫がかつてのチームメイトに声をかける。
「別に舐めちゃいませんよ」

博光はそっけなく返す。
ファントムズは一部選手を除き、どこか特徴的な容姿の人間が多い。
戦場で血と敵の首を求めて彷徨っていそうな一番打者、豊？凶死浪。
幽霊屋敷にいたら思わず絶叫をあげてしまいそうなギョロ目の二番打者、影沼腐深。
顔右半分が老人で左半分の美青年の三番打者、不枝木七八（ふえだきしちや）。
阿修羅像のような固い表情の四番打者、直衛景勝。
三番不枝木七八の双子の妹で顔左半分が老婆で右半分が美少女の六番打者、不枝木謎葉（ふえだきなぞは）。普段は美形だが試合前は食事を取らないというルーティンから骸骨のようにやせこけて見える七番打者、十曲躯（とまがりむくろ）。
ファントムズでは数少ない純粋な美形でかつ妖艶な雰囲気を持っているためサキュバスと呼ばれている九番打者、桜木傾子。
ファントムズのレギュラーは変わりすぎた名前（本名）で普通ではない容姿の者ばかりだが、博光はロボットのような唐沢がなぜか苦手だった。
（とりあえずこいつの苦手なところからいこう）
博光は足元近くの内角低めに構える。
ボールは要求どおりに決まり、ストライク。
次に構えるのは内角高め。徹底的に内角攻めだった。だが
「甘いロボ！」
多少ボール気味のそのボールを唐沢は振った。打球は大きく跳ぶ憂男のグラブの上を通過しレフト線に転がる。
二塁ベースでガッツポーズする唐沢。
（あいつには打たれたくなかった！）
自分を見てニヤリ？とするロボット顔の男に苛立つ博光。ふと成田を見る。ジッと自分の方を見る視線は「次いくぞ！」とあった。
「お手柔らかに」
気を取り直す博光に左打席に入った女性が声をかける。
不枝木謎葉。チーム事情により打順の中で一番変化すると言われ

る六番。その不動の六番打者はいないというプロ野球で史上初と言ってもいい不動の六番打者に据えられた女性選手。ホームランも打てるが状況によっては返すバッティングや進塁打なども出来る曲者。

存在意義が曖昧で軽視されることも多い六番打者だが、ス・リーグ屈指のクリーンナップが終わったからと言って気が抜けない存在が不枝木謎葉という存在だと博光は考えている。

そして不枝木謎葉は成田を得意としていた。

古山はボールになっていい外角のカーブを要求した。しかし苦手意識を持っているせいか成田のボールは真ん中近くに来てしまう。

その甘い球を見逃す不枝木謎葉ではなかった。

（しまった――ッ!?）

成田と博光の心の声がシンクロする。

振りぬいた打球はセンター前に抜けると思われたライナーを二塁手杉井がダイビングキャッチ。飛び出した唐沢を、ボールを転送された遊撃手の草悟がタッチ。

この回1アウト二塁をゲッツーで切り抜けた。

▪★

2回裏。先頭打者の六番岡本純一を四球で出塁を許すも後続を抑えたファントムズ。

3回表。

「……」

（相変わらず不気味な奴だ）

右打席に入る男を見て博光は小さくため息をつく。

十曲躯。

本人曰く痩せやすい体質らしく顔が異常なまでに痩せて骸骨のように見える男である。

ただし顔が異常なまでに痩せているからと言って体もそれに比例しているかと言えばそうではない。大柄ではないが服の下にはしっかりとした筋肉がついていることを元チームメイトの博光は知っている。

（塁がいないからな。こいつは一発を狙っているだろう）
博光は十曲が一番好きな内角のベルト付近に構える。ただしボールゾーンに。
博光の想定どおり十曲はそのボールに手を出してしまいサードゴロ。
八番投手の大塚には二塁手と右翼手がお見合いしてしまうポテンヒットを打たれたが博光は焦っていなかった。
「ふふふ。もう二年になるのに慣れないものね。貴方とこうして相まみえるのも」
「そうですね」
笑顔で挨拶をする九番桜木傾子に少しだけ笑いながら答える。
（桜木さん。規定打席に到達している選手の中でぶっちぎりの打率が低い。そして――）
成田がボールを投げる。投げた箇所はまさかのど真ん中。
（塁に誰かいると高確率でアウトになるんだよな）
そのど真ん中に来たボールを魅惑の女性は振りぬく。打球は二塁手杉井の真正面に飛び二塁ベースに入った草悟、一塁手の岡本純一の元に渡りゲッツー成立。
この回もファントムズは三者凡退に終わった。
▪★
「…どうだ、成田と古山のバッテリーは？」
悔しがる様子もなく微笑を浮かべたままベンチに帰る妖艶さを醸し出す美女に直衛は尋ねる。
「紙一重でしたね」
「…ずいぶんと厚い紙一重だな」
３回裏。
草悟から始まる好打順だったが三者凡退で終わる。
▪★
４回表。一番豊？凶死浪から始まる好打順。先頭打者の豊？をライト前ヒット、二番影沼の送りバントで二塁に、三番不枝木を空振り三振。四番直衛はフルカウントからの四球で２アウト２塁１塁にし

てしまうも、五番唐沢をサードゴロに打ち取った。
ベンチに戻りながら古山は考えていた。
（次のファントムズは六番の不枝木妹。七番が十曲。そして八番はピッチャーの大塚さん。三者凡退に抑えると、先頭打者であの人に回る……。打率はセ・パ・ス全リーグで規定打率到達者最悪。なのに試合中盤で先頭打者で回るとホームに帰る確率が上がるチャンスメーカー、桜木傾子に）

▪★

４回裏。
右のバッターボックスに入った中宮寺はチラッと直衛を見る。
（腰を落としたまま。つまり勝負するということだな）
大塚が投げる。ボールは
「ボール！」
ストライクゾーンから大きく逸れるボールだった。
（まさか、この期に及んでまた敬遠、いや……私と勝負するつもりはないのか？勝負する価値がないと……。いや、たまたまだ。たまたまに決まっている）
だが次に投げたのは再びストライクゾーンから大きく離れた高めのボールだった。
「クソッがぁ！」
何が何でも打ってやろうと手を出した結果、高めの釣り球に手を出してしまいセンターフライに終わった。
五番入江はピッチャーライナーに終わり、六番岡本純が遊撃手の豊？のエラーで出塁するも七番白藤がセカンドフライで攻撃は終了した。

▪★

５回表。
古山は右打席に入る女性を見ていた。
（桜木傾子。１００試合近く出場していながら未だに打点は０。出塁率は２割をやっと超える程度。そんな打てない女がほぼフルイニングしているのは守備や強肩だけじゃない。試合中盤の先頭打者の場

合ビックイニングの起点になることが多いからだ）
古山はミットを構える。
（桜木さんはパワーはない。ここは球威で押していこう。コースを狙いすぎて四球というタダで塁に出す必要はない！）
カキンッ！
真ん中に近い外角低目のボールを叩きつけるようにして打った。
高々と舞い上がった打球は三遊間に向かう。草悟がすぐさま一塁に送球するが、魅惑の九番打者はすでに一塁を駆け抜けていた。
古山の予感は的中した。
桜木は盗塁を警戒した古山を揺さぶり偽走を重ねて三球連続でボールを投げさせた。
そして四球目。緩いカーブを待っていたかのように桜木は走った。
矢のような送球が二塁ベースに入った草悟に送られた。間一髪でアウトといえる送球だった。だが桜木は身体をなんと身体をひねって草悟のタッチをかわして二塁をもぎ取った。
裏はかかれたとはいえ、刺せると思ったらセーフにされてしまった。
ここで古山の心は折れてしまった。考えることを半分放棄してしまった古山は豊？を四球、続く影沼にヒットを許し満塁にしてしまうと流れに乗るのに上手い三番不枝木七八に逆転の満塁ホームランを許した。
一度集まる内野陣。心の安定を失った古山を助けたのは投手の成田だった。
成田は古山に言った。
「古山、俺はスイーツのエースだ」
「え？」
なぜそんなことを。そう尋ねる前に成田は続ける。
「エースとは〝責任を負うことの出来る投手〟だ。打たれて逆転を許すのはエースのせいだ。お前はピンチをどうすれば回避できるか、その確率が高い選択を選べ。失敗してもそれはエースのせい。打たれたらエースのせいにしろ！」

ホームベース前に戻った古山は心の中で呟く。
（エースのせいにしろ、か）
成田功は自分をエースと呼んでいる。そして監督の美空も彼をエースとして扱っている。
だが一番勝っているのは超王臣だ。チームで一番優秀な人間がエースと言うならば成田はエースとはいえない。
（でも何故だろう、自称エースの癖に。心はエースと認めたがっている）
成田と古山のバッテリーは四番直衛を四球で歩かせてしまうもののそれはストライクゾーンからボールになる三振を狙った投球だった。その後五番の唐沢は草悟のエラーでノーアウト2塁1塁にしてしまうが二人は冷静だった。
（不枝木謎葉。こいつは直衛さんに続くファントムズ2位の打点を稼いでいる。だが直衛さんがチャンスで凡退することがあるようにこいつだってコースを間違えなければ！）
打たれても成田のせい。
そう考えられるようになった古山は外角を中心に2ストライクと追い詰めると胸元に食い込むシュートを要求。内角のストライクゾーンからボールゾーンに行くシュートに当ててしまった打球は深めに守っていた隠九条の正面に。
隠九条は三塁ベースを踏むと二塁に転送。
ノーアウト2塁1塁が2アウト1塁に変わる。
七番十曲は真ん中高めに浮いたボールを打ったが風に押し戻されセンターフライに終わった。
▪★
「成田投手の投球を引き出すリード、流石は古山さん。ウチにいたときは正捕手の直衛さんや第二捕手の秋山さんのせいで第三捕手に甘んじていたとはいえ、捕手が乏しい他球団なら一軍レベルと言われていたことはある。直衛さんに次ぐ得点圏打率を持つ私が好機でゲッ

ツーなんて」
「…不枝木」
阿修羅像のような顔の正捕手が、うなだれる半老半少女の女性投手の頭にポンッと手を置いた。
「…さっきのゲッツーでお前の評価は変わらない。失敗を恐れて縮こまることだけはするな」
そう言うと直衛はグラウンドへと足を進めた。
「は、はい！」
気力を取り戻した一塁手は後を追うように自分の守備位置に向かって走った。
「ふふ」
そんな様子をサキュバスと称される美女、桜木傾子は微笑ましく見ていた。
（直衛景勝。阿修羅のような無愛想かつ威圧感のある容姿の通り自分に厳しく他人にも厳しい。でもああいう優しさも実は兼ね備えている）
「本当にいい男よね、直衛さんって」
「さっさと守備位置につかんか、この馬鹿女！」
「きゃん!?」
ファントムズ監督、山元に尻を蹴られた桜木は、尻をさすりながら守備位置に向かった。
「痛いよぉ。私、お姉さまキャラなのに……」

▪★

5回裏。
4―1と逆転を許したスイーツだったが、ここから猛反撃を始めた。
八番古山が2球で追い込まれるも、そこから脅威の粘りを見せて外角低めのボールをフェンス直撃の二塁打に。息を吹き返した古山に続くように九番成田は一二塁間を抜けるライト前ヒット。
ノーアウト3塁1塁。一番に戻って草悟。3ボールから空振りと

ファールでフルカウント。美空は草悟が打ったら一気に走るヒットエンドランのサインを出す。そのサインに応え、草悟は左中間を破る二塁打を放つ。

３塁の古山は悠々生還。打った瞬間、投手である成田が全力で走っていたこととそれに焦ったファントムズ守備陣の中継プレイの乱れに乗じて成田も生還。

ノーアウト２塁。４―３と一点差まで詰め寄った。

▪★

『二番、セカンド杉井。背番号２』

常識的範囲のリードをしながら右打席に入る先輩選手と相手バッテリーを草悟は見ていた。

（杉井なら俺を進ませることを考えて一二塁間に飛ばそうとするだろう。そっち方向のゴロなら躊躇なく走ろう）

草悟がそう考えていると初球。杉井は打った。打球は風の影響もあって外野の方に向かって伸びるが右翼手の守備範囲内。桜木が助走をつけて取る。

（よし、タッチアップだ！）

草悟は三塁に向かって走り出した。その足は盗塁王争いをしたほどの御山スカウトが認める脚力。

しかし草悟は知らなかった。亡霊集団、野球界の百鬼夜行と呼ばれる中、美しすぎるばかりにサキュバスと呼ばれる女性が邪悪な笑みを浮かべていたことを。

そして草悟は思い出すことになる。自分の一軍のチャンスを潰した君先の時に感じた屈辱を。

三塁ベースコーチが止まれという合図を無視して草悟は駆け出した。

（ん？）

三塁手のグラブが目に入る。三塁手のグラブはちょうど三塁ベースの前。だがボールはまだ来ていない。

それでも草悟は頭から飛び込んだ。次の瞬間。

バシッ！

ボールが後ろから突然グラブに飛び込んだ。草悟の手はまるで自分からボールが収まったグラブに当たりに行くようにアウトになった。

ノーアウト2塁から2アウトランナーなしに変わったものの、まだスイーツは諦めていなかった。三番隠九条がセンター前ヒットを放つと、四番の中宮寺に回った。

最後の亡霊三連戦第２２戦後編

「さて皆さん。唐突ではあるがこの者たちを覚えているだろうか」
「そう。話題性抜群のルーキー、有賀草悟と共にルーキーとしてその輝かしき門をくぐったはずの赤木康友（ボンクラ）とサイドスローからアンダースローと華麗に投球スタイルを変えた期待の女性サウスポー、青津弥子（やこ）を……」
「某ＴＢＳ系のアレのモノマネやめなさいって。洒落になっていないから……」
何で赤木君はそんな扱いなの、というツッコミを置いて、冬狐の相棒の日野陽子が突っ込む。
二軍の試合を終えて、ガーディアンズ二軍球場から徒歩１０分ほどの隠れ家的居酒屋に三人はいた。
ある人の奢りで。（ただし未成年の康友と弥子はジュース）。
「何かカメラ目線で誰かに説明しているみたいだけど、大丈夫かい？」
その人物、君先正哉が苦笑いを浮かべたまま話しかけてきた。
恐縮しきった様子で弥子は口を開く。
「あ、あの。誘われていてこういうのは変かもしれませんが……君先さんみたいなお方が他のチーム、それも私達みたいな二軍選手に声をかけてもらえるなんて……いまさらなんですけど、どうしてですか？」
「そりゃあ君先さんが器がでかいからでしょ。実績のない若手を下に見るくせに中途半端な選手と君先さんを一緒にしたら失礼だろ」
「いや、深い意味はないよ」
康友の言葉を本人が否定する。
「ちょっと自慢にも聞こえるかもしれないが、俺はずっと一軍にいたからね。ガーディアンズの二軍の選手とはちょっと話しかけづらいところがあってね」
あまり触れられたくないのか、「まあ、それは置いておいて」と顎鬚の投手は言葉をつむぐ。
「えっと、赤津康子（あかつやすこ）ちゃんだったっけ？今日君は２回１安打無四球２

三振しただろう?高卒一年目でしかも女の子。すごいとしか言いようがないよ」
それに比べて、と君先は自嘲する。
「俺なんて一軍で逆転負けを許しまくって二軍に降格。二軍で何試合か登板させてもらって今日始めて三振を奪ったポンコツ……。今の時点では君の方がプロとしては上だ」
「あ、ありがとうございます!」
顔を綻ばせながら頭を下げる弥子。名前は間違えているが、一軍で活躍している人に認められたのは嬉しかった。
「しかもその三振も逆球のとんでもないクソボールだったけどな」
「うっ!」
それを聞いて康友がうずくまる。その逆球のとんでもないクソボールを三振したのは彼だったからだ。
すまない、悪気はなかったんだと一言添えてから君先は震える右手を見る。
(彼、有賀草悟君に打たれて以降2ストライクを取ってから彼の残像が見えるようになり……結果ボールが甘くなる俺からすれば、最初に奪った三振と同じくらい嬉しかったな)
「あぁ、惜しいな草悟」
康友の声に君先はふと我に返る。
康友の視線をたどると、そこにはファントムズの右翼手、桜木傾子のレーザービームのような送球にアウトになった草悟が映っていた。
「あの草悟をアウトに出来るなんて。やっぱりプロは凄いなぁ」
残念とも感心とも取れる顔で、弥子は思ったことを口にした。
君先もアウトになってベンチに戻っていく草悟を様々な感情が篭った視線で見ていた。
(有賀草悟。一軍という強者がウジャウジャいる環境を生き抜いた俺が生まれて初めてルーキーで恐れを抱いた男。コイツの存在が俺に恐怖を刻み付けた。ガーディアンズで勝利の方程式の一人として数えられた俺が、だ。……本当に野球は怖い)
「でも……」

と、顎鬚の投手は自分にしか聞こえない大きさの声を漏らし、心の中で続ける。
（おかげで自分を見つめなおすきっかけになった。どうやったらお前と言う未知の怪物の幻想から抜け出し、今の俺を越えられるか）
「そしてお前はここで終わる人間じゃないだろう、有賀草悟」
楽しそうに草悟を見る君先を、陽子は一瞬だけ見て、テレビに視線を戻した。

▪★

ファントムズ監督、山元は考えていた。
試合は４―３。桜木の好プレイで１アウト３塁が２アウトランナーなしに変わった。しかし依然として先発の大塚の投球に一抹の不安を感じずにはいられなかった。
（ファントムズは投手陣が不安。それは先発に限らず中継ぎも……）
しかし今の山元には大塚はもう無理と見えた。野球は流れが大きく左右するスポーツである。ここで逆転されれば流れがスイーツにいく。
そしてこの試合は首位ポセイドンの結果次第ではファントムズが首位に立つことが出来る。仮にポセイドンが勝ったとしてもポセイドンに「負けたら首位陥落」というプレッシャーをかけ続けられる。
一度手に入れた流れを相手に渡すわけにはいかない。
そう考えた山元は投手コーチに声をかけた。
「冠木田（かぶきた）に準備させろ」

▪★

『選手の交代をお知らせいたします。ピッチャー大塚に代わりまして、冠木田。背番号４０』。
選手交代のアナウンスに球場がざわつく。
冠木田啓次郎（かぶきたけいじろう）。
先発以上に整備されていないファントムズの中継ぎ投手で唯一期待が出来る右のワンポイント投手である。一度使ってしまえば二度

と使えない切り札的なものなので、試合終盤のここぞと言う場面で登板することが多い。５回でかつ１点リード。ファントムズ打撃陣の攻撃力を考えれば逆転されても再度逆転する可能性もある場面で切り札を使う。そのことに誰もが驚きを隠せなかった。

▪★

（冠木田か……）

打席に立つ巨乳の強打者はかつてのチームメイトだった中継ぎ投手の特徴を思いだす。

（冠木田啓次郎。ファントムズで唯一と言えるほど期待が出来る中継ぎ投手。ただし左には滅法弱いから右のワンポイントリリーフ限定。ストレートは私の知る限り最高速度１４８ｋｍ。遅くはないが１５０ｋｍを超える投手が現れる現在では決して速いとはいえない。変化球はスライダーのみ。ただスライダーは縦・横・斜めに変化するからやっかい。しかもストレートとスライダーは同じ腕の振りだから狙い球が絞りづらい……どれに狙いを絞るか、だ）

相手投手が変わったことで初回の敬遠から考えを切り替えることに成功した中宮寺はバットを短く持った。

（…おのれ、監督）

短くバットを持つ元同僚の姿に直衛は怒りを覚えた。

直衛が初回に敬遠させた理由。それは中宮寺が打つからではなく、自分に対抗意識を持っている戦友に冷静さを奪うためだった。だからこそ初回の隠し球に気づかずアウトになり、二打席目もムキになって完全なボールを打ってフライになった。

そして投手が、実力がありながらゴマすりで監督やコーチに取り入った、実力でレギュラーを獲得してきた中宮寺がファントムズから嫌っていた冠木田に交代したことで、中宮寺が自分に抱いていた疑心暗鬼からの怒りが『冠木田を倒す』という試合に集中する怒りに塗り変えられた。

コンパクトに振ってもホームランにするだけの力を持っていることを直衛は知っている。

（…ここは監督の采配に苛立つよりも、中宮寺を抑えることを考えろ、

直衛景勝！）
目の前の勝負に集中するべく直衛はストライクゾーンにミットを構える。かつての戦友が考えているのは出塁すること。ボールならば確実に見逃すと考えたからだ。
冠木田はボールを直衛のミットめがけて投げ込む。
１４７㎞のストレート。だが構えた外角低めとは大きく外れるほぼど真ん中の真ん中低め。
球自体は悪くないが甘くなったその球を中宮寺は打った。
弾丸のような打球は二塁手の影沼の正面。
この回ファントムズは2点を取られて1点差に詰め寄られるものの4―3と逆転を許さなかった。
「…ん」
ふとなお絵はかつての戦友を見る。
わずかだが顔をしかめ、左手をさりげなく押さえている。
「…中宮寺、くっ」
異変に気づいた直衛は何かを言おうとしたが、その気持ちを抑えて自分のベンチに戻った。

▪★

6回表。
「クッ……」
守備位置につく中宮寺は顔をしかめる。中指に激痛が走る。
しかし中宮寺は無理やり笑みを浮かべる。ここで痛みを見せれば交代させられると思ったからだ。
（このまま交代するわけにはいかない。このまま交代すれば直衛の思い通りになってしまう）
とボールが来る。簡単なイージーフライ。グラブを構える。
（よし……ッ!?）
再び顔をしかめる。グラブにボールを収めた瞬間中指に激痛が走ったからだ。激痛で収めたはずのボールがグラブから零れ落ちる。
が、右手で間一髪拾いなおす。

この回は三者凡退で終わった。

▪★

「中宮寺」

ベンチに戻った四番を任された女性に、美空が声をかけてくる。

（もしかして、怪我に気づいて……交代を？）

身構える中宮寺に美空は口を開く。

「もしつまらないミスをしたら、すぐに変えるわよ」

「え？……あ、はい！」

そう言うと女性監督は自分の定位置に戻っていった。

左手を負傷した四番は悟る。美空が左手の故障に気づいている。その上で変わりたくない自分の気持ちを察してあえて厳しい言葉を投げかけたということを。

▪★

試合は両軍ともに塁に走者を出しながらも後一本が出ず８回裏まで進む。そして試合が進む。８回表に成田の後を継いだ岡本悦に変わり代打数合瀬（かずあわせ）が出塁すると代走に切り札、新城護が送られる。

一番に戻って草悟がピッチャー強襲の内野安打でノーアウト２塁１塁の形を作る。しかし二番杉井、三番隠九条は三振に終わり２アウト２塁１塁になってしまう。

打席には四番中宮寺。顔は冷静を保っているが、呼吸は痛みに耐えるため乱れ、わずかに脂汗が流れているのをファントムズの正捕手は見逃さない。

タイムを取って投手の元へ行くと、他の内野陣も集まった。

「…いいか。中宮寺にはコースは考えず、全力のストレートを投げろ」

その言葉に投手はもちろん他の内野手も驚愕を顕わにする。

「危危。あ、あの、直衛さん。お言葉ながら。小日向はストレートは速いですが絶対というほど速くは。それに相手はファントムズのクリーンナップを打っていた優奈子先輩。とてもじゃありませんが小日向のストレートは――」

「…奴は怪我をしている。今のあいつでは痛みで小日向の球威に勝てない」

二塁手の影沼の言葉を直衛は遮り、言った。
かつて仲間だった人間が怪我を負っているのを知りながら、その怪我をつく。その非情さに直衛以外の全員が固まる。
その気持ちがわかる正捕手は続ける。
「…俺達はプロだ。プロは勝たなければならない。相手が誰であろうと、どんな状態であろうと……勝つためなら相手の弱いところをつく。俺の言っていることは間違っているか？」
「「「「……」」」」
投手も内野手も言えなかった。自分達が目指すのは優勝。この一戦は首位ポセイドン次第では首位に立つことも出来る大事な一戦。落とすわけにはいかなかった。
「…小日向。心を鬼にしろ」
大柄な身体と厳つい顔に似合わず、敵にも同情してしまう優しい投手にそういい残し、直衛は定位置に戻った。
「……！」
心を鬼にしろ。その言葉に従って心優しき投手はストライクゾーンにボールを投げ込む。バシンッ！
ボールは真後ろのネットにぶつかり、地面に落ちていく。
審判から新しいボールを渡され、小日向はボールを投げる。
バシンッ！
今度はサード方面のファールゾーンに転がる。
その後も小日向はストライクゾーンにボールを投げ続けた。そのたびに中宮寺はボールをカットしていく。そして九球目、ついに異変が起こる。
カランッ
九回目のファールを打った直後、中宮寺がバットを落としたのだ。すぐに拾ってバットを構える中宮寺だが、その顔は青ざめ、ポタッと脂汗がテレビからもわかるほど浮き出ていた。
（…小日向。トドメはここだ）
直衛は内角高めのボールゾーンにミットを構える。球種はストレート。だが小日向は首を横に振った。

（…小日向！）
理由は見当ついた。かつての仲間であり尊敬する先輩だった中宮寺に、これ以上苦しめる投球を心優しい投手は出来なくなったのだ。
顔面蒼白の尊敬する先輩選手が打席に立つ姿に耐えられなくなっていた。
直衛がここに投げ込めとジェスチャーを送るが、投手は首を縦に振ろうとはしない。
小日向が泣けられないことを悟った直衛はミットを外角低めに構える。球種はカーブ。
これまで投げた球は全てストレート。今度もストレートだと読んでいると思っての采配だった。
首を縦に振った小日向はボールを放つ。しかしざわついた心では制球が定まらなかったのか、緩く大きく曲がるカーブは真ん中やや高めに来た。
▪★
（チャンス……ッ!?）
中宮寺は甘く入った緩いカーブに照準を合わせ狙い打とうとする。しかし左手に激痛が走る。バットを握る手が緩み、目の前が歪みボールが見えなくなる。
（まずい、意識が……）
激痛に意識が飛びそうになる。
倒れてしまいたい。
全てを投げ出したい気持ちになった、その時だった。
『…そう思う限りお前はその程度の選手だ！一生お前は俺には勝てん！』
『もしつまらないミスをしたら、すぐに変えるわよ』
ＦＡでファントムズを離れるきっかけとなった直衛の言葉、自分の負傷を知りながらグラウンドに送り出した美空の言葉が頭をよぎる。

そして思い出す。自分がなぜファントムズからスイーツにユニフォームを変え、ここに立っているのかを。
(私は、直江景勝を超えるためにファントムズを出たんだ。そして勝負を預かる立場でありながら美空監督は私の心中を察してグラウンドに送り出してくれた。……なのに私がここで倒れたら、私は直衛に勝てない！美空監督、そして私を受けいれてくれたスイーツを裏切ることになるッ!!)
それだけは許されない。痛みを気力でねじ伏せ、力が入らない左手に無理やり力を入れて

カキィィンンンッッッ!!

全力で振りぬいた。
打球はみるみるうちに上昇。大きな弧を描き、バックスクリーンに飛び込んだ。
逆転のスリーラン。
新城、草悟が本塁を踏んで打った中宮寺が最後の気力を振り絞り最後に踏む。
4—6。
直衛を見返すために痛みに耐えた女の意地の一打。
本塁を踏み、ベンチに戻ろうとする中宮寺に、直衛は呟いた。
「…見事だ。中宮寺」
「……ありがとう」
顔を隠すように帽子を被りなおすと、逆転打を放った女性選手はベンチに戻った。
「よくやったわ、中宮寺」
監督が自分を出迎える姿を見た瞬間、激痛に耐えた殊勲の四番打者は監督に身体を預ける形で気を失った。
▪★
『スイーツ、選手の交代、及び守備の変更をお知らせいたします。代走に入りました新城がレフトに入り、四番中宮寺に代わりまして、ピッ

チャー響』
９回表。
四番に抑えの響梅太郎が入り、九番のところに代走で出た新城が中宮寺のポジションだった左翼手に入った。
ファントムズの攻撃は八番で投手から。山元は代打を送り込むがファーストフライで１アウト。次の打者はス・リーグ最低打率の桜木。普通ならここでも代打を送るはずだが山元はそのまま桜木を立たせた。
その期待に応えるように魅惑の女性はショートへの内野安打で出塁し打者は一番豊？。普段なら考えなしにうちにいく一番打者は、自分も生きようとしつつ、かつバントのように当てに行くゴロを放つ。二塁に向かう桜木はアウトに出来ないと判断した隠九条は一塁に送球、判定はアウト。
９回表４―６。２アウト２塁。
二点を追うファントムズだが最後になるかもしれない二番、影沼の目には諦念の色はなかった。後ろの不枝木に、そして直衛さんに回せば。そんなことが見て取れる目をしていた。
そして初球。球威があるとはいえ、多少甘くなった１５５ｋｍのストレートを影沼は引っ張った。
打球は飛びついた三塁隠九条の脇を通り抜け、レフトに向かおうとするところを草悟が飛びつき、一塁に投げた。
（よし！）
二塁ベースよりの２，３塁線上にいた桜木は駆け出し三塁ベースを回った。草悟の体制ではいくら肩が強いといっても足の速い影沼腐深を刺せることが出来ず、自分の脚なら一塁から本塁に投げられてもぎりぎりセーフになると踏んだからだ。
（え？）
三塁を回ったところで桜木は異変に気づく。一塁手岡本のグラブにボールが収まっていなかったからだ。
（もしや……）
魅惑の女性は後ろを振り返る。そこには鬼気迫る顔で白球を持っ

た草悟がすぐそこまで迫っていた。
白球を握った手は魅惑の女性の谷間に当てられた。
追いつこうと焦った自分の愚かさと、守備が苦手だと思っていたルーキーに一塁に投げたという演技にだまされてしまった力量の差に、サキュバスと称される女性は悔しさに顔を覆い、その場に崩れ落ちた。
「よっしゃあっ！」
勝利の咆哮を挙げる草悟。しかし彼は知らなかった。アウトにした女性が多くの男性ファンの心をわしづかみする人気選手であることを。
そしてその選手が泣いている理由が自分が胸にタッチしたことであると球場にいる人間に思われていたことを。
「有賀、お前何しとんじゃ！」「このうらやま、じゃなくてこのドスケベ野郎！」、「傾子様に何セクハラしてんだよ！」
ホームであるはずの球場から草悟に向けてゴミが投げつけられる。
それだけでは終わらなかった。

「貴様、よくも桜木さんを泣かせたな!!」、「俺達の女神を怪我しやがって!!」、「打ち殺してやるロボッ!!」、「仲間である俺ですらしていないことをしやがって!!」

ファントムズの選手が草悟に向かって襲い掛かってきたのだ。
そして。
「桜木さんのおっぱいに触りやがって！てめぇ、何美味しいところ持っていってるんだよ！死ねや！（草悟を守れ！）」
「愛人にしたいプロ野球選手一位の桜木さんのおっぱいに触りやがって！貴様だけは八つ裂きにさらに八つ裂きにしてくれるわ！（草悟には指一本触れさせんぞ！）
「本音と建前が逆だ、このむっつりスケベども！」
「「ギャアアアアアアアアアアッッッ!!」」
殺意をむき出しに襲い掛かろうとした隠九条と杉井を、どこから取

り出したのか入江がスタンガンを押し当て気絶させた。
　こうして乱闘未遂事件はあったものの、最後の三連戦の初戦はスイーツがものにした。
▪★
「くく、ふ、ふはははははっ！」
　嫉妬に燃える両軍の選手から逃げ惑う草悟を見ながら君先は大笑いした。ちなみに康友は嫉妬からテレビを壊そうとしたので弥子と日野に殴られ気絶させられた。
「さすがは有賀君だ」
「さすが？何がですか？」
　キョトンした顔で弥子が尋ねる。
「いやね。昔、白石勝巳っていうカープの選手が有賀君のようなことをしたのをあったことを思い出してね」
　君先が言う昔は君先が生まれるよりも前の１９５２年の広島カープ対読売ジャイアンツの試合だった。
　場所は北海道夕張市。
　カープが７―４でリードするも最終回にジャイアンツが粘り１点差に。
　２アウト２塁１塁のピンチに迎えるのは打撃の神様と呼ばれ、後にプロ野球史上唯一の９年連続セ・リーグ優勝に導いた川上哲治。
　三遊間を抜ける川上のヒット性の当たりを、白石は三遊間の深い所で掴む。
　この時タイミング的に間に合わないと思った白石は一塁へ偽投というフェイントをしかけた。それに騙され本塁へ向かった三塁走者を自ら三塁に駆け込みタッチプレーで仕留めゲームセットとなった。
　当時のラジオの実況は「川上打った！　ヒット！　ヒット！　ああ広島勝ちました！」と絶叫。聴衆は何が起こったか分からなかったという。
「まさか、文献でしか見たことがなかった伝説のプレイの再来を見れるとはね」
（ま、そんなこと大昔に起こったプレイなど知らないと思うが。それ

をとっさに思いつけるなんて、有賀草悟……底が見えない男だ！）
自分にトラウマを植え付けた少年の伝説級のプレイに心を躍らせつつも、その少年の打倒に心を燃やす君先。
「へぇ、そんなことを草悟が」
「……」
感心する弥子。嬉しそうに語る君先を日野陽子は静かに見ていた。
第２２回戦対ファントムズ戦
勝利投手：岡本悦
敗戦投手：小日向
本塁打：不枝木七八（５回満塁打）、中宮寺（８回逆転打）

古山博光の憂鬱その２～完結・古山博光の憂鬱

～古山博光の憂鬱その２～

「なあなあ博光。魔球を考えたから受けてくれ！」

「……投げてみろ」

古山は防具をつけて腰を落とす。

「いくぞ！」

「ん？」

古山は違和感に気づく。

（こいつは右投げ右打ち。なのに右手につける左利き用のグローブをつけている……まさか！）

古山の予想通りだった。

西河原は振りかぶって、グローブでボールを持ったまま、投げた。

ボールは転々と転がりホームベース手前で止まる。

「どうだ！このようにグローブで投げることで手で投げることの出来ない動きが加わり――」

「ボーク！反則球!!」

西河原の説明は烈火のごとく怒る古山の怒声にかき消された。

～古山博光の憂鬱その３～

「なあ博光！俺が作った魔球、見てくれ！」

スイーツの正捕手、古山博光（こやまひろみつ）は残念そうな顔で再び同じチームで戦うことになった相棒・西河原善一郎（にしがわらぜんいちろう）を見ていた。

「……」

見てくれと言われ、古山は防具をはめて腰を落とす。

その後西河原はバッターボックスにバットを出したマネキンを置く。

「じゃあ行くぞ！」

振りかぶった西河原が投げる。投げたボールはいたって普通のストレート、のように見えた。

バーンッ！

ボールはバットを伝ってマネキンの頭部を破壊した。
「どうだ、博光！この魔球直角は?!」
（アストロ球団の殺人L字投法じゃないか！）
というツッコミを入れたい気持ちを我慢にして、古山は総評をする。
「善一郎。お前がさっき投げた魔球直角。あれは正直すごい。あんな軌道を描く球を俺は診たことが無い」
「だろ?」
嬉しそうにはしゃぐ相棒に、古山はピシャリと言った。
「でもこれ、打ったバッターが大怪我負うよな?お前は相手打者の選手生命を、最悪命を奪ってまで魔球直角を投げたいか?」
「……」
その一言に、青ざめた顔で固まった。
これ以降、西河原善一郎が魔球直角を投げることはなかった。

～完結・古山博光の憂鬱～

「なあ、博光」
「却下だ！」
元ファントムズの第三捕手で現スイーツの正捕手、古山博光は高校時代バッテリーを組んでいた男の言葉を言う前から否定した。
「な、なんで……」
「どうせまた魔球だろう?前々から言っているだろう。地道にやれ！向こうを見てみろ」
博光が指を刺す。そこでは自分達より若い選手が一生懸命投球練習を続けていた。
「投手ならば自分だけのオリジナルボールを投げてみたいと思う気持ちは良くわかる。だがそんな物は一部の人間しか出来ない。冷泉さんの暴投と言える高さから急角度で落ちる〝死神の鎌〟も日野さんと血が滲む努力を数年やってやっと出来たものだと聞いている。お前みたいなプロで投げられる程度の才能と無駄な努力をしている人間に出来るもんじゃない！」

「無駄な努力とはなんだ！数多くの野球漫画を読んで魔球習得の参考にしている俺に対する言葉か!!」
「それが無駄な努力だといっているんだ!!」
「あうううっ！」
どこから取り出したのか、博光は巨大ハリセンで善一郎の頭を叩く。
「いいか。魔球なんて夢物語を語る前に先発としての仕事を全うしてから考えろ！ただでさえ中継ぎに負担をかけているんだから、最小失点で切り抜けて後続の投手にバトンタッチするくらいにはなれ。というわけでいいから投球練習をするぞ」
そういうと古山は西河原に新品の滑り止めのロージンバックを手渡す。
「くそっ、あんなに言わなくたっていいじゃん！」
感情に任せて西河原はロージンバックを力任せに叩く。
「うぐっ!?ゲホッゲホッ!?」
ロージンバックの粉が大量に舞い、咳き込む西河原。
「大丈夫か？」
腰を落とす博光が心配そうにホームベースから声をあげる。
「ああ、大丈夫だ。じゃあストレート投げるぞ！」
大きく上を上げた手を振り下ろす瞬間、
「バッ……クシキュンッッッ!!」
強烈なクシャミと共に投げ出された球は

バシシシィィィィィンンンッッッ!!!!

唸りを上げてキャッチャーミットに収まった。
「ッ!?――――」
古山は言葉を失うしかなかった。１６０ｋｍ近いストレートを投げる無頼、超・王臣を初め、多くの投手のボールを受け止めたことのある博光ですら想像につかない彼らのストレートを上回るストレートだった。

こうして西河原善一郎ただ一人の魔球が完成した。

最後の亡霊三連戦第２３回戦

監督室。

プロ野球界初の女性選手にしてスイーツ六代目監督、美空星蘭は一人考えていた。

「どうしたものか……」

左中指を脱臼した中宮寺優奈子は登録抹消させず代打で起用。四番に三番起用の隠九条憂男を入れ、空いた三番と左翼手に守備に難があるものの小柄な体格に似合わず力のある代打の切り札、東鬼龍夜が入ることが決まった。

中宮寺の穴が埋まった、その矢先のことだった。

美空の耳に中継ぎ投手、岡本悦がインフルエンザを発症したという情報が入ったのは。

調子を落としてきたとはいえワンポイントリリーフとして勝利の方程式に入ってきた変則女性右腕。この時期にベテラン左腕の久石譲二に続き数少ない計算できる投手の離脱は大打撃と言えた。

スイーツ先発陣は6回以上を安心して任せられるのは完投能力のある超・王臣しかおらず、どうしても中継ぎに負担がかかる。

勝利の方程式として7回を任されていたベテラン左腕、久石譲二はグリフォンズ戦で負傷。

急成長した隠九条憂男や新人王候補と聞かれるようになった有賀草悟の活躍もあり、スイーツの得点力は大幅に増加。それ故に今まで落としてきた試合を勝ち試合まで持ち込めるようになった。故に勝利の方程式の負担を減らす敗戦処理投手の出番が激減。実力ある中継ぎの負担が増大した。

8回に魔球〝死神の鎌〟を会得した冷泉冬狐、9回に守護神の響梅太郎と決めている。二人を動かすことはハイリスクを伴う。

久石の代役として岡本悦が起用されることが多くなった。

もちろん美空も彼女の体調のことも考えて起用はしてきたつもりだった。しかし接戦が増え、落とせない試合が増えてしまった今シーズン。どうしても変則女性右腕の登板過多を止めることは出来な

かった。
「冷泉と響を引っ張るか……いや、ただでさえ二人も連投が多い。ここで片方でも離脱されたら……」
コンコン
その時ドアがノックされた。
「……おぉ、戻ったのか!?」
入ってきた男の姿に美空は顔をほころばせた。
▪★
ファントムズ最後の三連戦の二戦目。
スイーツの先発は成田、超・王臣に次ぐ成績を収める西河原善一郎。ファントムズは角が生えているような髪型に特徴的な八重歯の荒れ球投手、ルビデ・モーデン。
ファントムズとすれば首位ポセイドンと3位コスモスターズが勝ったため首位1．5ゲーム差、3位だったコスモスターズが同率2位。
首位ポセイドンに差はつけられたもののまだ追いつける段階。
スイーツとしても優勝するには勝ち続けなければならない。優勝を諦めていない両軍にとって今日もまた落とすことの出来ない試合と言えた。
1回表。
ファントムズの攻撃。
西河原は一番打者・豊?凶死浪にストレートの四球。二番・影沼腐深の犠打で1アウト2塁のピンチを招く。その後三番打者、不枝木七八はショートゴロ。四番の直衛景勝にはレフト前ヒットで2アウト3塁1塁のピンチを招くが五番唐沢繰夫を三振に切ってこの回を無失点でしのぐ。
1回裏。
一番草悟はボールを見極め四球で歩くも二番杉井が荒れ球にボール球に手を出してしまいゲッツー。新三番の東鬼がフェンス直撃の2塁打を放つも、四番に座ることになった隠九条がピッチャーフライで得点することはできなかった。

その後両軍は残塁の山を築き5回表。ついに試合が動く。
西河原はファントムズ打線に捕まりつつも、多種多様の変化球と相手の裏をかく古山のリードで何とか４回まで無失点で切り抜けていた。
だが打率一割台と規定打率到達者最低の九番桜木傾子（さくらぎけいこ）を歩かせてしまうと、盗塁と一番豊？のツーベースヒットで０―１。その後ヒットと四球でノーアウト満塁。
打席にはス・リーグ打率４位、打点８７とトップを走るファントムズの４番、直衛を迎える。
５、６回で崩れる西河原と昨年打率と打点の二冠王を取ったのは伊達ではない成績を残す直衛。
美空は投手交代を告げようとベンチから出て、正捕手の古山博光と目が合った。
「……」
「……」
古山の目は「今日の善一郎なら絶対に抑えられます」とあった。
長年スイーツ投手陣をリードしてきた元正捕手・篠原は昨年人的補償で入った古山を自らの後継者と評価した。その言葉通り古山は投手をリードし、新規加入にも関わらずどの捕手よりも信頼を勝ち取り正捕手の座を射止めた。
そんな古山が軽はずみなことを言うはずがない。
そう思った美空は何も言わずベンチに戻って行った。
そんな事情を知らないスイーツファンは「何で変えないんだよ！」と怒声を発し、ファントムズファンからは「変えられなくて良かった」という安堵と「変えても無駄」という嘲笑。
対して直衛は表情を崩さず目の前の投手だけを見ている。
（相変わらず凄いな、この人は）
明鏡止水という言葉が似合う超えることの出来なかった先輩捕手とファンの反応を聞きながら、古山はタイムを要求するとベンチにグラブを取りに行って戻った。
グラブを構える。要求したのはあろうことかど真ん中だった。

（善一郎、見せてやれ。お前の力を！）
古山はサインを出す。コクリと頷いた西河原はロージンバックをバンバンッ！と叩いていく。西河原の周りに即席の白い霧が現れる。
白い霧が晴れない中、西河原は大きく腕を振り上げ、
「バックションッッッ!!」
投げた。
・
・
バシイイイイイイイイイイイイイイイインンンンンッッッ!!!!
今まで誰も聞いたことのない剛速球がミットに収まる音に、誰もが言葉を失った。
西河原のバックで守るスイーツ選手も、塁上のファントムズ選手も、両軍のベンチも。そして球場に集まった数万人のファンも。
カランッ
誰も見たことのない超剛速球に冷や汗を流した直衛が驚きのあまり力が抜けてバットが地面に落ちる。そんな小さな音が球場で聞こえるほどの静寂だった。
「…、……た、タイム！」
直衛はバッターボックスから飛び出すように出ると急いで素振りを行って先ほどの超剛速球を打てるように修正する。
投げたバッテリーの次に、誰よりも覚醒した直衛の素振りをする姿に、ファンは割れんばかりの声を上げる。
数度素振りを行った直衛が再びバッターボックスに入る。
古山は再びあの球を要求した。
最初同様ロージンバックの粉で即席の霧を作った西河原は再びク

シャミと共に超剛速球を放つ。
「……!?」
恐怖心を抑え込み、踏み込んで振り抜く直衛だがすでにボールはミットに収められている。
完全な振り遅れだった。
再び割れんばかりの歓声を送るファンたち。
直衛はバットを短く持って構える。頭から汗が地面にポタポタ落ち、呼吸は乱れている。
それを見て古山はサインを出す。
推定時速２００㎞を超える超剛速球が来ると思った直衛は、遅球にすら見える１４０㎞のストレートに完全にタイミングが合わず空振り三振に終わった。
超剛速球を見せられたファントムズを打ち取るのは赤子の手を捻るようなものだった。
超剛速球を投げてくるかもしれないという思考に嵌(はま)ったファントムズは遅球にすら見える１４０㎞台のストレートや更に遅いチェンジアップに完全にタイミングを狂わされた。
続くファントムズの五番唐沢には超剛速球で腰を抜かした。その後チェンジアップと釣り球に手を出してしまい三振した。
超剛速球を投げてくるかもしれないという恐怖心を持つ不枝木(ふえだぎ)謎葉(なぞは)を打ち取るのは朝飯前だった。
チームの大黒柱である直衛とファントムズの安打製造機の唐沢、得点圏打率の高い不枝木謎葉。
西河原の超剛速球にノーアウト満塁からファントムズ自慢の４，５，６番の連続空振り三振。
１―０と負けていながら試合の流れは完全にスイーツに流れた。
三番から始まる５回裏は東鬼が一打席目のリプレイを見るかのようなフェンス直撃の２塁打。隠九条のショート正面のゴロを遊撃手の豊？がトンネル。ノーアウト３塁１塁で五番入江の右翼手桜木の頭を超える本塁打で１―３と逆転した。
そして６回表。

ロージンバックが巻き上げなければ超剛速球は投げてこないと読んだファントムズはすぐさま反撃を開始。七番打者、十曲(とまがり)がレフト前ヒットで出塁すると山元は八番投手モーデンに代打を送る。

超剛速球を疲労してから球威は落ち、変化球にキレがなくなったのを見逃さなかった山元はここが勝負に出た。

タッチアップが出来ると思って走った草悟を刺せる強肩と並外れた健脚で脅威の守備範囲を誇る桜木に代打を送ったのだ。

その期待に応えるかのようにファントムズ打撃陣は単発ながら三連打でノーアウト満塁を作る。

再び訪れた絶好の好機に一番打者豊?が打席に立つ。

ここで美空は立つ。審判の元に歩み寄ると投手交代を告げた。

▪★

『選手の交代をお知らせします。ピッチャー西河原に変わりまして、久石』

ウグイス嬢のアナウンスに球場に歓声が上がる。

7月に頭部に打球を受けた久石が3週間ぶりに一軍のマウンドに姿を現したのだ。

ノーアウト満塁という大ピンチにも関わらず球場はまるで試合に勝ったかのような大歓声が上がる。

久石は豊?をストライクゾーンに近いボールゾーンに投げ続け三振に切って取ると、慎重になる二番影沼を見逃しの三振に。

三番不枝木七八が負傷させたような頭強襲のライナーを間一髪で弾く。その球を草悟が見事キャッチ。2回目のノーアウト満塁をファントムズは生かすことが出来なかった。

5回0／3、1失点で降板した西河原の後を引き継いだ久石は7回も一人の走者も許さず8回を任された冷泉にバトンを手渡した。その間にスイーツ打撃陣は本塁打を含む6打点を上げて1—9。最後は敗戦処理以上勝利の方程式以下の中継ぎ投手、古賀辰実(こがたつみ)が直衛のツーランホームランで2点を奪われるもそれ以上の失点を許さず3—9でファントムズを下した。

幕間　怨恨のフェニックス

深夜。ファントムズの正捕手にして打線の中核を担う男、直衛景勝(なおえかげかつ)はある人物の家を訪れていた。他の選手はホテルだが訪れた人物はスイーツの本拠地がある所に実家があったからだ。

「…こんばんは。火那子(ひなこ)さん」

「あ、直衛さん。夜遅くに」

若い女性が訪れた頭を下げる。野球に少しでも興味がある人間なら直衛を知らないわけがない。が、直衛が来ることはよくあることなのだろう。火那子と呼ばれた若い女性は「姉でしたら奥の練習場にいます」と案内する。

直衛は訪れた家の奥にある完全密室の投球練習場に足を運ぶ。

直衛は少し空いた扉の隙間から中を覗く。

視線の先には投手が試合で投げると同じ距離に3体の実寸大のパネルが置かれている。その人形に燃えるように赤に近い茶髪の女性投手が対峙する。

女性投手はパネルを睨みつける。

「くたばれや！美空を慕ってファントムズという素晴らしい球団から自分の意思で出て行った裏切り胸デカ女!!」

女性投手の右手から投げられた渾身のストレートは中宮寺優奈子を模したパネルの豊満な胸部分を破壊する。

「次はお前だ！美空のいう事に従って私を降板させやがって、毛利!!」

そう言って吐き捨てると今度は前監督の毛利和章(もうりかずあき)の股間部分に伝家の宝刀、ナックルボールを直撃させる。

そして最後に残ったパネルを見て、女性投手は邪悪な笑みを浮かべた後、他の二人とは比べ物にならないほどの憎悪を残った最後のパネルに向けた。

「ラスト3球。なぶり殺しにしてやる！」

女性投手は大きく腕を振り上げる。

「何で私を裏切った!?美空星蘭(みそらせいらん)!!」▪

ボールは美空パネルの腹部を破壊する。

「そんなに私が完全試合するのが気に喰わなかったのか!?」
右手から放たれたストレートが心臓部分をえぐる。
「死ね！死んで償えええええっ!!」
彼女のウイニングショットのナックルが大きく揺れながら美空の顔部分を粉々に破壊した。
「ふう。絶好調ね。この儀式が成功した翌日は無敗どころか全部完封しているのよねぇ、私」
女性投手は邪悪な笑みを浮かべる。
「にっくき美空星蘭め。血祭りだぁ。お前を慕った私にした仕打ち、絶対に後悔させてやる……ふふふ、フハハハハッハハハハッッッ!!」
高笑いをする女性投手に直衛が口を開いた。
「…相変わらず凄いコントロールだな。鳳(おおとり)」
直衛の言葉に鳳と呼ばれた女性投手。かつてスイーツのエースと呼ばれＦＡ移籍した現在はファントムズのエースとして先発陣の主軸として活躍する鳳(おおとり) 火呼子(ひょこ)が振り返る。
「直衛、どうして？」
「…お前が呼んだんだろう？」
「ああ、そうだったわね」
火呼子は直衛に自宅の鍵を渡して先にリビングで待っているように言うと、シャワーを浴びて着替えをした。

▪★

十分後。
二人は鳳の家のリビングに来ていた。
「ごめんなさいね、儀式に気を取られて貴方との約束を忘れていたわ」
「…構わん」
直衛は儀式について聞かなかった。スイーツ戦の前に鳳が先ほどの陰湿な儀式をルーティン（手順）にしているのを知っているからだ（ちなみにファントムズがホームの場合は鳳火呼子本人の家で儀式を行っている）。そして美空を心酔するあまりコスモスターズのドラフトを拒否してまでスイーツに入団した彼女が先ほどの儀式でも言っていた完全試合未遂事件で美空を憎んでいることも。

数年前のスイーツ対ガーディアンズ戦。
９回表１―０。
８回まで鳳は一人の走者も許さず無失点で投げ続けていた。９回を打者三人で終わらせれば史上初女性投手の完全試合。誰もが完全試合に胸を弾ませた。彼女もそれを意識して準備していた。
そして、９回裏のガーディアンズの攻撃
『ピッチャーの交代をお知らせします。ピッチャー、鳳に変わりまして。小鳥遊（たかなし）。背番号００』
突然のアナウンスに観客はもちろん、相手ベンチも騒然となった。
マウンドに上がったのは完全試合継続中の火呼子ではなく当時スイーツの抑えを任されていた投手、小鳥遊歩（たかなしあゆむ）。
どういうことだ!?と混乱する球場。それは直前美空に投手交代を告げられたスイーツのエースもだった。
あと三人を打ち取れば女性初の完全試合達成。
その偉業を達成する機会が奪われた絶望感。打たれたからという自分に原因ではなく奪われたことにスイーツのエースは呆然とした。
試合は小鳥遊が2アウトまで追い込んだが、サード隠九条のエラーで出塁したランナーでると次の打者に止めと言わんばかりのサヨナラツーランホームラン。
目の前の女性エースが呆然とするシーンを直衛はテレビで何度も見ている。
投手と捕手とポジションこそ違うものの、彼女の気持ちは理解できた。
「…で、話とは？」
感傷を置いて、直衛が切り出す。
「…」
話があると呼び出しておきながらエースは口を開かない。
ファントムズのエースは机に置いた酒を一気に飲み干した。
「…直衛。貴方はもし私が完全試合間近だけど何かしらのアクシデントで投げられなくなった時、投げさせる？」
「…ッ!?」

直衛は言葉を詰まらせた。
「…なぜそんなことを聞く？」
すぐにいつもの阿修羅のような顔に戻った直衛の疑問にエースはフフッと笑う。
「わかるでしょう。私がＦＡでスイーツを出た理由」
「……」
直衛は答えなかった。頷きもしない。だが長い沈黙が肯定を意味していた。
「私はあの女、美空星蘭に憧れてスイーツに入団した。もちろんナックルしか武器がなかった私はそれなりに辛酸を舐めたわ。でも憧れの人に教えられて私はスイーツのエースと呼ばれるほどに成長した。だから勝つことで、様々な偉業を達成することで私は恩返しをしようと考えた。でも、あの女は違った！自分が出来なかった完全試合をさせたくなくて、私に投手交代させたのよ！」
「…ッ」
直衛は何もいえなかった。口を挟むことが出来なかった。
当時テレビ観戦でその試合を見ていた直衛は捕手視点でスイーツ首脳陣が投手交代を決断した理由を推測出来たからだ。
「直衛。貴方は違うわよね？」
先ほどの恨みに満ちた瞳が今にも壊れそうなガラス細工のように変わる。
「…あ、あぁ」
頷くしかなかった。捕手の立場からすれば勝利のためならば交代を要請する場面も求められる。本来ならば「状況による」「試合を作るのが投手なら、出来ないと感じたのなら投げるのをやめさせるのが捕手の仕事だ」と言うべきだが、直衛は言うことが出来なかった。
その後二人は明日に残らない程度に酒を飲んだ。
タクシーで帰る直衛を見送るエースに、正捕手は言いたいことを言えずそのまま帰った。

最後の亡霊三連戦第２４戦前編

一回表。
マウンドに立つのはスイーツ最多勝、防御率１．９６という驚異的な成績をたたき出している新外国人投手の超（チャオ）・王臣（ワンチェン）。現在全ての投手タイトル争いに絡む、抜群の成績を残している投手である。
「ス・リーグ一と称されるファントムズ打線。相手にとって不足なし！」
台湾の英雄はキャッチャーボックスで構える古山のミットをジッと見る。
コースは甘め。それは「多少甘くなっても打たれないというお前の投球をファントムズに見せてやれ」という意思表示だった。
王臣は古山のサインに大きく頷き、腰を大きくひねる。
右腕から放たれる火の球のようなストレート。
バシンンンッッッ!!
「ストライク、バッターアウト！」
「く、ストレートに強い俺がファウルするのが精一杯とは!!」
ファントムズの斬り込み隊長、豊？凶死浪（とよしげきょうしろう）は空振り三振。
バシンンンッッッ!!
「ストライク、バッターアウト！」
「愚愚（ぐぐ）。手が出なかった……」
バントや進塁打などの小技や当てるバッティングを得意とする影沼腐深（かげぬまふみ）が手を出すことすらできない見逃し三振。
バシンンンッッッ!!
「ストライク、バッターアウト！」
「ググググッ、速すぎるだろ！」
ファントムズ最多本塁打の不枝木七八（ふえだぎしちや）は当てることすら出来なかった空振り三振。
この回。王臣は９球で三者連続三振とス・リーグ一とも称される重量打線の１，２，３番を完膚なきまでに叩き潰した。
▪★

一回裏

「……」

左打席に入るスイーツの一番打者、有賀草悟(ありがそうご)はミーティングで言われていた情報を思い出していた。。

(なんか見下すような表情を浮かべる女性、鳳火呼子(おおとりひよこ)。あの女がかつてスイーツのエースと呼ばれ、ファントムズ先発投手で唯一二桁勝利をあげる女投手。そして切り札はナックルボール)

草悟は構える。

誰もが注目する1球目。内角高めギリギリに決まったノビのあるストレートに草悟は空振りする。

「クッ……」

草悟は思わず声を漏らす。

選球眼に自信を持ち、絶対的な自信を持つバットスイングを持つ自分が完全に振り遅れたからだ。

2球目。外角低めギリギリに決まった緩いカーブに手が出ず2ストライク。そして3球目。

「くっ!」

真ん中高めのボールが急にストライクゾーン低めギリギリに左右に揺れながら落ちた。

昨年最多勝と澤村賞を獲得した鳳火呼子の伝家の宝刀、ナックルボール。

木の葉と称されるほど大きく揺れるナックルに惑わされ、草悟のバットは空を切った。

「あれが、ナックル……ッ!」

ベンチに戻りながら草悟は唇をかんだ。

▪★

右打席に入った中性的な容姿の二番打者、杉井貴士(すぎいたかし)を見ながらかつてスイーツのエースと呼ばれた女性はポツリと呟いた。

「杉井、貴方には同情するわ。自分より打てるからという理由で自分のポジションだったサードを隠九条に奪われた。そして隠九条に出来ない守備や進塁打、バントなどでチームに貢献することで自分の立

ち位置を確立させた。たとえ自分の成績が下がろうとも。その献身的な姿は嫌いじゃないわ。でも！」
鳳は腕を大きく腕を振り上げる。
「容赦はしない！」
鳳が投げたのは思わず大きくのけぞってしまう内角高めのストレート。判定はボール。
２球目。外角に来ると思った杉井はストライクゾーンに決まった内角高めのストレートに思わずバットを振ってしまいピッチャーゴロに討ち取られてしまう。
「鳳さん！勝負！」
右打席に入る入江舞名（いりえまな）を睨みつける。かつての仲間とはいえ今は敵同士と考えている入江は気にせずバットを構える。
「入江。アンタは良い子よね。裏では何を考えているのかわからないけど」
ファントムズのエースは投げる。１４５ｋｍの少し外れる外角低めのストレート。入江はそれを見逃す。
（そういえばこの女は私のナックルを特に苦にはしてなかったわね。あくまでスイーツ時代の、だけど。……そんなに変化球を待っているならお望みどおり投げてあげようじゃないの）
変化球に強いことを思い出した鳳は変化球のサインを出した直衛にニッコリとした笑みを浮かべながら投げる。ボールは真っ直ぐ先ほどより甘い外角低め。チャンスと思った入江はそれにタイミングを合わせてバットを振る。
クリーンヒット！
打者がそう思った瞬間、ボールはキュッとボール半個外角低めに落ちた。
鳳が投げたのがストレートではなく小さく変化するスライダーだと気づいた入江だったがすでに遅かった。打球は一塁手の不枝木謎葉の正面。半老半女の一塁手はそのままベースを踏み、ファントムズ同様スイーツも三者凡退に終わった。
▪★

二回表。
打席に立つのはファントムズの攻守の要、直衛景勝(なおえかげかつ)。
コーナーを突きながら3球で2ストライクに追い込んだ王臣&古山のバッテリーだったが4球目、ボールになっても構わないコースのインコース高めのシュートを、直衛は持ち前のテクニックとパワーで三塁手隠九条の頭を越えるところに運ぶ。すかさずフォローに入った草悟だったが足が決して速くない直衛でも悠々間に合う内野安打。
その後五番唐沢繰夫(からさわくりお)が内側に切れ込むシュートに手を出し三遊間のゴロ。だが打球は草悟のグラブに。しかし併殺を焦った草悟はボールを握りそこない何処にも投げられず。
2アウトランナーなしがノーアウト2塁1塁で迎える打者は直衛に次ぐ得点圏打率の六番不枝木謎葉(ふえだぎなぞは)。初球。外角低めに要求した古山だったが真ん中に入ってしまう。ゴロを狙うため低めに来ると読んでいた不枝木謎葉はその球を強打。球威に押されたものの風が追い風だったこともありセンター最奥まで飛んだ。中翼手の入江のダイビングキャッチによってアウトになったものの、直衛がタッチアップで3塁に。
1アウト3塁1塁。迎えるのは一発も秘めている七番十曲躯。ここで古山はまだ投げていないスライダーを要求。センター前に抜けそうかという打球を二塁手杉井が飛び込む好プレイからのグラブトス。二塁ベースに入った遊撃手草悟から一塁手岡本純一に渡りゲッツー。
「ふっ、さすがはメジャーで最高4年30億円の値をつけられた男だけあるわね。あの美空に慕ってスイーツに来たのでなければ!」
一瞬王臣に対して鬼のような表情を向けたファントムズのエースだったが、それ以上はせず投球準備をするためベンチに戻った。

★

二回裏。
昨日に引き続き中宮寺優奈子(ちゅうぐうじゆなこ)の代わりに四番に入った隠九条憂男(いんくじょうゆお)が打席に立つ。
「隠九条か」

直衛のサインに頷いたエースは腕を振りかぶる。
(体力の衰えからクリーンナップから外れた純さん（一塁手、岡本純一）の代わりに四番に入ったあの女、ファントムズの裏切り者の中宮寺優奈子が来なければ四番を任せてもいいと思えるほど急成長を遂げた油断ならない男)。
内角低めに来たボールをカットする隠九条。二つボールが続いてからの四球目。
外角の真ん中付近に来てしまった球を、
カッギィィィンッ!!
隠九条は打った。打球は伸びていき、ポールの横を通過した。あと10cmほどずれていたらポールに当たりホームランになっていた。
「うわ～、ちょっとでも気のない球を投げたら持っていくとは……流石というべきかしら」
額に浮かぶ汗をポケットのハンカチで拭う。
そして、
(本気で投げてあげようかしら)
直衛に向けて笑う。
正捕手は小さくため息をつくと彼女の望む変化球のサインを出す。
(これで終わりよ、隠九条!)
2ボール2ストライクになった五球目。遅いストレートと思って振りにいこうとする隠九条はコンマ数秒の世界で異変に気づく。軌道がストレートではなかったのだ。
遅いストレートと思っていた球は分身したと思うほど激しく左右に揺れる。
「……ッ!」
その動きに迷わされ、隠九条のバットは見事なまでに空を切った。
球速を表す電光掲示板を見て、バッテリー以外の人間は言葉を失った。
123km。
通常は100kmを超えないと言われるナックル。そのナックルを、120kmを超える速さで投げてきたのだ。

高速ナックル。隠九条がまだ鳳と同じチームにいた頃には投げていなかったボールだった。
バッターボックスから退く隠九条の変わりに五番東鬼（しのぎ）が入るが、高速ナックルの幻影がちらつくこの場面では子どもの手をひねるようなものだった。
鳳＆直衛バッテリーは東鬼を三球三振。追い込まれる前に打とうと強引に打ちに来た六番白藤をサードフライに討ち取った。

★

三回表。
八番投手鳳から九番桜木（さくらぎ）、一番に戻って豊繁の打順を、王臣＆古山のバッテリーは三者凡退に抑え、三回裏のスイーツの攻撃に変わる。
王臣に変わってマウンドに立つ鳳は打席に立つ男、七番岡本純一を見る。
（まさか、私が紅白戦以外で純さんと戦うことになるなんてね）
これまでスイーツと何度も戦った鳳だったが、その時はまだ正一塁手の八千代智那（やちよともな）が離脱しておらず代打でも対戦がなかった。故にこれが初対戦だった。
（純さんには色々助けられたわね。試合でピンチを作った時、現役を引退された篠（しの）さん（元スイーツ正捕手、篠原習志（しのはらしゅうじ））の的確だけどキツイ忠告を、純さんが冗談を言って和らげてくれたっけ）
直衛のサインに頷いたファントムズのエースは昔を思い出しながら腕を振りかぶる。
（右も左も分からない私に、野次に対する方法など色々アドバイスしてくれて）
「でも！」
投球動作をしながら、誰にも聞こえない声で呟く。
（今の私はファントムズのエース、手加減はしない！）
右腕から放たれたのは思わず腰が引けてしまいそうな１５０キロ後半のストレート。ストレートを待っていた岡本純一がバットを振り抜いた時には、ボールはすでに直衛のグラブに収まっていた。その後鳳はストレート狙いの岡本純一をあざ笑うかのようにあと少しで

１６０キロに届く剛速球をコーナーに決めて空振り三振を奪った。
次に右打席に入るのはスイーツ正捕手の八番、古山博光（こやまひろみつ）。
バットを短めに持つ打者を見て、ファントムズのエースは小さくため息をつく。
（古山博光。貴方には悪いことをしたわね。私がＦＡでファントムズに入らなければ、あの女が指揮するスイーツの選手にならなかったのに）
同情はする鳳だが、それだけだった。
内角のストライクからボールになる変化球で二つの空振りを奪うと、外角のスライダーで空振り、もしくは見せ球を使うと読んだ古山をあざ笑うかのようなど真ん中のストレートで見逃し三振を奪う。
そして。左打席に入る九番投手、超・王臣を睨み付ける。
（超・王臣。あの女のためにスイーツに入った人間。こいつだけは、全力で叩き潰す！）
美空に絶対的な怒りを持つ怨恨のフェニックスは正捕手のサインに首を振る。
ホームランを三本打つなどバッティングを苦にしない流星の如く現れた凄腕外国人投手に、１８球団でも十指に入る女性投手。その初球、直衛のサインに首を振って投げたのはナックル。不規則に動くボールを振りにいく。打球は三塁方向のファールゾーンに転がる。
その後二球目と三球目は明らかなボールのナックルに手を出さず四球目。外角に向かって揺れながら落ちるボールを強振。打球は一塁方向ファールゾーンへ小飛球。一塁手の不枝木謎葉が飛びつくがあと一歩及ばずファール。
五球目。ナックル以外投げるつもりはないことを察した直衛は高速ナックルを要求。隠九条を空振りさせた激しい変化に王臣は三振。しかし直衛も取れず振り逃げで走る。それでも体の前で止めた直衛はすぐさま一塁に転送。間一髪でアウトに取った。
★
その後両軍は一歩も譲らない展開を見せる。
四球やヒット、エラーで走者は出しつつも失点は許さない王臣。

圧巻のピッチングで走者を一人も許さない鳳。
お互い一歩も譲らぬ投手戦。
五回裏。鳳火呼子からどうしたらヒットを打てるかしか考えていない草悟と王臣以外の人間はあることに気づき、重い雰囲気が漂い始める。

完全試合。

試合中、一人たりとも塁に出さない事で達成されるその記録は、一試合における投手の記録の中で、最も誉れたるものである。
しかしそれはあくまで〝やった側〟の話であり、〝やられた側〟としては不名誉極まりない。
どうやったら打てるかと自分のことしか考えていない草悟以外の野手はプレッシャーを感じ、気分を落としている。
不名誉から逃れようと肩に力が入り、空回りする。
先頭打者の隠九条に続き五番の東鬼が空振り三振に終わる。
ずぶずぶと、独特の緊張感に飲み込まれていく試合。完全試合特有の緊張感に、草悟を除く野手が飲まれていく。
六番白藤はキャッチャーフライに終わり3アウト。
完全試合を更に意識させられ、草悟以外の野手が暗い顔を見せる。
そんな周囲をよそに、王臣は平然としている。
「さて守備の時間だ」
余計なことを言わず毅然とした態度でマウンドに立ち、ファントムズの打者を待ち構える。
常時１５０ｋｍを越えるストレートと切れ味のあるシュートを正確に投げ込み、走者を許しても生還はさせない投球を続ける。
六回表を三人で片付けると王臣はベンチに座り汗を拭う。
「王臣さん。飲み物です」
「ありがとう。おや、君にもこういうことが出来たのかい？」
そんなことを言いながら草悟から飲み物を受け取る王臣。
「俺だってエラーしたら申し訳ないと思う気持ちはありますよ」

草悟はこの試合、すでに2つのエラーをしている。ただし五回のエラーはレフトに抜ける打球に飛びついて前に弾いたという褒められたエラーであるが。
「ハハハッ、君にもそんな気持ちがあったとは」
「それ、褒めているつもりですか？」
そう言いながらも草悟も笑う。
「ちょっと、貴方達。今がどういう状況なのかわかっているのですか!?」
場違いな会話に入江が噛み付いた。
普段は怒りを表すことがない女性がめずらしく苛立ちを隠せずにいた。
「ああ、わかっているつもりだが？」
思ったことを素直に口にする王臣。そして王臣は続ける。
「ならば問おう。君達が小難しい顔をすれば打ち始めるのかい？それに――」
少し貯めを作った後、王臣は決して大きな声ではないものの力強く言い放った。
「この超・王臣がファントムズを無失点に抑えれば問題ないのでは？」
「……確かに」
強固な自負によって紡ぎだされた言葉に、近くで聞いていた中宮寺が同意した。入江も反論しない。
七番岡本純一がセカンドフライに終わり、バッティンググローブをはめた王臣がネクストサークルに向かう。
「打たれたら恥をかきますよ」
ネクストサークルに向かおうとする王臣に捨て台詞を吐く入江。そんな入江に王臣が尋ねる。
「入江殿。今日の試合はどういう試合と思われる？」
「どういう試合、ですって？」
王臣の意図がわからず入江は言葉を詰まらせる。
そんな入江を鼻で笑った王臣はバットを持ってネクストサークルに歩き出した。

「？」

草悟は王臣の後姿を見た。

最後の亡霊三連戦第２４戦後編

★

七回表も抑えた王臣。
芯を外されてセカンドゴロに終わった草悟がベンチで休む王臣に尋ねる。
「王臣さん。俺、聞きたいことがあるのですが」
「この超・王臣にかね？いいだろう、美空監督の魅力を三日三晩包み隠さず教えてあげようではないか」
「あ、それはまた別の機会に」
そう言って草悟は話を戻す。
「入江さんの言葉に対して、王臣さんは鼻で笑ってましたよね？あれって何故なんですか？」
「ああ、さっきのかね」
真剣な会話をするつもりになったのか、美空のことを熱く語ろうとする紅潮は消える。
「簡単な話だ。草悟君。今日の試合はどういう試合だい？」
「今日の試合ですか？うちは俺含め一人も塁に出ることが出来ず完全試合させられそうな試合ですね」
淡々と草悟は答える。
「なるほど。確かにそうだ」
だが、と王臣は続ける。
「今日の試合は三位に転落したファントムズから三位の座を奪い、首位を走るポセイドンに追いつくための足がかりとなる試合。……優勝争いをするためには落とすことが許されない試合といえる。つまり勝たなければならない試合なのだ」
「……」
感心したように草悟は頷く。
「それなのに何故不名誉な敗北を意識する？完全試合を免れたいから試合をしているのか？」
ベンチ中に届く大きな声で王臣は言った。まるでベンチ全員に伝

えるように。そしてそれはネクストサークルで準備をしている入江にも聞こえていた。
　勝手なことを言いやがってという批難の視線を正面から受け止め、王臣は続ける。
「我々は人間だ。どんなに全力を尽くそうとも負けることはある。だが〝完全試合をされる〟という不名誉にとらわれて逃れるための試合をして楽しいのか！『我々はプロ野球選手だ！』と胸を張っていえるのか!?もしそれでプロを名乗るなら滑稽としか言いようがない。だからこの超・王臣は鼻で笑ったのだ！」
　周りにどう思われようと気にせず、王臣は言い切ってみせた。
「まて、王臣」
　口を開いたのは中宮寺だった。
「私達はまだ勝負を捨ててないぞ！」
「そうかもしれません。だが私には完全試合をされることに恐れているようにしか見えない。別にどうでもいいと思いますが」
「どうでもいい、だと？お前は完全試合をされて悔しくないのか！」
「中宮寺殿。それこそどうでもいいと思いますが？」
「なんだと――」
　何かを言おうとする中宮寺の前に王臣が続ける。
「最後に笑っているのが我々であれば、過程はどうでもいいのでは？」
　王臣はそう言ってネクストサークルの入江を見た。
「ストライク、バッターアウト！」
　十球以上粘ったものの三振に終わった杉井の代わりに、入江は打席に入った。

★

　七回裏。２アウトランナーなし。完全試合は続いていた。
　入江は考えていた。
（ここは、狙うべきか？）
　鳳は七回にも関わらず球威はほとんど落ちていない。スイーツ戦に限っては序盤から飛ばしてもボルテージが上がって後半にも続いているからだ。

初球。内角低めのストレートは外れてボール。
入江は気づく。
（やっぱり鳳さん。七回にも関わらず良い球が来ている。でもやっぱり精度が落ちている）
今なら甘い球が来るかもしれない。ホームランを打てるかもしれない。そんな考えが入江によぎる。
ホームランを打てれば完全試合を阻止することが出来かつ逆転を許さなければ勝てる。
しかしもう一人の自分が呟く。甘い球が来るなら長打を狙わず次につなぐことを考えた方がいいのではないか、と。
入江はチラッと三塁を見る。三塁手の不枝木七八が後ろ気味に守っていた。上手く転がせばセーフになる可能性は高かった。
２アウトでもランナーとして出れば鳳にプレッシャーをかけることが出来る。同時に完全試合を阻止することが出来る。
次を信じて出ることを考える。その考えも間違いではないはず。
（……どうすればいい）
入江はベンチを振り返る。
王臣がじっと見つめていた。
「……！」
その顔を見て、入江は笑い、迷いを消した。

★

「入江さん、何を考えているんですかね？」
草悟の呟きに隣で見る王臣が答える。
「サードが随分後ろにいる。１ボールだしセーフティバントでもしようとしているのかもしれないね」
「……王臣さんはどうすればいいと思います？」
「さて……」
王臣は視線を草悟からグラウンドに戻し、
「それは見てのお楽しみ、と言ったところかな」
端正な顔に微笑を浮かべた。

★

鳳が腕を振り上げて、投げる。

直衛が要求したのは外角高めのストライクゾーンからボールゾーンに逃げるスライダー。だがそのスライダーは思ったほど曲がらずストライクゾーンを通過しようとする。

そのボールを、

カキィィィンッ！

入江はフルスイングした。

打球は見る見るうちに外野に伸びていく。

入江はセーフティバントをしなかった。次につなげるという安心よりもここで一点を取る可能性にかけた。例えそれがわがままだと批難されようとも。

愕然とした顔で鳳は打球を追う。

しかし。

「十曲ッ！」

ライトに向かっていく打球に視線を切らせず走りながら右翼手の桜木は中堅手の名前を叫び、ラバー素材の壁にスパイクを喰いこませて壁を走るように登り、グラブに打球を当てた。

ホームランと思われた打球はフェアゾーンに落ちていく。そのボールをライトまで全力疾走してきた十曲がダイビングキャッチした。

プロ野球至上初めてかもしれないビックプレイに両軍のファンが歓声を上げる。

仲間のビックプレイに鳳はグローブで拍手しながらホッとしたような、悔しげな、曖昧な表情を作っていた。

歓声を聞きながら入江は笑みを浮かべながらベンチに下がった。

王臣の視線に気づき、声をかけた。

「ごめんなさい、ホームランにできなくて」

その言葉に王臣は首を横に振る。

「いや、入江舞名。貴女のプロとしての意地、見せてもらったよ」
満足そうに笑った。
「そう」
嬉しそうに笑う入江に王臣が驚きの発言をする。
「それでは超・王臣。全力を出すとしよう」
「「え？」」
その言葉に入江を始め多くの人間が同じく声を漏らす。
注目を集めた王臣は不適な笑みを浮かべる。
「長い試合になりそうだったので少し余裕を持たせようと。だが！」
台湾からやってきた新外国人は気合を入れて、咆哮した。
黒髪は金色に逆立ち、体からは金色のオーラが帯びる。
「ここからは神をも超える男、超・神臣になって戦わせてもらう！」
（（（お前はスーパーサ〇ヤ人かよ……））））
その姿に、ベンチにいた人間は固まった。

★

八回表。
某格闘漫画のようにパワーアップした姿となった王臣は化け物と言うしかなかった。
「超・神臣の力、存分にお見せしよう!!」
始まったのはもはや野球ではなくショーだった。
一番の豊？から始まる打順で球にもうすでに慣れてきたはずの四順目。
バシンンンッッッ!!
「ストライク、バッターアウト！」
「ば、馬鹿なッ!?」
ストレートに滅法強い豊？凶死浪がストレートを待っていて振り遅れる空振り三振。
バシンンンッッッ!!
「ストライク、バッターアウト！」
「疑疑。これが１００球以上投げた人間の投げる球か……」
第三打席に二塁打を放った影沼腐深がかすることすら出来ない空

振り三振。
バシンンンッッッ!!
「ストライク、バッターアウト！」
「ギギギッ、どこにこんな力が!?」
これまで幾多の威力のある剛速球をスタンドに運んだ不枝木七八は王臣の気迫が乗り移ったかのようなボールに惑わされ、釣り球にバットが思わず出て空振り三振。
この回。王臣は一回に投げた投球を上回る気迫の篭った投球で９球で三者連続三振と目が慣れたはずのファントムズ打線の１，２，３番を完膚なきまでに叩き潰した。
★
八回裏。
未だ一人の打者も許していないファントムズのエースが迎えるのは隠九条憂男。
ここに来て隠九条はある作戦を立てる。それはナックルを捨てるというもの。その作戦は成功し、２ボール２ストライクで投じたギリギリボールゾーンに落ちたナックルを隠九条は見逃しフルカウントになった。
完全試合をするには一人の走者も許されない。もちろん四球も。
「…鳳」
タイムを取った直衛がエースの元に歩み寄る。
「……何よ、直衛さん。こんなところでタイム取らないで下さいよ」
息を切らせながら近づいた直衛に文句を言うエース。
「…はっきり言おう。この回のお前のナックルは悪い。隠九条はナックルを捨てて他の球をカットする気だ。甘い球が来るかボール球が来るまで」
「だったら力ずくで――」
「…アレを投げろ」
アレ。その一言に鳳はこめかみをピクリとさせる。
「直衛さん。私がアレを投げないと抑えられないと？」
「…そうだ。ストレート、スライダー、ナックル……今のお前ではどれ

を投じても隠九条は打ち取れない」
　嫌味と冗談を交えて言った言葉が肯定される。
「直衛さん。わかってますよね？私がアレをスイーツ戦で投げたくないことを」
　アレ。ファントムズのエースが言うアレとは美空星蘭が現役時代に得意としていた変化球だった。
「…断言しよう。アレを投げなければお前はこの試合完全試合をすることは出来ない。そして――」
　直衛は言いたくない言葉を紡ぐ。
「…お前を裏切った〝三流監督〟のお前を降板させた決断が正しかったと証明されるだけだ」
　直衛の心が痛む。プロ野球選手初の女性選手であり、現役時代誰もが諦める状況であっても懸命に投げ続けた偉大な選手を。日本球界でトップクラスと言われる自分が尊敬する人間を〝三流〟と言ったことに。
　しかし直衛はそう言うしかなかった。過去に苦しむエースの鎖を解き放つために。
「…見せ付けてやれ。〝プロ野球選手初の女性選手という肩書きに執着してお前に完全試合をさせなかった三流〟に格の違いというものを！」
　そう言って直衛はキャッチャーボックスに戻った。
（そうよ、そうよね。あいつの決め球たったアレも私にとってはカウントを稼ぐ球に過ぎない。私のナックルにも劣る球なのよ！）
　直衛の一言に気をよくしたファントムズのエースは腕を振り上げる。
（美空星蘭。お前の決め球は私にとって投球の一つに過ぎない。つまり私の方が上。それを証明してやる！）
　鳳は美空が現役時代、切り札として使っていた球を投じた。
「!?」
　隠九条は固まる。ストレートよりさらに遅い。だがナックルではない。

あまり浮き上がらず低い軌道を描き、打者の手元に急激に落ちる。目の前で加速したと錯覚するボールに隠九条は手が出せなかった。ボールは真ん中低めに決まっていた。
「ストライク、バッターアウトッ！」
ファントムズのエースは、美空星蘭が魔球だと言われた、一般的なカーブとは違う軌道を描くカーブで隠九条を見逃し三振に打ち取った。
続く五番東鬼、六番白藤もカーブでストライクカウントを稼がれ、ボール球に手を出し内野ゴロに終わった。

★

九回表。
直衛は打席に立つ。
（…ここで一点を取らなければ）
ファントムズの四番は念入りに素振りを行う。
鳳の球は徐々に球威やキレが落ちていた。今まで投げていなかった現役時代の美空星蘭の魔球と称されたカーブを決め球として使用することで何とか打者三人でしとめた。しかし延長に入れば捕まるほど疲労している。
（…あいつに、完全試合を達成させる。そのための一点を俺が取る……それがファントムズの四番であり正捕手の俺の役目！）
気合に満ち金髪になった超・王臣が放つ剛速球を直衛は振りぬく。しかし球威に押され打球は前に飛ばずバックネットに飛んでいく。
キャッチャーマスクを脱いだ古山が全力で追ったが打球はバックネットに当たりファール。
直衛は心の中で呟く。
（…神よ。ファントムズのため、過去に苦しむエースのため……力を！）
先ほどよりも速い砲弾のようなストレートを、直衛は先ほどファールにした時よりも神経を研ぎ澄まし全力で振りにいく。
しかし打球は前には飛ばずフラフラと三塁方向のファールゾーン

にポトンッと落ちる。
そして。運命の三球目。
「…ッ！」
直衛は自分が持てる全ての力と技術をフルスイングする。渾身のスイングに王臣の弾丸のようなボールにかする。しかし打球は古山のミットに収まった。
初回を上回る超・王臣の投球と大黒柱の三振にファントムズ打撃陣の心は完全に折られた。五番唐沢、六番不枝木謎葉もバットを振るがかすることなく三振に打ち取られた。

★

九回裏。
吹き出る汗をハンカチで拭いながら鳳火呼子はマウンドに立つ。ファントムズはまだ一人も走者を許していない。そして走者を許さない投球を続けていればファントムズには負けはつかない。
美空が出来なかった完全試合を成し遂げる。完全試合まであと三人で降板させた美空に間違いだと証明させる。
その怒りと復讐心が疲労で今にも倒れそうなファントムズのエースを動かしていた。
七番岡本純一を高めの釣り球でキャッチャーフライ。八番古山のところで代打で現れた左打者の数合瀬をショートライナーで切って取った。
好投を続ける九番超・王臣の打順で美空が動いた。
『選手の交代をお知らせいたします。ピッチャー、超・王臣に代わりまして、中宮寺。背番号3』
怪我でベンチスタートとはいえスイーツの四番の登場に完全試合をされることで意気消沈していたファンが沸き立つ。
（来たわね。ファントムズを捨て美空の元に走った裏切り者！）
気力を振り絞り、鳳は腕を振り上げる。右腕から放たれたのはナックル。
ボールゾーンに行くと思われたボールはライト方向からホームに流れる強い風に流され、ストライクゾーンに入った。

★

（風がライトからホームに流れているわね）

右翼手の桜木はたなびく旗を見ながら考える。

（中宮寺さんの打球は８割方レフト方向。だったらセンター方向に守備位置を取った方が良さそうね）

天気と風向き、経験則、相手のデータを下にゴールデングラブ賞常連の名右翼手・桜木傾子はセンター方向に立ち位置を動かした。

★

（伊達にエースを名乗ってはいないわね。ここに来てまだこんな球を投げるのだから）

中宮寺は心の中で舌打ちをする。

マウンドに立つ鳳火呼子は肩で息をするのがわかるほど疲弊している。なのに投げる時には全力で投げ込む。疲弊する姿に騙されていたら三振に終わるほど。

そして中宮寺はすでに２ストライクと追い詰められている。自分がボールだと思っても審判がストライクと宣告した時点でこの回で勝つことはなくなる。

（王臣は一人で投げてきた。ここで私が討ち取られれば延長。延長になれば連投や登板過多で疲弊している中継ぎを出すことになる。それだけはするわけにはいかない）

自分で決める。

その覚悟で中宮寺優奈子はバットを強く握る。

鳳が振りかぶる。

ボールは遅いストレートと思えるスピードで激しく揺れる。

（高速ナックル!?）

ボールは風に流され完全なボールゾーンからストライクゾーンに入るか入らないかという微妙な位置に落ちようとする。

中宮寺は全力でそれを振りにいく。ボールはそのバットから逃げるようにボールゾーンに逃げていく。

間近で見ていた直衛は三振と確信した。しかしその確信は打ち砕かれた。

中宮寺が左手を完全に離し、右手一本で食らいついてきたのだ。
打球はライト方向のファールゾーンに飛んでいく。しかしライトからホームに流れる強烈な風にフェアゾーンに押し戻される。
センター方向に守っていた桜木がダイビングキャッチを試みる。
入江のホームラン性の打球をフライにしたことにファントムズとファントムズファンは取れると信じ、スイーツとスイーツは取らないでくれと祈る。
打球は
「……ッ!?」
懸命の腕を伸ばしたグローブの先だった。
桜木がボールを取ったときには中宮寺はすでに二塁を回っていた。矢のような送球がライト最奥からサードに送られるが、セーフ。
中宮寺優奈子の三塁打によって、鳳火呼子の完全試合は崩れ落ちた。
「……。鳳」
山元は目を静かに閉じた。
本来ならばここで投手交代を告げるべきだった。しかし彼には出来なかった。
鳳火呼子がスイーツを捨てファントムズに来たのは自分が言った嘘が原因だということを知っていたからだ。
ここで彼女を変えればその嘘が嘘だったと鳳火呼子の信頼を裏切ることになる。
結局山元は投手交代をしなかった。
打席は一番草悟。
その初球。指に大きな負担がかかるナックルの多投ですでに指に力が入らなくなっていたファントムズのエースは投球動作の途中でボールを落としてしまった。
「…鳳」
ファントムズの正捕手は下唇を噛んだ。
「ボーク!」
審判が三塁の中宮寺に進塁するように指示。中宮寺優奈子がホー

ムを踏み、スイーツは完全負けからサヨナラ勝利をもぎ取った。

★

翌日にはホームでグリフォンズを迎えてということもあり、ファントムズは新幹線で帰路についた。

「…ふう。そろそろ寝るか」

新幹線で試合の反省をまとめたノートに目を通した直衛は床につこうとする。その時

プルプルプルッ、プルプルプルッ、

携帯電話が鳴る。鳳火呼子からだった。

「…もしもし」

『あ、直衛。ごめんなさい。こんな夜更けに……ちょっといいですか？』

今にも消え入りそうな声に直衛は問題ないことを告げる。

『……直衛。私は、間違っていたのでしょうか？私はあの女、美空星蘭に認めさせたくて……ＦＡでスイーツを出た。そして再び訪れた完全試合が出来た試合で逆転負け……』

直衛は言おうか言うまいか考える。今言おうとしていることは彼女を追い詰めることにならないのか、と。

『……本当に、バカみたいですよね。あの女に負けて……お笑いものですよね』

自嘲する鳳に直衛は心を決めた。

「…お笑い？俺には失笑だな。所詮お前はその程度の投手であると気づいたからな」

「……なんですって？」

自嘲した雰囲気が一変、電話越しから人を殺せそうな怒気をはらむ。

（…失笑？どの口が叩くのだ、直衛。あの試合を落としたのは自分ではないか）

心の中で自分を責めながら直衛は言い放つ。

「…お前は本当にバカだよ！・美空星蘭にされたことを根に持ち、我を通した結果チームは負けた。とてもじゃないがファントムズのエースなんて名乗るのが恥ずかしいくらいだ！」
（…だったらお前はどうなんだ？鳳を傷つけることを恐れ、言うべきことを言わず、決断すべきことを決断しなかった自分が？試合をコントロールしなければいけない捕手のくせに！・）
『……そう、ですね。最後の最後で裏切り者の中宮寺に打たれた私に……私にはエースという称号は――』
「…馬鹿野郎!!中宮寺のあの三塁打は天候や色んなものが偶然にも重なり合ったマグレ中のマグレ。二度と起こりはしないマグレなんだよ。そんなこともわからないのか!?」
『……!?』
「…なのにたった一回のアンラッキーでそんなにバカなことを言うほど弱弱しくなってしまうのか？自分の球を信じられないなら、とっとプロなんか辞めて、金持ち誘惑して結婚して引退しろ!!」
『……ッ!!』
「…８回・１００球を超えて気合だけであれだけの球が投げられる。お前はエースだ。ファントムズという小さな枠のエースじゃない。日本を代表するエースだ。お前のプロ野球人生はあと十年続く。今日の試合はその何百試合の内の一試合に過ぎない」
『……』
「…過去なんかにこだわるな。未来を見ろ。もっと強くなりたいのなら！」
『……』
「…すまなかった。暴言を吐いて。しばらく無視をしてもいい」
『直衛』
　次の瞬間
『アンタに何がわかるって言うのよ！私がどんな思いでスイーツを出たのか、知らないくせに何が『過去にこだわるな』よ。アンタに私の何がわかるって言うのよ!!』
　堰を切ったように感情をぶつける。直衛はそれを黙って聞く。

しばらくすると怒声が鼻をすする音に変わる。
『わかっているわよ、私だって……あの試合、私がもう投げる体力がないことを……完全試合というプレッシャーに押しつぶされそうになっていた私を〝美空コーチ〟が察して、毛利監督に降板するように進言したことは……わかってるわよ!!』
「…わかっていたのか」
直衛はつぶやく。そして復讐心にかりたてられていた女性投手を誤解していたことに気づく。
『直衛。貴方ってバカでしょ!?私の機嫌を損ねて、何のメリットがあるんですか?そんなリスク、背負う必要ないじゃないですか……直衛って……本当はバカでしょ』
「…そうだな、俺はバカだな」
直衛は苦笑する。
『直衛。私は強くなります。過去にとらわれず、未来を見て……日本を代表するエースになります。でも直衛も約束して下さい。私が日本を代表するエースになるなら、直衛も日本を代表するキャッチャーになると!』
「…ああ、約束しよう。それじゃあ」
『待って』
切ろうとする直衛を鳳火呼子が止める。
『私は絶対にエースになってみせます。でもそれは茨の道。多くの人を敵に回すことになると思います。それは別にいいです。でも直衛は……直衛だけは……私のそばに居てください。……お願いですから』
「…」
『……それでは、おやすみなさい』
「…あ、……おやすみなさい」
直衛はなぜか頬を染めながら電話を切った。

★

「ん?」

ベッドにつこうとする美空の携帯電話にメールが入る。
ＦＡでファントムズに移籍して以来連絡がなかった鳳火呼子だった。
美空はメールを開く。
タイトルがないメールの本文は『申し訳ございませんでした』だけ書かれてあった。
愛弟子ともいえる女性投手が何に謝っているのか察した美空は本文だけ書いてメールを送信した。
『ファントムズのエースへ。クライマックスシリーズで会おう。スイーツの監督より』

外伝　杉井貴士物語

サードはチームの勝敗を左右する者だけに与えられたポジション。

こういうと多くの人から批難が上がりそうだが、スイートエンジェルズにドラフト2位で指名された好走好守の男、杉井貴士（すぎいたかし）は本当にそう思っていた。

プロ野球選手になることになる杉井少年は野球漫画を腐るほど読んでいた。そのほとんどが投手を主人公にしたものが多かったが、投げるよりも打つ方が好きだった少年はあるポジションに強いあこがれを持つようになる。

サード。

主人公のライバルとして描かれるキャラクターはサードが多く、相手選手のサードは主人公たちの希望を打ち砕く敵として、ライバルチームから見れば試合をひっくり返す力を持つ打者だった。

自分もこんな試合をひっくり返す力を持ったサードの選手になりたい。

そう心に誓った杉井少年はバッティングに精進しつつサードの守備に憑りつかれるように練習に明け暮れた。

元々才能があった少年は猛練習の甲斐もあり4番サードとして勝ちの試合はより勝利を決定づけ、負けている試合はひっくり返すバッティングを見せた。

高校生になった彼は才能ある球児達が全国から集まる名門校に進学した。そこで彼に一つの壁が立ちはだかる。

一年生の頃からレギュラーを勝ち取った杉井だが、与えられたポジションは今まで自分が頑なに守っていたサードではなくセンター。サードはチームの看板と言うべき一年上の先輩が守っていた。

自分こそがサードに相応しい。

そう思っていた杉井は諦めなかった。こっそりサードの練習を行っていた。もちろん与えられたポジションの練習は怠らない。レギュラーで活躍し続けなければサードのポジションを奪い取ることは不可能と考えたためだ。もちろんバッティングの練習も忘れてはいない。

その努力が実を結び、杉井はヒットを量産しつつ並外れた脚力で凡打を内野安打、単打を二塁打、二塁打を三塁打に変えるチームに欠かせない男に成長した。

もし俺が誰よりもチームに欠かすことが出来ない男になったらサードにしてください。

監督と約束を取り付けていた杉井はサードに返り咲き、甲子園出場を果たす活躍を見せた。

そして四年前のドラフト会議。

杉井は隠九条憂男（いんくじょうゆお）に続く第２位でスイートエンジェルズに指名された。

ドラフト２位という好評化に笑みを浮かべつつも杉井は別のことを考えていた。

（ドラフト１位の隠九条はサード。高校通算７５本という打力を期待されてのこと。しかし打力では負けはするが足と守備では俺の方が上。こいつには絶対サードは譲らせねぇ！）

と。

月日は流れ、隠九条憂男と杉井貴士は一軍スタートとなった。

チームは隠九条憂男を一軍で多くの経験を積ませて育てるという方針から開幕戦で八番サードに抜擢。杉井はベンチ、それも外野やサード以外の内野の守備固め。

なんであいつが俺のポジションを！

総合的に見て自分より劣る男がサードを守ることが杉井には許せなかった。だが新人の自分がチームの方針な以上自分が何を言っても変えることは出来ない。そう思った杉井はいつサードを任されることになっても良いように与えられた練習をこなしつつ、自分がどこでも守れてどんな作戦にも対応出来るというアピールのために外野の守備やバントや進塁打の練習を率先して行った。

その努力はすぐに実を結んだ。杉井はスタメンとはいかなかったものの開幕一軍入りを果たすことが出来た。前評判通りの守備で投手陣を助けた。代走や代打もそつなくこなし後半では八番でスタメン入りするようになった。

そして二年目。プロの変化球に対応出来ず不振が続く隠九条にチームは二軍降格の決断を下した。空いたサードのポジションには杉井が抜擢された。

よし！俺は俺の力で俺のポジションを奪い取ったんだ！これから俺の野球人生が始まる!!

好守で味方を何度も救うスイーツに欠かせない選手へと成長していた杉井は小躍りしたいほど喜んだ。

だがそんな〝彼の野球人生〟はあっという間に終わりを告げた。

二軍で好成績を収めた隠九条が一軍に戻ると再びサードに据え、杉井はセカンドにポジションを変えられた。

それでも杉井は余裕だった。

隠九条はサードしか守れない。だから俺がサードを外された。でもそれも一時的なもの。俺は二軍に落ちる事無く一軍で実績を積んでいる。すぐにサードを奪ってやる！

そう思っていたからだ。
だがその思いは無惨にも打ち砕かれることになる。それは隠九条が一軍に復帰してから三日目の試合だった。
試合は3―0で相手リードの9回裏。
一番八千代が四球で出塁すると、ガーディアンズはここまで4安打無失点の好投を続けていた鉄刀十郎（くろがねとうじゅうろう）を降ろし守護神の具志堅城高（ぐしけんじょうこう）をマウンドに送り込む。
具志堅は150キロ後半の速球と2メートル近い高身長と異様に長い腕から放たれる角度ある球を投げおろす。

二番入江（いりえ）は三振。三番助っ人外国人フラウナンはサードフライ。二死ランナーなしで四番沖芝（おきしば）は初球を打ちあげてしまう。ここでゲームセットと思いきやフラフラと上がった力のない打球はショート、セカンド、センターがお見合いをしてしまうテキサスヒット。
二死三塁一塁の場面で五番隠九条。
多くのスイーツファンはホームランを期待するも相手は今シーズンここまで無敗の守護神・具志堅。打者は今シーズンは好調なものの去年は散々な結果に終わった二年目・隠九条。隠九条は凡退すると半ば諦めていた。それはベンチで試合を見続ける杉井もだった。
具志堅は腕を振り上げ投げる。158キロという具志堅のマックススピードのストレートが外角低めのストライクゾーンギリギリに決まる、その時だった。

カキィィィンッ!!

バットを長めに持っていた隠九条のスイングは具志堅の剛速球を確実に捉え、打球は吸い込まれるようにスイーツファンのいる外野席に飛び込んでいった。

今シーズン負けなしの守護神・具志堅城高からの同点ホームラン。

予想だにしていなかったまさかの展開に、ファンは勝ったかのように盛り上がる。
ベンチで呆然としていた杉井の視線の先には、はにかみながらゆっくりとダイヤモンドを一周する隠九条の姿が。
先輩選手達からの手荒い祝福を受けた隠九条。そんな中、杉井は気づいてしまった。

俺が、俺がなりたかった……一振りで試合を変える選手が……ここにいる。俺があれほどなりなかったサードが……。

心の中でポキッと何かが折れた音が聞こえた。
その後六番直木がストレートの四球。打席にはこの日七番に入った杉井。
隠九条に負けた、その事実に心ここに非あらずだった杉井だったが幸運にもこの打席が良い方向に働いた。
この打席までに具志堅との対戦成績は5打数3三振、内野ゴロ2つ。杉井は安打はもちろん四球すら出来ていなかった。１００セーブを挙げた守護神という畏怖に、戦う前から萎縮している所があった。
通算対戦六打席目になる初球。同点ホームランとその後のストレートの四球で動揺が抑えきれなくなった具志堅の投げた球は真ん中高めのストレート。１５０キロ近いスピードは出ていたものの相手が速球投手だと理解している打者にとっては明らかな失投だった。
その球を。

カキィンッ！

杉井は打った。打球は一塁線ギリギリのフェアゾーンに落ち外野の最奥に転がっていく。ライトからボールが返ってきた時にはすでに杉井は二塁、一塁走者の直木はホームベースを踏んでいた。

逆転サヨナラのツーベースヒット。
隠九条に負けたショックを引きずっている杉井は、二塁ベースで同点ホームランを放った隠九条に負けないほど手荒い祝福をぎこちない笑みで受けていた。
逆転勝ちの余韻が覚めぬ中、ヒーローインタビューに呼ばれたのは9回同点ホームランを放った隠九条とサヨナラ打を放った杉井だった。
――まず隠九条選手からお伺いします。
インタビュアーから一打同点となる場面で打席に入った感想、同点ホームランを打った感触はどうだったかという質問に隠九条は高揚した様子で答える。
インタビュアーの質問は進む。
――隠九条選手。隣に立つ同期の杉井選手とお立ち台。何か感慨深いものがあるんじゃないでしょうか？
「はい！隣に立つ杉井が毎日めちゃくちゃ練習を頑張っているんで、『同期のあいつがあれくらい練習に打ち込んでいるんだから俺もやってやる！』と思い練習してきました。こうして杉井と共にお立ち台に立てて本当に良かったです!!」
その後インタビュアーから様々な質問をされたが、隣に立つ隠九条の言葉も耳に入っていないほどショックを受けていた杉井は何を答えたのか覚えていなかった。
ヒーローインタビューの後、杉井はスイーツ監督の毛利秀章に呼び出された。
「杉井。俺はお前がサードに強い思いがあるのは知っている」
「……はい」
その続きを杉井は予測できた。そしてその通りの言葉が出た。
「だが今日の試合を見て、俺は隠九条はこのチームに必要な男だと確信した。そして隠九条はサードしか守れない。よってお前にはサード以外のポジションを守って欲しい」
「……はい」

自分がなりたかった試合をひっくり返す力を持つサード。自分が下だと見ていた男が追い求めていたサードだったことに、杉井は負けを認めるしかなかった。

俺は負けた。俺は負けた。俺は負けた。

ふとある考えが思い浮かぶ。

あの男、隠九条憂男は俺が求めていたサード。きっとあの男がスイートエンジェルズを背負って立つ男になるだろう。でもあの男一人で背負えるのか？

答えは否だった。いくら隠九条憂男という男が試合をひっくり返す力を持ったサードだとしても一人では数多くのプレッシャーに負けてしまう。

誰かが支えてあげないといけない。それも隠九条憂男と同じくらいチームに必要とされる実力を持った人間でないと。

その人間は誰だ、自分しかない。

そう結論付けた杉井は次に考える。ではどうすれば隠九条と同じくらいチームに必要とされる選手になれるかを。

俺は隠九条ほどの打力はないしメンタルも強くはない。だが隠九条以上の守備力と器用さを持つ。あいつが一振りで試合を変える選手になるならば、俺はそのお膳立てをする選手になってやろう！守備でチームを盛り立て、バントや進塁打でチームを優位に進ませることができる名脇役に！

隠九条では出来ないものでチームに貢献し、チームを背負って立つであろう隠九条を支える。

そう心に誓った杉井に悲壮や後悔はなかった。

外伝　隠九条憂男物語

バッティングっておもしれぇ。

ボールが飛んでいく感触。バットに残る余韻。綺麗な放物線を描いて飛んでいくボール。

後にプロ野球選手としてスイーとエンジェルズのクリーンナップを務める男の第一歩は、中学三年の時に「メンバーが足りないから」と近所のおじさんに頼まれ草野球の助っ人を頼まれ、ホームランを打った時から始まった。

打撃に魅了された隠九条はすぐに野球部に入部。授業や遊び以外で野球をやっていなかった経験不足を天性の長打力と努力、根性で補った。そんな甲斐あって高校一年の夏にはクリーンナップを任されるようになった。

高校三年の春。キャプテンに就任した隠九条は持ち前の打撃と逆境にも負けないしぶとさでチームを引っ張り母校・去華（さりばな）高校を甲子園初出場に導く。甲子園では一本のホームランを放つも相手が甲子園常連の強豪校ということもあり一回戦で敗退したが、それでも甲子園初出場を果たした中心選手として地元ではヒーローとなった。またこの時試合を見ていたスイートエンジェルズのスカウト、御山の目に留まったのも彼の人生に大きくかかわっていく。

夏。甲子園常連校に決勝で敗れ再び甲子園の地を踏むことはなかった。だが長打力だけでなくチームを　咤し鼓舞し、チームメイトに声をかける彼の立ち振る舞いを見ていた御山は「彼はスイートエンジェルズの看板を背負う名選手になる」と。それは「彼程度なら別にドラフト1位で取らなくていいのでは」という疑問を投げかけるスタッフを「彼ほどの選手を獲得できなければスイートエンジェルズの初優勝は半世紀遠くなる」と即座に否定するほどだった。

御山の強い主張と相次ぐ主力のＦＡで首脳陣はドラフト1位で単独指名。

入団会見で隠九条は「スイーツ初の新人王を獲得します」と公言した。

この時隠九条は知らなかった。この発言が自分自身を苦しめることになることに。

高校通算７５本のホームランを放った長打力を期待し、彼を将来の四番候補にすることを決めた球団はより早く一軍に慣らせようと積極的に隠九条を立たせる。

球団の方針・期待、そして新人王になるという公言を守ろうと隠九条は努力した。だがこれが〝自分のウリである長打力を球団やファンに見せなければならない〟という焦りにつながり、〝打たなければならない〟という気持ちが彼本来のバッティングを崩すことになる。

開幕戦、八番サードで出場した隠九条。しかし結果を求めすぎた彼は本来なら見逃すようなボールにも手を出してしまい凡打を連発。完全にチームの足を引っ張る存在になっていた。

それでも球団は彼がその経験が糧になると期待して試合に出し続けた。

今まで打てていた自分へのギャップと自分の不甲斐なさを責める周囲の批難に耐えながら、隠九条は試合に出続けた。結果は新人王にはほど遠い散々な成績だった。

翌年も彼は一軍にいたがオープン戦での結果に球団はこれ以上プレッシャーのかかる一軍にいては潰れてしまうと判断。いままで一度も一軍を放れたことのない隠九条に二軍行きを通達した。

二軍に席を置くようになっても、自分を見失ってしまった隠九条は本来の自分を取り戻すことが出来ないでいた。

何で俺は野球をしてしまったんだろう……何で俺はプロ野球選手になってしまったんだ？……

自分が〝野球を志すようになったあのホームランは自分を地獄へと誘う幻だったのでは？〟と思い込むまで追い詰められていた。

精神的に疲れた隠九条は何もかも忘れたくなっていた。救いを求め彼は手にしてはならないに手を出してしまう。

酒。

未成年である自分が飲酒をしたことが発覚すれば厳しいペナルティが課せられることを入団当初で行われた講習会で学んでいる。

しかしこの苦しみから逃れるならば、と彼は人気のない自動販売機で大量のビールを買った。酒をばれないように隠し、寮の玄関をくぐる。

後は自室で飲むだけ。

その時だった。

『さぁ回は八回表。七番白藤(しらふじ)が四球を選び一死三塁一塁とスイーツ、チャンスを拡大。ベンチには一発もある岡本がいます。しかし毛利(もうり)秀章(ひであき)監督、八番杉井に代打を出さずそのまま送りました』

『杉井君は長打力はあまりありませんがそれを補ってなお余るバントの上手さと足の速さがありますからね。試合はスイーツの一点リード。大量点よりも最低限の仕事をしてくれてかつ鉄壁とも言える守備を持つ杉井君にかけたんでしょうね』

音の方がする方へ振り返るとそこにはスイーツ対コスモスターズの中継が。

『バッターボックスに立つ杉井。そんな毛利監督の期待に応えられるか？ピッチャー第一球を投げた。……おっとこれは大きく外れてボール』

隠九条はその場に立ったままジッとテレビを見続ける。

『あぁ、杉井。ボールになるであろう外角低めの難しい球に手を出してしまった！セカンド市丸(いちまる)二塁に送り4—6—3のダブルプレイ！杉井、執念のヘッドスライディングを見せましたがあと一歩及びませんでした』

『ノーストライク3ボールでしたからストライクゾーンに投げてくると杉井君は読んだんでしょうね。しかしその裏を読んだキャッチャーの愛染(あいぜん)とその愛染の要求通りの球を投げたピッチャーの西仙(さいせん)、さすがですね』

解説が相手バッテリーを褒めると、画面はチャンスでゲッツーという最悪の結果で終わった杉井を映る。

『なにやってんだよ、オラッ！』、『あんな球に手を出すんじゃねぇよ、バカが！』、『ヒット打てなくてもいいから最低限の仕事をしろよな！』

観客の心ない罵声がやや俯せがちの同期に浴びせられるのを隠九条は黙って見た。
（杉井、辛いよな。チャンスで打てなくて悔しいのに、ファンはそんな心情を無視して好き勝手言うんだから）
同じ体験をした隠九条には、今の杉井の気持ちは痛いほどわかった。
その後ＣＭが入りテレビがスイーツの守備陣を映す。ライトの守備に入った杉井にまだ罵声が浴びせられる。しかし彼の顔に悔しさなどのマイナスの表情はなかった。あるのは今目の前のことに集中するプロフェッショナルの顔。
画面はピッチャー成田（なりた）とキャッチャー篠原（しのはら）、一発長打の七番立木（たちき）の対戦画面に変わる。その初球。顔近くまである吊り球を立木はブオンッ！という音が聞こえそうなスイングで当てた。ボールは向かい風にも関わらずライト方向へ伸びていく。その打球と共にテレビは打球を見ながら必死に追いかける杉井を映す。そして
『おっと杉井。フェンスにぶつかりながらもガッチリとボールを掴んでいます。これにはピッチャー成田、ファインプレイを見せた杉井に笑顔でグラブを叩きます』
『普通ならファールになると諦めて、もしくは怪我を恐れて取りに行かない所を杉井君、よく追いかけて取りました。しかもいつも守っているのは内野なのに本職に負けない守り。今のプレイでどれだけ練習してきたかわかりますね』
「!!」
解説の言葉に隠九条はハッとなる。
隠九条と杉井は同じ内野手。隠九条は近くで杉井を見ていた。杉井が三塁手に固執していることを知らない隠九条だったが、杉井が守備・打撃・走塁……全ての練習に執念といえるほど必死に取り組む姿を間近で見ていた。
「俺は、何をやっているんだ……ッ！」
熱い滴が目から溢れ出てくる。
テレビの内容を隠九条は思い出す。

ゲッツーとなり落ち込んでいるだろう。観客から罵声を受けて傷ついただろう。それでも切り替え、目の前のプレイに全力を尽くす同期。対して自分を見失い酒に逃げようとした自分。

「やってやる！」

小さく、それでいて重い決意がこもった声で……隠九条は誓う。

「同期のあいつがあれくらい練習に打ち込んでいるんだから俺もやってやる！あいつに負けない、あいつと同じ目線に立てるくらい、あいつに認められるくらいに……あいつと同じ舞台で立つことが許されるくらいに……努力して、這い上がってやる！」

何としても杉井と共に一軍の舞台へ。

そう心に決めた隠九条は変わった。真剣にやっていた練習を必死の覚悟でやるようになった。

三振や凡退で罵声を浴び、普段なら落ち込む所を〝あいつならその場では悔やむだろうがすぐに切り替えたはずだ。反省は後で出来る〟と自分を切り替えるようになった。

杉井と同じ舞台に立つ。その決意が〝結果を出さなければならない〟という焦りを無くし本来の自分を取り戻させた。

その後二軍で好成績を残した隠九条は一軍に復帰。一軍復帰の三日目にはガーディアンズの守護神・具志堅城高（ぐしけんじょうこう）から同点のスリーランを放ったことを皮切りに、勝負強さを発揮。

どこでも守れて最低限の仕事をする同期の杉井貴士とともにスイートエンジェルズに欠かすことの出来ない選手へと成長していくのであった。

外伝　青津弥子物語

青津弥子（あおつやこ）。有賀草悟（ありがそうご）と共にドラフト５位で入った高卒女性投手である。

プロ野球で女性が活躍できるようになって十数年。高校野球でも女性も男性とともに　甲子園に出場できるようになった。

彼女が入学したのは弱いとは言えないが強いとも言えないとある進学校だった。

高校２年の時、彼女は甲子園出場を果たした。

試合は２対０の完封負け。一回戦敗退したものの甲子園常連の相手だっただけに彼女の名を知らしめるきっかけとなった。

高校三年時は春夏ともに甲子園の出場はおろか準々決勝で敗退してしまったが、高校時代から弥子の才能に気がついていたスイーツはドラフト５位で彼女を指名した。

一軍昇格は果たしていないものの、二軍では一軍昇格間近な十分な成績を出している。

そんな彼女にはプロの世界に飛び込む前から抱える悩みがあった。それは女性にしては足が太いということである。その悩みの原因は彼女が高校時代に遡る。

彼女の学校は山の中にあった。ほとんどの学生はバスで通学しているが貧乏な彼女はバスで通学するお金がなく仕方なく自転車で通学していた。

マウンテンバイクなどではなく、ギアチェンジのなどない普通のママチャリである。彼女はそんな自転車で毎日学校に通っていた。

急傾斜の坂道は彼女に強靭な足腰を与えた。ピッチャーにとって大事な下半身を。同時に彼女のコンプレックスとなる足の太さも。

紅白戦以降、冷泉冬狐（れいぜいとうこ）に魔球を教わった弥子だったが、冬狐が親友の日野陽子（ひのようこ）と二人三脚で２年の歳月をかけ編み出した魔球、死神の鎌を投げることはできなかった。

そもそも冬狐は成人男性よりも体格がいい。小柄な弥子とは最初から土台が違っていた。

自分では死神の鎌は投げられない
そう悟った彼女はある日あることに気づく。冬狐のような上から下に落ちる投球が投げられないのならば下から　上に上がるボールならどうだ　と。
　思いつきとも言える考えからサイドスローからアンダースローに投球スタイルを変えた。
彼女は黙々と練習に励んだ。
そして冬狐から魔球『死神の鎌』教えてもらった半年後。
ズバンッ！
弥子が投げたボールが陽子のミットに収まる。
「……」
弥子の投げた球に、陽子は驚きを隠せなかった。
その夜。陽子は親友の冬狐に電話をかけた。
「冬狐。　私たちの2年間ってなんだったんだろう……」
「え？突然どうしたの、陽子」
いつもニコニコ見せる笑顔の裏で冷静に物事を見定める親友の放心した声に、名前と裏腹に熱い激情を持つ冷泉冬狐は戸惑うしかなかった。
青津弥子が一軍に上がる日は近い。